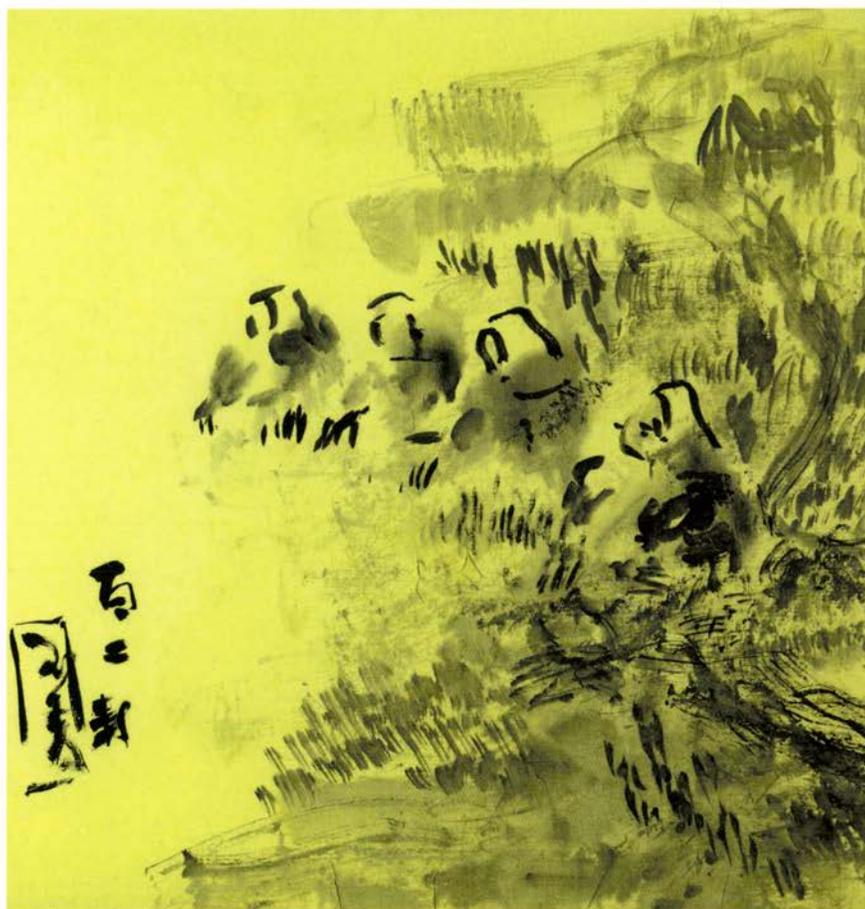


川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成十七年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻九三七号



日川協加盟

No. 937

同人特集「思い出の歌(曲)」

六月号

謹告

本社名誉主幹橘高薫風先生は、平

成十七年四月二十四日午後六時二十

三分 呼吸不全のため刀根山病院で

逝去されました。七十九歳でした。

ここに生前のご交誼を感謝いたします。

なお『川柳塔』七月号を橘高薫風

追悼特集号といたします。

川柳塔社

橘高薫風名誉主幹を偲ぶ会

日時 七月七日(木) 午後一時から午後三時まで
会場 アウイーナ大阪 三階 葛城

会費 四〇〇〇円(幕の内)当日いただきます
申し込み制・六月二十日までに添付のハガキで

路郎忌・薫風名誉主幹追悼川柳大会

日時 七月七日(木) 偲ぶ会と同じ会場
午後五時開場・六時締め切り

挨拶 (社)日川協 本田 智彦氏
川柳塔社 板尾 岳人

おはなし 川柳塔社 波多野五楽庵

兼題 各題二句・読み込み可・席題なし

「薫」川柳塔社 八木 千代選

「風」時の川柳社 小松原爽介選

「島」ふあうすと川柳社 泉 比呂史選

「路」番傘川柳本社 牧浦 完次選

「似」番傘川柳本社 磯野いさむ選

「子」川柳塔社 河内 天笑選

川柳塔社

会費 一〇〇〇円(粗供養呈)
偲ぶ会・川柳大会ともにお供え拝辞

嗚呼 薫風先生

河内 天笑

薫風の中鬣を靡かせて

俊平と弥次喜多宇宙膝栗毛

雲の峰塔四天王揃い踏み

どんぐり川柳会とは、羽曳野病院で川柳と出会った人たちで構成する川柳会でありました。近鉄アベノ百貨店の東南約百米に当時「以和貴荘」という府職員の新泊施設があった、どんぐり川柳会の会場に当てられていました。

川柳かけ出しの私は昭和43年から45年にかけて、年に二、三回この会にお邪魔をしていました。そんな或る日のこと、会場入口のところで紺の背広を着た人に清水白柳師が、「あんたこんなところへ出てこんど、家でゆっくりしときなはれ」と親しく労るように言って居られました。その人が橋高薫風先生だったのです。白柳師のことはをそこそこ背などで聞き流して席題の披講をされる時、「こんな葉書く

れましたんや、切ったかくんぶう、やなんて言いよつてなあ」とまんざらでもない表情で、披講前の会場にさわやかなユーモアの風を吹かせてくれました。

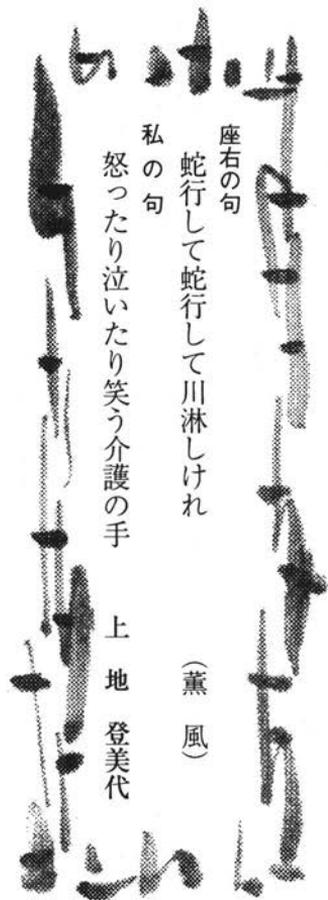
初対面の私には何のことか事情が分かりませんでした。先生は直前に胃を半分切除されていたのです。その日聞き漏らしていたハガキの発信人を、その後何百回と先生にお会いしながら、遂にお聞きするチャンスがないまま遠くへ行ってしまうました。この軽いウィットに富んだ激励のことは贈る先生の友人を思い浮かべますと十指に余りあるのですが、さし当り当時ふあうすとの重鎮だった、室田千尋さんか、川柳塾の塾長をされていた寺尾俊平さんのどちらかではなからうかと推測されますが、永遠の謎になってしまいました。その日の席題「花」で私は、

おむすびの上にもさくら散つてくれ

が秀句に選ばれました。

当時、ことあるごとに集って麻雀をしておられたのですが、室田千尋さんが一番先に旅立たれてさあ大変、メンバーが足りません。麻雀にはズブの素人だった私を千尋さんの後釜に入れて、好啓、俊平、薫風、天笑の新メンバーが出来ました。その後私は三人の先生方に、しこたま中国語をしごかれることになりました。いまごろ天国では元のメンバーで心おきなく麻雀をやって居られる事でしょう。

合掌



座右の句

蛇行して蛇行して川淋しけれ

(薰風)

私の句

怒ったり泣いたり笑う介護の手

上地 登美代

川柳塔 六月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 嗚呼 薰風先生

河内 天笑 ……(1)

桜よし

兼原道夫 ……(2)

川柳塔(同人吟)

河内天笑選 ……(4)

川柳塔の川柳讃歌(6)

木津川 計 ……(54)

自選集

奥田みつ子選 ……(59)

水煙抄

奥田みつ子選 ……(80)

■特集 思い出の歌(曲)

天正 千梢・井上 桂作・高島 啓子・福士 慕情・小玉 満江

岸本 孝子・安食 友子・乙倉 武史・吉岡 修・白根 ふみ

榎本 舞夢・園山多賀子・毛利 幸・富田 蘭水・丹後屋 肇

岡本 久峰・成重 放任

田中正坊 ……(90)

■新刊紹介『一句一姿』

波多野五葉庵選 ……(91)

愛染帖

波多野五葉庵選 ……(91)

桜よし

兼原道夫

鎮魂の松杉桜桜よし 薰風

この句は、「川柳展望」創刊号(昭和50年5月1日発行)に、「鎮魂」と題して発表された特別作品25句の2句目に置かれた句である。「川柳展望」2号では、窪田久美子氏が、「この極端なまでに凝縮された、それゆえ余情十分な一句はタイトルに用いられていることを見てもおそらく作者快心の出来なのであろう。「以下略」と評していらっしゃる。

ところが、この句、実は句集には収められていないのである。七年ほど前のことだが、なぜ、「鎮魂の」句が句集に収められていないのか、氏にお聞きしたことがある。「あつ、なかつたか。抜けてたんなやなあ。ボクはいいかげんなどがあるさかいに」というような趣旨の御返事。何か理由があつたことだと思ひ込んでいたものだから、驚きました。さらに驚いたことには、この句は、氏が住まわれている豊中の桜塚のことを詠んだ句だということです。桜塚には塚が三十六塚あって、桜の名所。死者の魂を鎮めるのには、桜塚の桜が最もよいという意味。だから、この句は御自身の住んでいる土地を自らほ

茴香の花

政岡日枝子選

(94)

一路集「点」

大塚節子選

(96)

「たっぷり」

中井ゆき選

(98)

初歩教室「サイズ」

初山隆盛選

(99)

秀句鑑賞「同人吟」

三宅保州

(100)

水煙抄

春城武庫坊

(102)

蓮の台もおしどりで 松川芳子さんを偲ぶ

板東倫子

(104)

西谷大吾さんを悼む

都倉求芽

(105)

中田あい子さんさようなら

相馬一花

(106)

五月本社句会

小糸昭子

(107)

各地柳壇(佳句地十選/近藤佳子)

楓葉・希久子

(108)

柳界展望

山岡富美子

(113)

六月各地句会案内

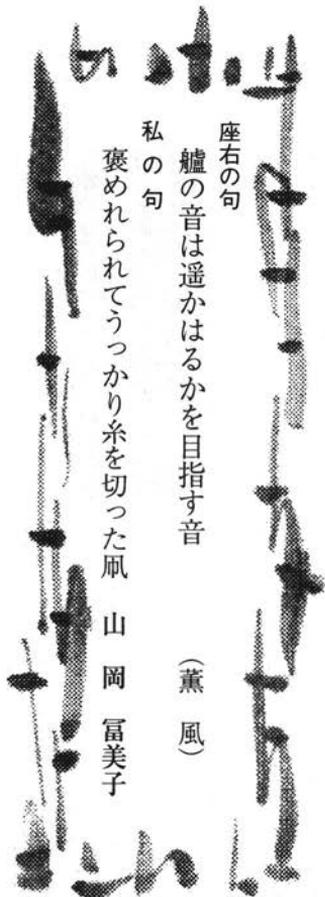
山岡富美子

(127)

■編集後記

山岡富美子

(130)



座右の句

鱸の音は遥かはるかを目指す音

(薫風)

私の句

寝めれられてうっかり糸を切った風

山岡富美子

めたたえた句であるともいえる。

秋が来て笛は太鼓を恋しがる

この句の笛が細身の作者御自身、太鼓は御親友だった寺尾俊平氏を見立てたものだど知ったときも驚いたが、同様の趣旨の句だったのである。

「川柳展望」は、創刊号だけ持っていないので、天根夢草氏にお願いしたところ、「鎮魂」のページをコピーして送って下さった。調べてみると、「鎮魂」25句の中で「愛染」(昭和61年刊行)に収められた句は14句あり、それらの句は、「古稀薫風」「橋高薫風川柳句集」にも収められている。「喜寿薫風」は300句所収の句集だが、そのうち「鎮魂」の句で載っているのは、次の3句である。

父親の懐ふかき風の糸

入学と卒業姉妹ピアノ弾く

孔雀羽根ひろげくると能役者

「鎮魂」の句は、句集に収められていないが、「桜塚」を詠んだ句が「橋高薫風川柳句集」の「花径」に、そして「喜寿薫風」にも収められた。初出は、「川柳塔」平成9年5月号である。

三十六塚さくらが咲いて桜塚

この句より20年以上も前に、「鎮魂の」というすばらしい句があったことを顕彰したくて、この小文をしたためた次第である。



河内天笑選

八尾市 生嶋 ますみ

ぼろぼろの辞書勲章に喜寿を越え
苦労した分をまとめて楽がきた

年金のおかげ ばあちゃん翔んでます

微笑する遺影にたこやきをひとつ

生き甲斐のひとつに無駄を買うことも

歳なのか欲が年々深くなる

豊中市 吉田 あずき

青い空爛漫の花有難う

古い殻何度剥いてもまだ残る

正解が鼻もちならぬこともある

この辺で梯子をはずすのも情け

善人に囲まれ欠伸ばばかり出る

ホタルイカ命何匹食べたやら

富田林市 池 森 子

トリックを見破るジョーカーを放つ

大中小そんな器を持ち歩く

合掌の指から白い鳩が翔ぶ

開けゴマ女の運はこの辺り

いつまでのひよこかニートにパラサイト

駆け引きの潮目を掴む風が吹く

藤井寺市 楠 昭子

澄んだ瞳で見られドキドキしてしまう

嫁が来てハイカラ食に馴らされる

雨上がり猫十匹の足の跡

宅配便へ象牙のハンコ押している

知恵のない証拠に何度でも転ぶ

楽天家らしい豪快に笑う

鳥取市 有沢 せつ子

鍋物が多くて楽な冬だった

筍に落 旬ものに手間がいり

惜しみなく着る心まで老いぬよう

口紅をつけて女をさばるまい

薄着して懐炉を貼って行く花見

幸せの基準を下げて羨まず

東大阪市 笠井欣子

満開の花くぐりぬけ耳鼻科まで

無洗米洗いたくなる主婦の性

小間切れの時間上手に翔んでみせ

順調に老いて居ります物忘れ

しっかりと減り張りつけて遊んでる

後はない今日の一度を大切に

出雲市 佐藤治代

胸張って生きて時々蹴躓く

春愁やひとりの医師に恋をする

目の届く位置におきたい好きな人

真つすくな道で出合った嫌な人

恋の壺あふれそうです 春うらら

笑ったら少うし軽くなる心

大阪市 神夏磯典子

ライトアップ昼には見せぬ花の顔

梅干しはいつも酸っぱい顔してる

ほら吹きが来てから急に活気づく

こっそりと隠して置場もう忘れ

鯉のぼりどうぞ離婚をせぬように

悪口になると用事を思い出す

堺市 石堂潤子

せつせつせ仲良しでした三姉妹

甘茶仏お風邪を召しませぬように

五十年まだまだ確か蝶番

仮の世の看るも看取るも夫婦きり

ふる里がふたあつ私疎開っ子

風邪引いたらしいな熱の味がする

寝屋川市 籠島恵子

笑わせながら励ましながら娘と電話

まなざしを迷子にさせているさくら

春はことさら花を咲かせているノート

花もよう心もようにあるパズル

迷い迷っていつもと同じアメリカン

整理整頓 頓がとつてもむつかしい

和泉市 中川楓

わが家つていいな菜の花葱坊主

別に用ないがと娘電話くれ

入試終え直ぐケイタイの指になる

先のない議員がまとめ新憲法

庭の花供えて母に見てもらう

うきうきと春のスカート蝶結び

鳥取県 谷口次男

赤信号堂々わたるご老人

偽者のピンククレディーがドサ回り

悪物にされた花粉の憤り

鉛筆を借りた友達忘れない

びっしりと書かれ手帳は苦しそう

国策に日本海は荒れ模様

京都市 高島啓子

仁王さんあれで笑っているのです
トンネルをいくつも抜けて夢を追う
軍手して半日だけの庭仕事
白旗のかわりにビール出している
玉葱を微塵に切っている悪夢

京都市 都倉求芽

たそがれのさくら散らして風の舞い
花冷えの一日靴をやすませる
天秤にかける満開と杉花粉
少年期夢中にさせた講談社
出てこない名前コーヒーかき回す

亀岡市 井上森生

日中は論語も漢字も解るのに
ホリエモン日本を変える新芽かも
百均に何と爪切りの左利き
寝転びのテレビ体操思い付く
所詮みな天変地異の渦の中

大阪市 西出楓楽

熱帯の雨は縦横斜めから(南西諸島紀行)
三線の音色こころの棘を抜く
竹富島時は流れを止めたまま
分けて欲しマングロープの生きる知恵
小浜島原風景のたたずまい

大阪市 本間満津子

しよがないな老化は医者も治せない
長寿の夫婦誓い守って支え合い
たとう紙思うは在りし日の若さ
一輪咲いて攫われてった沈丁花
花盗人花を愛する人でなし

大阪市 古今堂蕉子

宙空を白いこぶしの舞う舗道
透明妻いつ出たのやら帰るやら
花粉症 吞んで歌えばなおるらし
パンコンの中でおぼれている私
笑ってる口元のように今日の月

大阪市 川原章久

日の丸を揚げると目立つからやめる
お守りまで自販機でとは味気ない
極楽だ向こう鉢巻露天の湯
年金でぬくもつてきた十五日
賑やかに笑いの種のアミダクジ

大阪市 大川桃花

花吹雪蝶蝶も花の貌になり
バックから器に移す老いの膳
たんぼぼの花は残して芝刈り機
ボランティア自分のために続けてる
収入の有無は言わない消費税

大阪市 川久保 睦子

大阪市 安達 はじめ

ストレスの吐き方習う金魚鉢
ラストダンス踊ってふっと消える夢
ヨン様のキッスはたぶんキムチ味
我が道を行けばデコボコだらけなり
ワープロの便り本音を隠してる

大阪市 小糸 昭子

山焼きの後で生まれる青坊や
いかなごがもう着きました春が来た
四月馬鹿本気になって怒ってる
悔しいがあの才能は越えられぬ
握り合う手が熱くなり火花散る

大阪市 岡本 久峰

四島に何故しがみつくてかい国
李承晩の身勝手甘く見たつけが
戦争の手記をつのついているテレビ
医者知らず神に感謝の手を合わす
生かされて四季のうつろい嘯みしめる

大阪市 小泉 ひさ乃

穏やかな空気になって喜寿と古希
少数の意見も入れて地を固め
歳ですねただそれだけの初診料
方言を笑いのネタにして稼ぎ
世の中もごみ分別もややこしい

豪勢な扉もローンの音がする
リモコンを妻が握って家平和
扉を開けて迎えてくれる孫がいる
冗談が本気になってゆく慕情
八十歳まさかの恋が実を結び

大阪市 津守 なぎさ

朝採りの筍順におすそ分け
雪解けの便りだんだん北へゆく
露地のバラ精一杯の陽をもらう
さげるたび重さが増える旅準備
知り合いに偶然であう俳画展

大阪市 津守 柳伸

太陽に感謝みどりが炎えている
ジーンズの破れもナウい腰の鍵
銅像の武蔵は若い街おこし
白兎海岸 貝殻節を教えられ
童心に還る蒜山観覧車

大阪市 熊代 菜月

怒鳴りつつ後悔してる父が好き
他人ごとでなくなつて来た物忘れ
弱虫の私を叱る影法師
リーダーになれぬ私の甘えぐせ
シャボン玉はじけるまでの淡い夢

大阪市 渡部 さと美

春眠の脳叩くため朝ヨーガ
列島にもぐら叩きのごと地震
銀盤も世界に誇る美女ぞろい
足腰のゆがみ心のねじれかも
くつついた車中の恋は超危険

大阪市 玉置 英子

海賊のにくさも憎し人を拉致
おそく咲きサツと満開慌てさせ
デザートを食前に摂る血糖値
お祝いのお金よく出ていくも春
醍醐寺にクローン桜の咲くやよし

大阪市 近藤 正

空き缶を拾う人あり花の宴
フジテレビ駆け引き上手い後手の先
アメリカの基地も丸飲みする日本
五重の塔千年活かす心柱
消費税上げる筋書き準与党

大阪市 西川 更紗

人生の節目に迷い付きまとい
そのたびに懲りてるはずの違反金
電話鳴る先ずはテレビを消してから
想い出の栞に過去が甦る
湯舟まで携帯電話追って来る

大阪市 中村 叡子

夫婦旅 財布一つで気兼ねなし
久し振りにまた負けるのに夫と甚
八十になればお医者も薄情な
挿し木したあじさいみんな若芽出し
みずみずし芹を見つけて粥を炊く

大阪市 清水 絹子

赤ちゃんの笑みに崩れた四面楚歌
流水も花の便りも日本地図
花便りせめて仏とカンピール
水茄子の艶に呼ばれて舞い戻り
唐突の長姉惑う焼香順

大阪市 川端 一步

春琴抄読んでめしいの亡母想う
よく聞けば注意されてる讚めことは
九ちゃんの歌が救った雪の山
亀さんよみどりの風だ首を出せ
桜葉の眠りは冬の三月だけ

大阪市 小谷 集一

浪花節人生板についてくる
最初はグー敵か味方かわからない
打てばすぐ響く妻には内緒です
頑張りを労わりの目で見られてる
開き直ると斬新な知恵が出る

大阪市 星野 きらり

鬼の面かぶりたくなる時もある
まだ河豚を食べる冬を惜しみつつ
子等の声聞こえなくなる街空ろ
時どきは初心に戻る風を呼ぶ
桜咲く便り届ける北の国

大阪市 榎本 日の出

病院が姥捨山になってきた
百までは薬飲んでも生きてやる
腹八分おやつたつぷり足している
菓草の料理味わい胃の掃除
咲き終えた花につこりと深呼吸

大阪市 岩崎 公誠

気分屋で神への願い日々変わる
比べると生れた時から負けていた
軸足の揺れるはなしに芯がない
青ランプ点いているからご用心
銀行にゴム長で来る水道屋

大阪市 鶴田 遠野

子守唄ハートの鍵をそつと開け
閉じ込めた恋が時々ふてくされ
以心伝心春風に恋乗せてみる
一滴の情けに酔った火の女
夜桜も訳あるひととある歩幅

大阪市 前 たもつ

夜桜に酔うて候 西の丸
二つ三つ妻若がえる花の下
青テントゴミの山にも花吹雪
たつぷりと満開見せて春の雨
惜しまれても桜のように散れぬほく

大阪市 松尾 柳右子

麵よりもスープにこつてる勝ち組だ
寒い夜の屋台ラーメン庶民の囃
カラフルな衣料に春みる中国製
予定表次次あると勇氣湧く
雨音に雨のブルース口ずさみ

大阪市 津村 志華子

幾つもの峠を越えて来た花野
気楽さも侘しさもありひとりぼち
立前と本音女の小賢しさ
手さぐりで湿布ぐすりを貼る独り
気の毒にわたし一人の田舎バス

大阪市 伊藤 博仁

デパートも静かさがあり美術展
とんぼりは矢張り夜がよい遊歩道
上かん屋句碑遠ざける財布尻
ピンはねた焼き芋喉が通さない
何事もなかつた顔でプイと出る

大阪市 町田 達子

あれこれと花の蕾も開花待ち
犬までが少しはしゃいでいるようだ
まだ寿命延びそう春風多弁なり
思い出にふけておれぬ忙しい世
新聞が次次私を追い立てる

大阪市 奥村 五月

フオークより屋台の串が性にあう
混浴に驚きもせぬおばあちゃん
誘われれば断りきれぬ縄のれん
送られた極楽からのバスポート
あらふしぎ百均で見るお金持ち

大阪市 井丸 昌紀

夕さりて無駄に大きな日が沈む
自動改札行きも帰りも裁かれる
監督が動き回って負けが込む
スタイルを崩せぬ人の生欠伸
かすみ草チームワークの勝利かも

大阪市 野田 栄呼

兄弟の意識で集う同年会
家の中すっかりしてた無い時代
満足度ない服ばかりあふれてる
口達者親に似ぬ子に苦笑い
特大の雹に泣いてる露地野菜

大阪市 榎本 舞夢

春の音雪解け道のランドセル
春風が詰まった脳を軽くする
同窓会私のボケに花が咲き
藍ちゃんに暮れ藍ちゃんに湧くゴルフ
ライブドア フジの株価がよく動く

大阪市 板東 倫子

桜さくら泣きたいほどに美しい
防犯ベル持つて今日から一年生
生きて来た見て来た戦後六十年
酔でも飲むお腹の脂肪取るために
ペイオフへ豪ドル債券買うOL

池田市 栗田 久子

反日の怒声日の丸へと向かう
突き合わす角はわたしから矯める
それとなく手を合わすのが癖となり
じっくりと味わう今朝の粥一碗
ネムの花閉じて日暮れを告げている

和泉市 西岡 洛醉

黙々と唯ひたすらに喜寿の坂
喝采を妻に託して夕焼ける
善の道明日は野心の歩幅かも
畳ある暮らし日本の心かも
満足の五体が初夏の風に触れ

和泉市 横山捷也

乳房を失いし妹の歌を読む
独酌の酒が美味しい妻が留守
一ツだけ特技を持った友が逝く
窓を開けベッドの母が見る桜
妻と娘の会話が弾む試着室

泉佐野市 山本蛙城

エレベーターの二人他人でいる無口
またかいな昔自慢を聞いてやる
地震予告ぐらいで買わぬ週刊誌
職業欄笑い配達人と書く
旨そうな名の茅渟ちやうの海見て暮らす

茨木市 藤井正雄

自己嫌悪まじめの裏が疼き出す
巨人倒して快感のジョッキ干す
剪定の腕伸びて空抱え込む
贈り物届いたらしい愛想良さ
反応の変化別れを予感する

大阪狭山市 矢野 梓

巢立つ日がお別れの雛育ててる
スイトピー門出へエール贈ってる
花粉症やさしい雨を待っている
少しずつみんないたかくバイキング
いらぬ事しゃべって礼を言い忘れ

交野市 山川 日出子

海賊の餌食から船長無事帰還
ロボットが愛地球博賑やかす
花まつり甘茶うれしいお釈迦さま
鮎あなや海老戻ってきたよ里の川
リヤカーが売りさばいてる海の幸

交野市 田岡 九好

師のように仰ぎ見る司馬遼太郎
今はもうおんなを仰ぎ見る時代
エンディングノートを書いて旅支度
ご近所を抜き足で出る旅鞆
迷惑をかけないというこの一事

柏原市 永浜 加津子

しみじみと一年無事に花と会う
招かざるバースデー来てプラス巻
オウンゴール情け容赦もありませぬ
差し伸べる手を振り払う自尊心
お天気も人の心も乱気流

河内長野市 坂上 淳司

由緒ある名だ合併はするでない
地名変更賛否を墓に尋ねたか
甘えなはんな わてが死んだらどうすんの
判官も家では妻に裁かれる
電車で唯我独尊化粧室

河内長野市 水谷 正子

喜寿過ぎて夫婦げんかも低バワー
入院の十日で春が夏になる
なりたくはないものに先ず認知症
想定外 反日デモが過熱する
一寸した意地張りをして四面楚歌

河内長野市 植村 喜代

行けないと なお行きたくて旅の夢
魂をやるほど善人とは言えぬ
今日もまたテレビと喋って元気です
また掛けるね電話の会話有り難い
信じたいから心の手をつなぐ

河内長野市 井上 喜酔

妻と娘と犬まで連れて行く花見
全快の患者が推薦する名医
カウンターあけて待つてる上得意
東洋で小さくなっている日本
竹を踏みどきどきしてる土踏まず

河内長野市 村上 直樹

踏まれてもなお踏まれても吠くすみれ
マンモスに太古の夢を聞くロマン
時効には出来ない悔いの果食う胸
地下鉄を出て蝶々と鉢合わせ
通り抜けやはり屋台に金縛り

河内長野市 山岡 富美子

自画像に甘えの跡のある歪み
スタイルのラフな男に油断する
マスクから零れた嘘が風になる
一步引くことを知ってる温い風
善人のマスクときどき痒くなる

岸和田市 原 さよ子

向き合ってやんわり論す母の愛
ハウス育ち旬の味覚を忘れさせ
コンビニの味覚に馴染む共稼ぎ
踏まれても焼いても芽吹く草の意地
ブランターにねぎとパセリは主婦の知恵

岸和田市 岩佐 ダン吉

パンコンのごときに頭下げている
反対はひとり冷たい目を浴びる
ごはんよの声真つ先に猫が来る
人間なら一度ヒロシマ見てほしい
木簡に団結せよと書いてある

岸和田市 亀井 皎月

女房を我が家の主と見てるポチ
ガッチョです大阪湾を食べてます
薬にも毒にもならぬ妻の愚痴
客の来ぬ部屋にも一花生けられる
かきを入れ湯豆腐鍋が味を増す

岸和田市 雪本 珠子

願い事たくして飛ばすシャボン玉

マイペース人が色々言おうとも

ときめきの心が若さ作りだす

好奇心錆びないように磨きかけ

人間が地球のバランス崩してる

岸和田市 中島 寿海

峠茶屋今の呼び名は道の駅

肥えたくていろいろやってもつとやせ

肥え方を教えてほしいやせ蛙

髪の毛が減るほどふえる顔のしわ

梅雨時とてもドライな若い人

岸和田市 土橋 房枝

国訛り一つ身につけ帰阪する

見送りの母は泣いても子は泣かず

九州の端まで百均安堵する

単身の男の料理腕を上げ

花便り花粉一緒につれてくる

岸和田市 長谷川 呂万

アルプスの駅に懐かし赤ポスト

君の癖可愛くなってプロポーズ

古里の味自然薯はこの粘り

傷絶えぬ男児三人置き菜

ポストまで歩きなさいと妻の下知

岸和田市 井伊 東吉

人間の思いのままに咲かぬ花

釣り池の桜背にして太公望

待たすだけ待たせた桜日持ちせず

マンシヨンのペランダ覆う布団干し

物要りの五月連休やってくる

堺市 矢倉 五月

大逆転あれはやっぱり夢でした

文句言い過ぎたか風邪に声とられ

ITにカゴメカゴメの鬼にされ

美しい主治医もどなる不摂生

さり気なく別れ顔色気にかかる

堺市 近藤 豊子

食べざかり厚くて熱いたまごやき

氷山のように卵白あわだてる

ほうれんそうオムレツまくらにひとねむり

時はながれ町の灯うつる明日香川

ヒヤシンス十二単をきて生まれ

堺市 志田 千代

ついてくる方向音痴とも知らず

おばちゃんは見て見ぬふりが出来ません

大丈夫バツイチ同士なんだから

元気な人元気な犬をつれている

母の日にもらった軽いハンドバッグ

堺市西村りつえ

逆撫でも笑いとはした花の下

ソプラノで響き高らかペアカップ

テレシヨップお世辞並べる元スター

見間違いトイレで押した非常ベル

可愛くてチューして食べるさくらんぼ

堺市源田八千代

役割を無難にこなし当り前

縁の下の力持ちだと甘んじる

ぱっと咲きはかなく散って無常感

新緑を仰ぎ春愁吹っ切れる

団塊の世代パワーへよいしよする

堺市加島由一

身の程を知って男の片思い

ケーキ入刀この二人なら大丈夫

百均で知る商売の奥深さ

美人にはとにかく先に声かける

文武両道いまカラオケに凝っている

堺市山本半銭

振り向けば駆け足だった古稀の道

メモをした一字スランプ抜けるかも

老人も無縁ではない世の動き

骨粗鬆症 危険信号また増える

夜桜に別れの刻が忍び寄る

堺市國見蘭香

桜ふぶき豊かなかおり深呼吸

雲間から月も覗いて花見酒

混合の色ふくらます種を播く

チャン付けで呼ばれこそばい七十路

約束はしないストレス溜まるから

堺市柿花和夫

熟睡の母を見舞って去り難し

ナツメロ集持参で母は入院す

車椅子の母とひばりの歌うたう

これ以上老いてくれるなお袋さん

問い詰めて女は愛を壊して

堺市村上玄也

意味もなくやたらと使う流行語

皺くちやの札は券売機も嫌い

伝票を奪い合ってるレジの前

引っ込みがつかなくなった小さい嘘

絶景を台なしにしたのっぴぱル

堺市神原文

ストレスを溶かしてしまふ花菜漬

春らんまん瞳の中を溢れそう

春雷にはっと目覚める怠け癖

春潮と戯むるように野球観る

乱反射向こうで敵が笑ってる

堺市宮本かりん

ひと駅を歩いて春の音を聞く
ゆずらない二人ジャンケンで決める
かすり傷に包帯今日は怠けとこ
波風にもまれて傷が癒される
星たちの光遮る街の垢

堺市河内月子

筍の匂をいっぱい食べてます
苦い味あれこれ春を食べている
益虫のアシナガバチに軒を貸す
にがそうに見えてわりかた温い人
阪神が勝って祝盃おまけする

四條畷市吉岡修

ルールから少し離れた甘い声
中吊りは情報源で見のがせぬ
これしきの闇ならなんの馴れている
ひっそりと芽生きひっそり消えてゆく
携帯の数だけ呪文飛んでいる

吹田市山本希久子

水無月の風初夏のリズムに乗って吹き
宿題を溜めて夫婦の旅つづく
老骨にチクチク刺さるカタカナ語
裏方の役が一番よく似合う
何となく恋という字に憧れる

吹田市太田昭

まだまだと思うゆとりも消えかける
頼まれていやと言えない弱い性
亡き父の金釘流を懐かしみ
雑魚だから少しきれいな水に棲む
疑心暗鬼人間を避け鳥を飼う

吹田市木下敏子

せいっぱい咲いて綺麗にさくら散る
暮参り眉をやさしく引いて出る
春風にさそわれ揺らぐチューリップ
花吹雪煩惱一つずつ捨てる
痛いところやさしい声で突いてくる

吹田市岩屋美明

虹ばかり見ている妻の小物入れ
老木も背筋を伸ばす五月晴れ
太陽の真下みどりの風と住む
日本の国技歯痒い金太郎
ためらわず今日はお子様ランチです

吹田市穴吹尚士

冤罪と被告が主張する浮気
御曹子たまごのくせに頭が高い
禁煙のそばで吸ったりすすめたり
買うものも金もないのに百貨店
人間は神に裁かれかけている

吹田市 須磨活恵

不確かな記憶の中で生きている

溝ひとつ越えて女は母になる

目分量でパツシリ母の塩加減

告白をそつと促す花みずき

立つ時も座る時にもどっこいしょ

吹田市 大谷篤子

ログハウス コーヒー館にある憩い

何思うのか百年の木の校舎

腹立てて見あげた空に宥められ

目減りする若さに負けぬ好奇心

晩春の風鈴揺れて人恋し

吹田市 瀬戸まよよ

古典から名をいただいて京和菓子

句碑だけは永久に残して法善寺

心ブラに老舗も人も面変わり

ナシヨナリズムなびく怖さを知る戦

ざつしりの本棚いつか捨てられる

吹田市 早川棲世

ウィーンホイリゲ娶ることなきひとと酌む(旅その9)

さのこ岩妖精きつとくる月夜(カッパドキア 2句)

生きるため鳩食い地下に棲む信仰

飛んでも飛んでも山飛んでも飛んでも荒地(アメリカ 2句)

有色人種が白人遊ぶ夜を支え

吹田市 野下之男

投石は孔子の国に似合わない

鯰にも余程不満があるらしい

越前に裁いて欲しい一億円

温もりを皆で分けあう囲炉裏端

サイレンであの日に還る戦中派

大東市 南原正和

飛び出す子ハットとブレイキ子を睨む

すれ違い国の訛に振り返る

とんとんと朝蜘蛛追つて掃除する

留守番の元気なうち旅へ出る

鶯の声に揺すられ眼を覚ます

大東市 児玉蛙

故郷の香りが風につて来る

悩みごとない友の筆跳ねている

独りでも独りの味で食べる夕

せまい庭愛して花も揺れている

化粧下嘘も本気もかくしてる

高石市 浅野房子

いざと言う時の味方は誰もない

また一つ葉増えたよお立ち合い

ニアミスを避けて遠回りして帰る

休日がつづきひとりをかみしめる

くよくよとくよくよと取り越し苦労

高槻市 生田 義一

大相撲いつまで国技と言えぬやら
ひよつとして双葉の記録破るかも

好きやねんいくら負けてもタイガース

持つべきは心おきなく呑める友

溝にポイ ペットが見てるそのマナー

高槻市 瀧 本 きよし

どこへなとお好きなどこへお行きやす

腰痛で初めて入院古希の朝

裏切られそれから深い溝続く

中身ない話を聞いて席を立つ

焼き鳥の垂れは家伝の祖父の味

高槻市 西 谷 治三郎

馬鹿にした古い術が気にかかる

点滴のポトリポトリに生かされる

ボーナスが机に立った頃が華

赤飯をチンして祝う誕生日

八十路坂 用心棒に杖を持つ

高槻市 井 上 照 子

里の山緑の杉の花ざかり

君が代を小節をつけて始球式

発火せず理性が勝った爽やかさ

旧友と里の地酒で仲直り

年金をなんだかんだと削り取る

高槻市 傍 島 克 治

いつまでもお若いことと言う嫌味

手の内は分つていると薄笑い

唯一つ持歌上司に先取られ

新入りも職場に解けて夏来る

安値で売った古書が高値で並んでる

高槻市 執 行 稲 子

居酒屋の河豚がウイंकして困る

涙腺が綻び春の泣きぼくろ

ほどほどにしたらと老いの趣味の数

平安の幽玄灯る常夜灯

振られても一途に想う一本気

高槻市 富 田 美 義

スピーチに聞き惚れたのは身内だけ

春の浜エイツと逆立ち若いパパ

清濁を泡立て生きて六十年

散骨の色はこんなか花吹雪

医療ミス消す先生の咳ひとつ

高槻市 左 右 田 泰 雄

思いやる心が胸に灯を点す

いたいけな仕草に募るいとおしき

拍子抜け持つて行き場のない拳

ハミングが手と手をつなぐ散歩道

金鱧も担ぎ出された愛知博

高槻市 江原秀夫

足あとの残らぬ今日も暮れてゆく
年を経てしぶとさ消えて輪に入る
まだ若いころと葛藤するからだ
ここかしこ痛み体はすでに梅雨
とほけてる言葉周りを丸くする

高槻市 乙倉武史

お隣と軋む歴史という重荷
反日の輩おごりのデカイ口
聞き齧り知ったか振りで恥をかく
脳の錆落とす積りの将棋盤
笑われて何んば吉本よく稼ぐ

豊中市 藤井則彦

友情を抱きははじめた老夫婦
ほうふらも必死になつて生きている
さっぱりと義理も返したホワイトデー
相席を乞われてハイとしか言えず
不透明な会社もビルはガラス張り

豊中市 安藤寿美子

マンモスのまつ毛を陛下見そなわす
天さえもきつと支える象の足
脇役のアドリブお客喜ばせ
四月ですカルチャー入学おばあちゃん
一陣の風が吹き消す物思い

豊中市 水野黒兔

腰痛はいつか目覚める休火山
春の風黄砂まみれを洗車する
ギガバイト パソコンが牙むきはじめ
丸いのは恋人の膝ほくの鼻
はっとして搭乗口はB29

豊中市 岸田知香子

引出しに私の履歴書残つてた
引出しに臍の緒大事に桐の箱
加齢とはこんなにきつい物でしようか
新入生 部活動誘一仕事

豊中市 山門タミ

親娘孫揃う夕餉に花が咲き
春の海かあちゃん釘煮忙しい
釘煮するイカナゴ日々大きなり
パツと咲き風にさそわれ散る桜
おしゃれ着でお散歩してる小さい犬

富田林市 大橋鐘造

人形になって四角い家に住む
胸叩くたびに財布が軽くなる
辞書にない答が何時かきつと来る
切り札はもしもの時にとつてある
傷つけぬようにやんわり言う意見

富田林市 中井アキ

善人の仮面を脱いでほっとする

仏には見せない私の女偏

モノクロの想い出マイクを離さない

合格の歩幅大きく風を切る

ライバルに勝ったと思う皺の数

富田林市 中崎深雪

米国人国靴の中で調べられ

初老には甘くせないフラダンス

真珠湾のブルーが抱く霊あまた

五分間で千の命が散つたらし

若き二人も黙祷ささぐ真珠湾

富田林市 片岡智恵子

医療費が衣料費よりもかさむ歳

細ければ座れる席が空いている

もったいないばあさんになり疎まれる

石橋をたたいて夢が遠ざかる

春の陽へ見送りされた隙間風

富田林市 稲川恵勇

振り返ってみれば人生まぜごはん

いい汗もいい恥もかきやつと古希

容赦ない鉄拳それも愛だろ

定年後妻へ上座をあげ放つ

物忘れ妻も私もええ勝負

富田林市 藤田泰子

老いらくのふたりを包む春がすみ

自己中のふたりにでバランスとれている

Eメール広くて浅いおつきあい

設計図バリアフリーになつていた

類は類呼んで陽気な五人組

羽曳野市 吉川寿美

刻は流れる人は挽歌をくり返す

入り日がストーンいっさいを拒むよう

眼を閉じて春の息吹を肌で受け

同居して互いの遠慮胃に溜まる

久しぶり握る手と手の温もりよ

羽曳野市 三好専平

笑いにもウソとホンネがあるらしい

一筋の大棹に泣く木偶の背な

海になり風になつたりするわたし

君が代に教室を出る子供たち

さしあたり埃まみれの本を捨て

羽曳野市 酒井一壺

大声を出してる方が負けている

お通夜へ語尾あいまいな人ばかり

旅帰り茶漬けを食べてどつと寝る

フルムーン パリーの宿で海苔茶漬け

愛一途 不安ばかりが先走る

羽曳野市 安芸田 泰子

花満ちてやさしい風で受胎する
紫陽花でポーズとつてる かたつむり
ベイオフの枠にあわてぬ預金帳
軽い気でした約束が枷となる
ぬくぬくと育つたらしいお人好し

羽曳野市 徳山 みつこ

同い年雛も私も鼻欠ける
ケチャップで破れを隠すオムライス
味噌壺に自負ゆつくりと醸成中
耐えられる体重ほどの重荷なら
ブレーキもアクセルもまだ踏んで母

東大阪市 谷口 義

ラーメンを音も立てずに召上がり
謎解きをしながら生きて来たような
握手したぐらいいで何も分からない
かげもかたちもおばあさんには違いない
螺旋階段 遊び癖ならついている

東大阪市 安永 春

スキップに赤いカバンの鈴が鳴る
どうでっか あきまへんがな花の宴
そんなこと言うても暇であきまへん
爛漫に風の誘いに桜舞う
役割りがやっと決まった椅子ごこち

東大阪市 北村 賢子

来年も共に見ようね この桜
誰か居る空間悲しみやわらげる
花の下別れを惜しむ手がぬくい
生き様は野の花のごとけなげなり
メールせず運転もせず生きてます

東大阪市 指宿 千枝子

動物園象と楽しむ小半時
話せない象がおねだり鼻でする
親しげに野菜売場の初対面
花粉症今日は負けない墓参り
ピイピイピイひばりが空へ消えてった

枚方市 鈴木 政子

気がつけば庭の木蓮花盛り
悔しいがグズの私は鍵かけ役
大学出て気楽に暮らす青テント
ぞくぞくと体育さばる保健室
柴桜ピンクの褥敷いたよう

枚方市 二宮 山久

六十歳の手習今日も絃をひく
川面ゆれ水鳥たわむる春うらら
ふと足を止めて春摘む野花かな
今日もまた生きる力となる散歩
妻の留守早目に飲みほすコップ酒

枚方市 森 本 節 子

春さきにひつこい風邪がつきまとい

法皇より二つも歳を恵まれて

桜だよりうれしい事のはじめなり

犀星の詩しのびつつ文旦むく

ヘルパーさんに美味しい店を教わって

枚方市 寺 川 弘 一

愛する人は鍵音たてずやって来る

同じ思いで見てももらえぬお月様

世渡り上手いつも風上だけに居る

レモンをしほる青春しほりきるように

脇役の妻に捧げる主演賞

枚方市 海老池 洋

燻し銀になるまで磨く私色

何処までも白に拘る冷奴

神仏へ人間臭い手を合わせ

本人を信じぬ身分証明書

新市名どこの辺りか分らない

枚方市 宮 川 珠 笑

父母はホームに任せ翔んでいる

年金にせめて笑顔で報いよう

女房に三尺遅れている散歩

健脚をもてあましてる認知症

期待したほどは飲めない妻の留守

枚方市 安 達 忠 央

うそばかりいう口紅が可愛らし

雁行をときどき落伍したくなる

凜として鶴の気品を持つ女

もめごとをみてみぬふりもよしとせむ

妻に花見せようと出す車椅子

藤井寺市 鴨 谷 瑠 美 子

産地などみなあいまいな野菜類

お喋りの集団妻も中にいる

真つ先に来たひと意欲感じられ

だらしない目じりになってラブソング

電線の雀は二十羽まで数え

藤井寺市 若 松 雅 枝

まだ元氣卒寿朝から庭掃除

七癖があつて人生面白い

血圧を計る日課を忘れてた

儲からぬ相談に乗るお人好し

たつぷりと小言を聞いて眠くなる

藤井寺市 太 田 扶 美 代

春 春 すこしスピードアップする

フィルムを二本ルンルの旅でした

正直な鏡にポロポロにされた

狂わずに死にされたかな藪椿

ガッツポーズ決める六十の今

藤井寺市 高田 美代子

ご好意へノーサンキューと愛想無し
頼られていたのはボクのふところか
何もかも捨てて素顔で暮らしたら
花冷えに桜もクシャミしてござる
通過する駅も数えてひとり旅

藤井寺市 中島 志洋

仕事より遊び上手な三代目
舌の根の乾かぬ内に白を黒
一文字結んだ口に見る決意
すんなりと来た訳でない共白髪
ライバルに同情される不甲斐なさ

寝屋川市 坂上 高栄

合併に村が消えゆく走馬灯
卓球は友好の音あめ笑顔
厚遇の改革市長痛し痒し
公僕の使命を何と心得る
もつたない愛エキスポの合言葉

寝屋川市 富山 ルイ子

代り映えせぬ顔だけど眉を引く
皆顔が違い見えて面白
しつかりとつなぐ家族の手がぬくい
真夜中の強盗ガラス割っただけ
軒並みに目を付けられていた空巢

寝屋川市 森 茜

少年の口髭青く空へ飛ぶ
赤ちゃんが掴む青空澄みに澄む
自分だけ大事な人が列を割る
同じこと言うたと途中から気づき
赤いばら贈った遠い日の罪よ

寝屋川市 太田 とし子

古都を舞う巫女でしずしずと春の宴
やわらかに仏間の煙もれてくる
この時間私の歴史に残したい
花見席ここに幸あり青テント
嬉しくて涙が先になる笑い

寝屋川市 平松 かすみ

姉として後れてならぬ待ち合わせ
従姉妹会初めまでも二三人
年長のチャイナドレスヘアアンコール(八十三歳)
傘寿来て余生へ探す茶飲み連れ
連れもうて桜日和に歯科治療

箕面市 出口 セツ子

春だから恋も魔物も動きだす
紅引いて変身しよう 春うらら
買え買えと誘惑春のウインドー
子の自立夫婦で通り抜けに行く
すりきれた手紙心に灯をともし

守口市 井上桂作

埒もない夢追いながら歳かさね
また地震日本列島どこに住む
車中化粧専用車ではものたりぬ
西の空黄砂舞いくる時季となり
暖冬は花の咲く日をおくらせる

守口市 石森利昭

難しい仕事は僕に言つてこぬ
妻の目の届く範囲で泳がされ
ミナミの灯つい足が向く春の宵
お揃いの服着て今朝もウォーキング
じいちゃんのお宝どうも偽らしい

八尾市 井尻民

深緑を浴びて汗ばむ万歩計
ネクタイの鼓動静めて面接日
シングルのわけは言わない母子手帳
肩書が取れた夫の背が丸い
朝取りのしっとり野菜道の駅

八尾市 長谷川春蘭

たれ髪の新任教師子の中に
散る花に風情無情の浮世かな
春愁に石仏の心わが心
青葉風 子等のさざめき今日の幸
遠山にまだ雪のあり春寒き

八尾市 高杉千歩

入学式感動のなき国歌斉唱
狭き門よう頑張った十五歳
至福かな家族揃うて愛知博
夜ざくらや仏にもらう花一枝
キャンバスへピンクのバラを炎える赤

八尾市 宮西弥生

疎遠だが花の季節のおつき合い
ジムトレの汗と青春しています
ペランダの干しもの白が多くなり
人間のものさし狂う日の座禅
風は春 今日あしたもみな許す

八尾市 内海幸生

カタログの花と違うが綺麗だよ
死ねばみな焼くだる僕の宝物
お造りにソースままよと食うひとり
汗出さず絶景眺めているテレビ
カメラ止め助けに行つてやれないの

八尾市 山本宏至

一筋の涙に心とかされる
にこやかに納税してるわけでない
まあいいか ひとり呟きなぐさめる
安物は嫌いだという負け惜しみ
居酒屋へ忘れた傘をとりに行く

八尾市 村上 ミツ子

柳友が逝く亡夫と同じ花の季に(わたの花正純氏急逝)
あかんやんかに だめじゃないのと切り返す

喜寿傘寿米寿卒寿と姑元氣
疑つて迷つて出口見つからず
ぼくじゃなく年金だけを当てにされ

八尾市 神原 まさと

叱られて眩くようにすみません
あたふたと昨日の無礼あやまりに
暴風のように音たて春が来た

ポケットに両手つつこみ見る桜
気にするな元氣な友は軽く言う

八尾市 宮崎 シマ子

八十歳の夫婦も憎み合うことも
負けるものか負けるものかと団子虫
内緒には出来ぬ天ぶら揚げている

長幼を乱し遺産のその行方
長寿国 親との長いながい紐

八尾市 吉村 一風

さわやかな奉仕の汗は笑顔呼ぶ
ようしゃべる妻を離れぬ杉花粉
負け方がうまく人間丸うなり

明日の絵にひと彩増やす気も弾み
くり返す挫折をバネに春を追う

阪南市 森村 美花

張りのあるお肌秘訣は恋らしい
冷めぬよう同じテレビを見ています
気を許す仲間と共にする苦勞

ジブシーの命の叫びフラメンコ
ほっとする笑顔に出合う春の朝

大阪府 米澤 俣子

流れつく若布に子らの弾む声
減量に罪なお土産いただいた
お噂をしていましたと言うお世辞

まだ氣力少し残つて好奇心
メロディーが呼んでるお風呂沸きました

大阪府 前田 ゆい

長老の解説うれし法隆寺
若草伽藍礎石に歴史聞いてみる
生きていて良かった仏との出会い

法隆寺ものの大事を論される
花吹雪世界遺産に見送られ

大阪府 初山 隆盛

花曇りひとりテレビの花見する
全身に霞かかったままの鬱
印象は家紋を守る城下町

人の字に突っ支い棒になる男女
学ぶことすこしエッチな法話から

大阪府 桑田 ゆきの

黄砂降る洗濯物がキナ臭い
お茶席のマナー守れぬ足しびれ
たつぷりと母乳に育つ子の寝息
旅の宿 水琴窟に耳膨れ
肩組んで青春謳歌タップ踏む

大阪府 丹後屋 肇

禿頭と白髪が腕を組む軍歌
春雷に耳まで塞ぐ花粉症
超ミニに顔をそむけて見る横目
最終レース逆さまに振る空財布
精霊流し揺れ合いながら黄泉を向く

大阪府 澤田 和重

わたくしの顔を歪めて歯が疼く
ひとりでは子供遊ばす場所がない
しがらみに振り回されて動けない
再会へ朝の歯みがき念が入る
花芽つけ隅を抜け出た植木鉢

神戸市 山口 光久

いよいよよになれば妻には底力
失敗を恐れず挑み子に見せる
傷心を癒すペットが頬舐める
健康が鯛より鯛選ばせる
春爛漫甲乙つかぬ花の庭

神戸市 木村 貴代子

何故殺す少子日本の宝たち
眼鏡かけ帽子マスクでする花見
草餅にきなこまぶして母の墓
一回の勝負が天と地を分ける
振り込めの手口どんどん進化する

神戸市 伊勢田 毅

年金の暮しに慣れて無駄を切る
棒読みの謝罪で済ます甘い責
妻の愚痴切るタイミング計ってる
春らんまん老いにももえる事がある
出る杭を打って先輩意地を見せ

神戸市 山口 美穂

突然のクシヤミではじまる花粉症
筆筒の中へ亡母はにおいを置いていた
ボクも仲間にと犬睨んでるティータム
雑草は生き生き春を謳歌する
コマーシャル素直に聞けない歳となり

相生市 中塚 礎石

見せかけの空振りをしてホームラン
点滴をまだかまだかと数をやむ
必要とされているからある命
徳利の首がだんだん細く見え
不器用が漬物石を軽く上げ

芦屋市 黒田能子

反応を知られたくないサンガラス
あつざりと生きる何んにも残さない
風船の膨らんでゆく思い込み
コンビニの弁当それなりに旨い
運のよさ まさかに会わず通り過ぎ

尼崎市 長浜美籠

日ごと夜ごと ところを乱す桜の風
恋愛論メールでしあう娘と私
念力が効かなくなつた唐辛子
神さまに反抗したい時がある
憤懣の一部始終を聞く湯呑み

尼崎市 松下比ろ志

花も人もこころ開いて四月馬鹿
美しいものに優しい春の風
骨折損の汗はなかなか乾かない
思案顔しても良い知恵浮ばない
悪の芽を摘み取るように爪を切る

尼崎市 春城年代

桜吹雪に幼いあんよまぎれそう
びわ湖畔の桜もいまは散りぬるか
遠方より友大阪城の花見頃
筍蕨 路上で売られている花見
駄菓子屋のおばさん文学好きだった

尼崎市 春城 武庫坊

雨予報 桜吹雪を二人浴び
休肝日桜が咲いてまた変更
椿ごろごろ風が犯した罪だろう
竹の子は竹に野良猫親になり
歳なんか忘れて春を呼吸する

尼崎市 田辺鹿太

気もそぞろ誰と歩こう春の宵
ツーカーの良き隣人に恵まれる
下町という名が好きで住み慣れる
頑張れとハツパをかける無責任
よこしまな恋をしているうちの猫

尼崎市 軸丸勝巳

孫の婚先ず桜茶に目を細め
三世代揃う幸せ披露宴
お色直し伸びるケータイカメラの手
ボンボリが待ちくたびれている桜
正直な花は暦で咲きません

伊丹市 山崎君子

上むいて空マメも待つ里帰り
逢うたびにこれが最後かいとこ会
飲み干して従兄はゆっくり語り出す
来年も笑顔で逢おうはなの頃
里を出てコーヒーの香り近くなる

川西市 西内朋月

足早にマスク マスクの交差点
腹に棲む鬼を宥めて飲んでいる
信じてた大地が動くから怖い
冷静に聞くこと出来た癌告知
鳥の糞から南天の赤もらい

川西市 米原雪子

孫娘嫁いで穴があいたよう
気温差にもめげずに新芽吹く庭木
口コミで並ばされてるラーメン屋
咲き競う花壇奏でるハーモニ
腹の虫抑えて作る超笑顔

三田市 久保田千代

寝溜めして疲れが増した日曜日
空気にはなれず溜め息深くなる
赤い糸見間違えてのくされ縁
春眠に時計の音の煩わし
このチャンス生かす私の見せどころ

三田市 北野哲男

アドリブの巧い男で淋しがり
平成の与作黙ってキー叩く
アカペラにハミングもれている唱歌
男でしょ お一つくらいとクラス会
元氣だが診察券も二三枚

西宮市 門谷たず子

上海の夜 不夜城の名をほしいまま
漓江下る墨絵くずしの景あきず
舟べりに物売の筏かしまし
見はるかす赤穂御崎に今日ひとり
孤独にも強くなろうと酌むワイン

西宮市 西口いわゑ

一卷のドラマを乗せて花いかだ
雲のように流れてみたい時もある
地獄かも知れぬがベルを強く押す
棚の本手に取ってみる雨の午後
差し引きがゼロならそれでいいんです

西宮市 山本義子

笑い袋繕いながら膨らまし
笑うのはこれを仕上げてからにする
三宅帰島やつとこさです椿笑む
歳若く言われころころ笑つとく
ほどほどの軽さで生きて まあいいか

西宮市 菊池トミエ

太平洋一人ぼっちで見る星座
棚の上置いて忘れてまた探す
食器棚使わぬ皿を積上げて
菜の花の黄色に心癒される
ネクタイが正座している入社式

西宮市 秋 元 てる

亡父の倍生きたと言うがまだ六十年代ぞどうぞお先へ私は足まかせ

開かない心に焦れて捨て台詞

漫画手に優先席の悠々然

おばちゃんは甘いマスクにいと弱し

西宮市 坪 井 孝 一

夢追うて男は今日も歩き出す

人恋し激辛カレー欲しくなる

歩数計 近頃疲れ訴える

神籤買うきれいな巫女の前で待つ

賽銭箱音するように高く投げ

西宮市 亀 岡 哲 子

ドア押して未来覗くと春霞

人間とはなんぼのもんやオリオン座

病状を隠さず明かし友は笑む

駅弁をも一つ買っておみやげに

日本百選いつもの駅で見る桜

西宮市 緒 方 美津子

父の日はとにかく酒でことが済む

トンボりにわが青春を探してる

メールより余韻うれしいラブレター

義理チョコのこない淋しさはや五年

笛吹けど夫ははかぬダンス靴

西宮市 牧 渕 富喜子

また来るとひそかに別れ告げている

なじみ出す服のあちこち薄くなる

友達と会う約束もする法事

すれ違い際に声かけ合っている

薄紅のさくらに少しある驕り

西宮市 井 上 松 煙

鶯になつて紅梅見て歩き

夜遊びのはなし魚すき煮えつまり

無神論だけど仏にすがってる

セクハラをして欲しそうなりしてる

年金のおかげ大事にしてくれる

姫路市 古 川 奮 水

改築へ区切りを迷う古い家

たてまえに本音見くびり乱気流

霧雨の富士山ここは八合目

うどん鉢両手で飲んで暖をとる

ノーネクタイ慣れて偶数月嬉し

兵庫県 大 谷 幸次郎

春の海金波銀波がさんざめく

遅咲きの花に囲まれ春が来る

有りもせぬ若しにも心揺さ振られ

菜の花の黄色にまみれ蜂の春

春潮と相呼応して山笑う

奈良市 米田恭昌

良書より悪書に学ぶ処世術

ニートより格上と息子はフリーター

仮面八つ持つて誰にもそつがない

刀折れ矢尽きて絵馬の雨ざらし

ぬるま湯に籠がゆるんできた日本

奈良市 天正千梢

輝きは土の下にもある古墳

脳の錆取ってもらいに紀乃国屋

痛いところ突いてくれてる如來さま

斜めから見れば肩肘張りすぎる

青空のゆとり忘れてテロリスト

奈良県 渡辺富子

感嘆符連発してる通り抜け

夫だけおしどり夫婦信じてる

年金で生きるペアのマグカップ

右脳左脳鍛える本が積んである

金脈と見たかゲームをねだる孫

生駒市 飛永ふりこ

ささくれたことをばを砕くシユレッター

お互いを押しつ押されつ歩が揃う

白木蓮恋のトラウマ知らぬまま

モノリザの裏面ほんのり邪気が住む

細胞にまごころまあるく巡りくる

香芝市 大内朝子

葉桜へ未練たつぷり余花の咲く

懲りませず人を信じている笑顔

笑顔播く癖に困ったお葬式

半額のヒレステーキと出合う運

花散らしの雨に私の恋も散る

橿原市 居谷真理子

みのもんたなどを信じて母は古い

ともかくも食べさせたがる母である

白髪に似合う母への春帽子

さすつても揉んでも剥がせぬ母の古い

手をとつて母の軽さを思い知る

橿原市 安土理恵

淑女とはちがう大阪の女です

春の酒すこし濁ったほうがいい

夜桜へなぜか二人で行くことに

みんな赦して惚けてしまう花の下

うす味の恋で長持ちしています

大和郡山市 坊農柳弘

エルニーニョのいたずら紫陽花の浮気

ともすれば自分本位になる無策

ときどきは記憶喪失 千鳥足

それなりの生き方紫陽花から学ぶ

言い訳は止そう負けたんだから僕

和歌山市 牛尾 緑良

風も波もみんな味方にして卒寿
裏も表もみんな私の歴史です
ライバルの祝辞が胸へ落ちてくる
大安という佳き日を過ごす一人きり
ふるさとから続くでこぼこ道だった

和歌山市 桜井 千秀

難しい話はよそう花筏
歩み黙々奇跡呼ぶ風待っている
叶わない人が周りに増えて来た
ライブドアに触発される向こう意気
大丈夫答えてくれたのは自分

和歌山市 福本 英子

幸せになる種を蒔く春うらら
大トラも小トラもニート花の下
土手を行く三日見ぬ間の花筏
悠悠自適とても便利な物忘れ
へらず口なら負けてない夫婦著

和歌山市 松原 寿子

大らかに翔んで青空だきしめる
何げなく零れた言葉から波紋
疼く手で想いを濡らしグラス乾す
客を釣る広告ころとさめかす
親切な裏目へ潮が沁みてくる

和歌山市 楠見 章子

玄関先落とした花粉掃いている
春うらら ころころのネジを巻き忘れ
お返しの要らぬ付き合いならしよう
雨あがり放浪の癖かおを出す
抜きん出る新芽と息を合わせねば

和歌山市 堀畑 靖子

ペイオフがなんやと酔っている桜
反日デモどないしようもない歴史
有事とは無きよう祈りくりかえす
倅せは檻褌をまとうこともなく
デバ地下で揃えることにした夕餉

和歌山市 木本 朱夏

朝の来ない夜が続いているイラク
積みあげた卵の上の平和論
身の内に仮想敵国鳩を撃つ
硝子細工のような平和を遊ぶ
戦争を懐かしそうに話す人

和歌山市 岩本 美智子

つばめ古巣へばあちゃん皺がふえたわね
ケアハウス二人の城にして生きる
九九はできていても便意わからぬ認知症
太閤さんのつもりになつて観るさくら
潮あびた花木へ春はやつて来ず

和歌山市 古久保 和子

マンモスがうす目を開けるガラス越し

竹の子の十二単は燃えるゴミ

携帯と防犯ベルで武装する

ラーメンの汁は飲むなと医者が言う

初恋も春の野菜もほろ苦い

和歌山市 榎原 公子

寺の寄附桁間違えて言うてくる

案でない人並みというおつきあい

語りあえば皆善良な田舎人

一番の趣味は畑の草引きで

雑草と取っ組み合つて負けている

和歌山市 玉置 当代

列島を嬉しくさせる花便り

約束の小指が疼くすっぱかし

偶数月の十五日が待ち遠しい

プロジェクトX皆んない顔だ

衣紋掛けに明日の大役ぶら下げる

和歌山市 田中 みね

マッサージ機と肩を並べてお勉強

頼もしいが怖い気もするホリエモン

最寄りの局が消えたら嫌だ民営化

兄夫婦から現ナマもらう形見分け(母の四十九日 2句)

和歌山市 武本 碧

カーナビがお疲れさまと肩叩き

凜凜しくも淋しくもあり声変り

未知数の明日へ続く白い道

立ち止まり漂流もして夫婦なり

人生ゲーム一枚上の妻と居る

和歌山市 松尾 和香

前向きに歩く人生古希の坂

平和の風優しく吹いて地球博

断水に思う自然の水の恩

末期の水飲めぬ原爆語る老い

役終えて同じ歩幅の夫婦旅

和歌山市 宮本 三喜夫

うれしいね明るい話次々と

空港出来世界も近く便利なり

若者の学校巣立つ晴れ姿

故郷も時勢の波に消えていく

可笑しすぎ最近世相解からない

和歌山市 山口 三千子

花吹雪髪染め気持切り換える

過去形にすれば空しくなるばかり

嫌なこと悔しいことはインプット

予定表犬の介護は予想外

話し中言葉忘れて巻きもどす

和歌山市 上地 登美代

葛藤から抜け出て碧い空に遇う

メランコリー引き摺っていた愚かな日

笑つても泣いても明日の岸に着く

一番好きな顔であしたを待つことに

太陽を描いて涙と縁を切る

海南省 三宅 保州

ラムネの泡に昔々が甦る

夫婦茶碗何度も欠けたことがある

騙されてみたい気もするコマージュル

金は出すけれども口も出しまつせ

見えそうで見えぬ養銭箱の中

海南省 堂上 泰女

家計簿を知らぬ夫の大らかさ

私の人生そつとしておいて

西行をしみじみ胸に花愛でる

山里は見渡す限り僕の春

茶髪にも少年の顔風光る

海南省 谷口 義男

拉致された家族の怒り知らぬ国

辻褃を合わすゲームのこの浮き世

几帳面過ぎても人に嫌われる

阿呆になり見て見ぬ振りをして平和

杖になり互いに歩む老いの坂

和歌山県 中後 清史

もう一度会わねばならぬ人が居る

再会の変つてないというお世辞

旗色が悪い尻尾が垂れている

母ちゃんの堪忍袋緒が太い

無心するときは父上様と書く

鳥取市 土橋 はるお

善人になろうと努力していない

誇らしいガイドの旗について行く

村起こし色々まつり企てる

忘れずに私の名札見付けてよ

楽しいな山でおいしいにぎり飯

鳥取市 植田 一京

誘惑に勝つてさっぱり元気出す

春よ春ドリムばかり抱いて過ぎ

寝不足へ太陽ギリギリ照りつける

母の背の温みは今も忘れない

まだ若い気分で趣味の梯子する

鳥取市 岸本 宏章

ペイオフに縁がないのも寂しいね

予報士が美人で天気聞きそびれ

こっそりと咲けぬ標準木の花

ピンチこそチャンスと思うことにする

頼りなくて阪神ファン止められず

鳥取市 岸 本 孝 子

ドック入りもしもがあつて踏み切れず

縁結び神に感謝の五十年

もう少し飲めば治まる絡む癖

老人も少し光つて新学期

年金の仲間で遊ぶ手弁当

鳥取市 奥 谷 彩 子

うれしさを壺に醗酵させて春

裏表紙一行飾る母の章

夢さがし大空昇るアドバルン

指切りに低温火傷する小指

漁火もわたしの影もゆれて春

鳥取市 倉 益 一 瑤

海に出た一枚の葉にあるドラマ

末席で意外な人が矢を構え

涙ホロホロ謝る芸もうまくなり

白黒をきっぱりつけて淋しかり

駆け抜けた日々いとおしい青い風

鳥取市 林 露 杖

エープリルフルではない計のメール

遠山の飛白模様には山桜

生きていることの証に出る句会

来し方の遠き悔恨月朧

すぐ其所と思う未来が掴めない

鳥取市 山 本 益 子

流行語の上場株へホリエモン

嫉妬心深いぞ耳打ち悟る春の風

喜怒哀楽の秘めたネクタイ捨てられぬ

コカコーラ子供が飲むと歯が消える

親善外交日本の鯉は託される

鳥取市 田 中 憧 子

迂闊にもうなずき火種燃え上がる

リハビリの菜園今や本格派

花便り聞けば目鼻がむず痒い

夢の中とびきりうまい句が浮かぶ

球界の要次々アメリカへ

鳥取市 杉 本 孝 男

裁判で泣く良心のひとかけら

粒揃いの美女の視線にさらされる

ご多忙も曲げて出席盛り上げる

妻の手に行方不明の玉手箱

これ位許そじゃないか飲み仲間

鳥取市 近 藤 佳 子

辞書をくるすぐに忘れてしまうのに

里ざくら鬱を散らしに来てくれる

米寿までびんびんしてた友が臥す

六地藏おわす田舎へ墓まいり

時雨する枯野孤独が深くなる

鳥取市 上田 俊路

真つ黒にして安心の予定表

思ひ出せない顔が笑つてくる不安

桜満開 私有地と書いてある

夕陽の沈む音が聞こえる時がある

まだ一度も乗ったことない霊柩車

鳥取市 録 沢 風 花

やつと春思う存分酸素吸う

風の子と菜の花摘んだ日はおぼろ

楽しかった過去カプセルに詰めてある

老いてきた私にイエローカード出す

歯を白く磨いて歯医者さんへ行く

鳥取市 春 木 圭 一 郎

しなければならぬことなど何も無い

いざとなりや何をやつても生きて行く

生きることけつして奇麗事じゃない

余裕生む自分の特技たくわえる

とりあえず眠れば明日は変わるはず

鳥取市 裕 寛 子

聞きとれぬままで相づちうつあせり

しつかり者にとりつくりらしい認知症

杖捨ててモミジマークのドライパー

どうすれば握手出来るか近い国

新教科書反日デモをあおりたて

鳥取市 福 西 茶 子

飲み仲間下戸の私は運転手

切り札はまだまだ出せぬ序盤戦

思いきり少女に返るクラス会

雑草の強さに負ける草むしり

四キロの散歩コースも春の顔

鳥取市 富 山 檳榔樹

嫁ぐ娘は指呼の間だと母決める

桜花爛漫短い見頃飲め騒げ

鯉のぼり泳いで田んぼ動き出す

焼酎をキムチ肴に酔い機嫌

向日葵が休耕田に咲き誇る

鳥取市 鈴 木 一 弘

自己流で畑耕して慈雨祈る

大宇宙耕して住む地球人

春祭り車座に散る花吹雪

ペン先が鈍る詫び状書く夜長

コスモスが村の盛衰田に綴る

鳥取市 田 村 邦 昭

ストローが結んだ頃の妻でない

追い抜いたそれから友の冷たい眼

甘言にとびつく癖がなおらない

百円の指輪さらさら輝いて

もの言わぬベットが愚痴を聞いている

鳥取市 西川 和子

車椅子積んで花見の福祉バス
うらかな日和に睡魔つき纏う
友人も誘って帰省する祭り
ブレイキの利かぬ徘徊追いかける
早にも雨にも負けぬ畑の草

鳥取市 中村 金祥

夢風船はじけぬように飛んでゆけ
好きな人欠点探しあきらめる
幸せの尺度変えたら楽になり
いつからか愛の言葉をかけぬまま
満員の待合室にある世界

鳥取市 吉田 弘子

神仏も金が大好き祈祷料
竹島の波紋交流までも断つ
現代風氣質です略式が好き
便利屋とも満足してる母である
天性の二枚舌ですよく喋る

鳥取市 加藤 茶人

中の上ラーメンすすつても思う
代わりならどこにもいるさあくび出る
愛情はもらってなんぼ脛かじる
弁解の語尾に疑念のきな臭さ
あきらめと妥協で埋めた夫婦仲

鳥取市 福田 登美

柩の窓何度もひらく別れの夜
生きていく明日に希望の火を点す
健康を送れる神の贈りもの
化粧して弱い私をかくしてる
感傷の涙に風が軟らかい

鳥取市 近藤 春恵

一番星僕にウインクしてくれる
朝ドラを見ないと今日が始まらぬ
神様が少し休めと足ギブス
非行の子母の涙で立ち直り
リードされうっかり泥の舟に乗る

鳥取市 西村 黙光

リストラが暇へ旋風巻き起こす
本棚の埃払えと暇の私語
暇になり呆けがちよいちよい顔を出す
暇潰し老人倶楽部の華やかさ
年金も時たま暇と酌み交わす

鳥取市 永原 昌鼓

百寿まで生きる作戦立てている
哀しさと虚しさ残すいくさ跡
戦争をくぐった母の知恵袋
口べたな人の言葉は身に沁みる
まだ生きるらしい五欲がよく動く

鳥取市 美田 旋風

点滴がぼとぼと命蘇る

いち早く春の先取りチラシ攻め

天災に塗り変えられた観光地

頭出す持病へもぐら叩きする

古時計休めばボイと捨てられる

鳥取市 武田 帆雀

ストレッチ体操中だ待っとくれ

一票は固い男をほめ殺す

ポケットはシンプル隠すものはない

ふるさとを映して球児一勝す

鉢合わせして買物を覗かれる

鳥取市 宮脇 道子

命綱旅や仕事に備え付け

春うらら浜大根も負けず咲く

若者の波乗る姿平和です

診察日終着駅の老縮図

物忘れ度重なつて夕暮れに

鳥取市 夏目 一粹

天才が無情に人を抜いてゆく

旧姓に戻ったむすめさばさばと

芽吹く木々あの世はどんな処かな

孫と寝てこころの刺が抜けました

怒鳴りたいが甘い言葉になる弱み

鳥取市 土橋 睦子

黄水仙首を並べてお出迎え

今やっと母の苦勞が身に沁みる

ふるりの屋根が恋しい途中下車

濾過された自然の水を飲んでる

ヘルシーな豆腐に添える花わさび

倉吉市 野口 節子

花になれ花になれよと責つ付かれ

桜サクラ四月になるとよく喋る

葉桜に後を托して花は散る

花のような笑顔で詐欺師やって来た

破れジーパン若さでナウく穿いている

倉吉市 松本 よしえ

尼寺跡で今日も鶯経を読む

故郷の母の電話にホーホケキョ

菓子店にうぐいす餅の春がある

お陽さまとデュエットいちご甘くなる

連休の成田で羽がのびてくる

倉吉市 最上 和枝

ほんぼりが等間隔に笑む夜桜

抱いてみて叩いてみては西瓜買う

消えそうで消えないものを胸に抱く

ルンルンの椅子には落とし穴がある

王様が孤独の椅子についている

倉吉市 牧野芳光

花粉症首から上を預けたい
鼻紙が破れるほどの花粉症
言われても直したくない癖がある
どうでもよい賞状だけ破れない
家事育児ほっぽり出してボランテニア

倉吉市 猪川由美子

恋の免疫なくて発熱ばかりする
エイジング容姿に替わる腕磨く
春一番へカビ生えハート虫干しだ
大合併あふる里の名が消える
万博へせつかれ親はあーしんど

倉吉市 山中康子

パンジーの笑顔にとけるしかめ面
ご先祖を守りつづける父の背な
月冴えて里のおふくろ匂いだす
ご時世と我が物顔で振りまわす
炎えさかり堪能させた落椿

倉吉市 米田幸子

桜花爛漫亡母へ一枝手向きたい
公園の桜今年も無事に見た
暇ひまに埋めてきましたらく書帖
城はもう嫁に譲って翔んでいる
ダムの底氏神さんも菩提寺も

倉吉市 山本玲子

見解の相違が見えぬ壁になる
氣を利かし余計なことをしたらしい
花見酒福耳までも酔っている
呆けてない あその此のが増えただけ
たんぼぼの綿毛は野心抱いて飛ぶ

米子市 政岡日枝子

古稀の坂これから味のある芝居
笑っているが心の寒さ顔に出る
僅かずつ強い握手に引っぱられ
ふる里に前進という置き手紙
飄飄とポーズをかえて生きてゆく

米子市 門脇晶子

ズボンばかりで大根足が見当らぬ
見るだけでパワーつたわるゴッホの絵
七色のパワー一ぱい花回廊
たとう紙で包んだ着物あくびする
黄昏を包む夕日は神の絵か

米子市 木村春枝

指きりがしつかり出来て春の午後
メガネにも春がうらうら萌えている
いとしくて両手で握手してしまふ
老犬と縄り合いして日を送る
ふりこめ詐欺余所様でない我が家まで

米子市 林 瑞 枝

娘に貰う異国情緒の絵に惚れる
おんなにも挑む道あり藍を着て
糸の切れた凧と彷徨う青い空
双葉には誰も期待をかけている
道化師の涙ほろりとハート打つ

米子市 澤 田 千 春

新芽吹く庭にきこえるシンフォニー
故郷に昔の地図が生きていた
からっぽの脳と渡ったかずら橋
みんな元氣か今日も案じる父の声
裏表見つくしたのか桜散る

米子市 青 戸 田 鶴

ゆらゆらとかけろうの道歩いている
目の手術一週間をぼんやりと
どちらかと聞かれ反骨血がさわぐ
あんず散る兄妹も皆老いていく
どうなるうピエトロ寺院の亡骸たち

米子市 白 根 ふ み

百寺巡礼登った寺は難関と
雪が消え大事な枝も消えている
残雪が春だはるだと身をかくす
雪どけ水にしゃきつとわさび身をかため
ゴミの係でゴミを出さないようにする

米子市 永 井 三津子

貰えそに無い年金を納めてる
子が巣立ち私ちよつぱり衣更え
見ているも悩んでいます受信料
雛飾る無邪気な母にある世界
子を忘れ礼述べる母切なすぎ

米子市 中 井 ゆ き

春を待つせつないほどに春を待つ
人間を忘れて花の中にいる
さくら達知らぬあいだに消えちゃった
花つかれ一週間ほどあとをひく
おかげさんまた来年の桜まつ

米子市 野 坂 な み

愛とさくらの蕾が人気ざらつてる
大根の変り身ひろく愛される
宴つづき大根飯をふと思う
ウーマンパワー男の階段追いかける
うかつにも自然の恵み忘れかけ

米子市 光 井 玲 子

二人だけの城もそろそろ限界に
さからわず素直素直でくらしている
この道をひたすら生きただけの事
子や孫に会えるのは年一回だ
未成年が堂々悪に手を染める

鳥取県 新家 完司

悪い奴きれいな秘書を連れ歩く
女湯をちらりと覗くことはある
ひるめしを抜くと晩酌メチャうまい
清潔な水いただいて桜咲く
来年もみんなで見えてくるよう

鳥取県 鳥羽 直市

陽が昇る今日をしっかりと生きてゆく
やりくりの上手な妻で今日がある
時どきのうっかりふたり庇い合い
剪定へ鳥の来るよう枝残す
冗談を織り混ぜながら教える

鳥取県 鳥羽 玲子

眼鏡替えはつきり風も見えて来た
たかが傘思えど行方気にかかり
味噌汁にだんご浮かんだ故郷の味
物置に溜った月日ごみとなり
さわやかな感動満ちて本閉じる

鳥取県 盛田 夢路

永らえて満悦の母手を合わす
折り鶴の折れる指先誉めてやる
新築に止むにやまれぬほたる族
シャボン玉風向きのまま春の旅
母が逝く雲は流れる穏やかだ

鳥取県 小谷 はるみ

その昔選んだ人がハズレです
森を出る熊も悩んだ末だろ
花粉症 春が歪んでやってくる
巣立つ春生徒が夢へ走り出す
春なのに心が別居しています

鳥取県 平尾 菜美

おたがいに情け交わしてのぼり坂
雨風を他所にお祭り最高潮
罪深さ素知らぬ顔で咲き盛る
それなりの位置で幸せ待つ明日
森を出る子等の明日に手を翳す

鳥取県 深田 倶久

吾が畑も隣の畑もいぬふぐり
連休へ手ぐすねをひく農作業
花冷えの温度差十度類かむり
耕せとばかりに猪が畑を掘る
ランドセル学力低下など知らぬ

鳥取県 山本 正光

誕生日今年も無事に歳を足す
しあわせだ日日の予定が続いてる
まだ死ぬぬ家の留守番役がある
正直な人は政治家には向かん
胃に落ちた酒がもがいて踊りだす

鳥取県 蔵本悦子

約束を破って核を保有する
春の陽に冷えた心を干している
借金も一つや二つして生きる
失敗も春は許してくれそうだ
失敗があつて心に艶が出る

鳥取県 国森武子

しみじみと健康である幸思う
夫逝つて何年たったかと思う
いつとなく一人でいるを疑わず
女つてたくましいなと苦笑する
死ぬ時は笑つて死ぬるかもしれぬ

鳥取県 澤裕子

オンボロが博物館で光つてる
ご指名に応えデュエツト致します
マンネリの中で脱皮がままならぬ
過信したエースに足をすくわれる
加速する恋にブレーキかからない

鳥取県 石谷美恵子

手作りのもてなし真心がうまい
不景気の社会へ船出するスーツ
心臓と膝に良くない歩道橋
風邪ひくな転ぶな子等がやかしい
ブランドを着ても変らぬ国訛り

鳥取県 佐伯やえ

畑行き陽を浴び骨量ふえてくる
オレオレ詐欺逆襲一手ぶち負かす
道草の好きだったお子今校長
山陰線と桜を誇る無人駅
合併で晴れがましいな大山町

鳥取県 山下節子

DNA親の半数ずつもらう
飽食のつけが娘や孫狂わせる
玄関で父さんの靴用心棒
さくら花今年もお会いできました
外は雪おつちらおでんでも煮よう

鳥取県 太田幸枝

生き神の都合でまつり変更する
仲良しが突然はたと背を向ける
達人が活けた花展に目を見る
麗らかな直線道路事故多発
健康を父母にもらつた感謝なり

鳥取県 下田茂登子

いざとなりや本音をみせた古狸
夕暮れの寂しさ抱いて一人寝る
会者定離わずか五年の夫婦坂
欲という魔物に憑かれ毒も吐く
お月さま笑つてみてた古希の恋

鳥取県 竹 信 照 彦

天候が不順で釣りも不漁続き
そこだけがボンヤリ白い山桜
鍬と鎌必携狭いわが畑
孫のため植えたいちごに手がかかる
ジャガイモの畑作りも鍬一本

鳥取県 細 田 裕 花

裸木もときめき衣はるいろに
吹き抜ける風脱皮へのプロローグ
しがらみを抜け出て青い空になる
旅に出てしばし無色の人となる
ストロー級の昔を誰も信じない

松江市 松 本 知 恵 子

やつと春桃もさくらも一斉に
忘れよう桜はらはら散るうちに
コンビニの味の旨さにあせる腕
先頭を局が仕切る雁の列
薄味で朝採れの幸活かして

松江市 小 川 注 湖

タカラヅカ生花束抱いて夢抱いて
ポケットから次に出すもの握ってる
太陽が健脚自慢笑ってる
人間宣言六十年の平和道
大正の母凍として誤字は無い

松江市 川 本 畔

足元をひたすらみつめ列の中
疑いもなく人生の列にいる
命日はお花半分ずつ分ける
秘密めく動きを見せて陽が沈む
抑揚をつけて声出す下心

松江市 佐 野 木 み え

欲しいなあ掃除ロボット家へきて
銀婚の娘としあわせに乾杯す
京の町釘抜地蔵に手を合わす
花の下遊覧船は安来節
払っても微熱が私はなさない

松江市 銭 山 昌 枝

梅桃桜日本列島ピンク色
甘え癖ついたらわたし崩れそう
ときどきはリズムを崩す古時計
五キロ減量こつちを向いて欲しいから
花粉症代わり番こにクシャミする

松江市 安 食 友 子

泣き虫のように嘆いてくれた風
似顔絵を差し上げたいと言われても
いびつでも天真爛漫な造花
怨念もひと皮むけばもがいてる
空白が嫌で予定をわざと組む

松江市 三島 崧丘

落椿これもけじめの一つかも
弁解は無用と月が冴え渡る
性とやら会つてはならぬ人に会う

未知数に期待がかかる三歳児
四十年女房も賞味期限切れ

出雲市 伊藤 玲子

貧乏が鍛えてくれた足と腰
欲すて二人静かな箸の音
空っぽになると明るい声が出る
一度でも前後不覚に酔いたいね
虎トツプ スカツと勝つて今年こそ

出雲市 久谷 まこと

丹精の程ほどに咲く花の色
それぞれに生きる力を授けられ
敵味方色分け出来ぬボールペン
同じとこ何度も探す物忘れ
葉だけ後生大事に忘れない

出雲市 多久和 敬子

決断がつかず信号青になる
誰にでも一つや二つある迷い
私のそのまま継いで母となる
ひとひらの桜の花びら迷い込む
おもいっきり外出したい花粉症

出雲市 吉岡 きみえ

いろんな音きいて一日暮れてゆく
いい人でいようと顔を洗い直す
やさしさがあふれそれから散るさくら
まるい話まるいお盆にのせて出す
反省をしつかりさせる終い風呂

出雲市 小玉 満江

大鯛の目玉をしゃぶる祝の日
底冷えの本堂写経の字が固い
京菓子のように椿は地に座る
Tシャツで矢面に立つホリエモン
死んだ時飾る写真をえらび出す

出雲市 石倉 芙佐子

鬼も蛇も隠れていそう奥出雲
遥々と尋ねきたのに風ばかり
時々は刀の先が此方向き
妻も子も置いてけぼりにする蛭
麦笛でさよならをするお月様

出雲市 城 多喜

満開のサクラ笑つてばかりいる
花盛り女盛りという卯月
雛人形寺に納めて荷を降ろす
笑つても泣いてもひとり影もまた
のど元で涙ばっちり受け止める

出雲市 青山久子

ほどほどの温度でつなぐ両隣り
ひび割れた石です温い雨を待つ
太陽が昇るわたしの鈴も鳴る
ほどほどに塩をきかしている仲間
撫でましょう あなたの傷が癒えるまで

出雲市 岡 あきら

承知していて会計の年度末
隣とも無口になった回覧板
鉛筆を置いて六甲おろし聞く
老木に叱咤されてる花の下
若い花となりのゴザで満開だ

出雲市 富田蘭水

春が来るだんだん肥りよく眠る
砂風呂へ旅の顔してひたつてる
小包の匂がつかないでいる師弟
こっそりと明日の夢を確かめる
餅まきに幼児心を重ね待つ

出雲市 岸 桂子

決断の舌が切手をなめている
道しるべにもなっている道祖神
笑顔する誰にも出来る社交術
約束の日に約束を整える
大ジョッキ女も強くなりました

出雲市 持田多輝子

よそ見せず先輩の後ついてゆく
本心は誰にも言わぬ冬ごもり
税金を上げるドラマの匙加減
お家芸世界を沸かすカメラの眼
矢面で風の向きなど気にしない

出雲市 小豆澤歌子

ほどほどの川の深さが計れない
太陽に逢うたび笑うさくら草
いとおしく跨いで通る犬ふぐり
ちぎれ雲噂を聞いた長い耳
真つすくな道に転んでまた歩む

出雲市 園山多賀子

三面鏡開く三面花曇り
病む人を笑わせに行く梅雨晴れ間
梅桜律義に咲いて未だ卒寿
詩心盾に人間続けます
テトラポット私も海の傍観者

出雲市 森 茂美

四国路の乗りかえ駅で食った蕎麦
餅箱に生きていました亡父の文字
ぼたん雪牡丹の芽にも容赦せず
兄ちゃんの合図でおもちや歩きだす
ホワイトデー孫に言われて果たす義理

出雲市 小白金 房子

里いもの種ふつくらと地に寝かす

花冷えへ熱爛うまい手酌酒

間伐材技いきいきと彫り上げる

割り箸の匂う豊かな山育ち

廃牛のかなしさ乗せて逝く命

出雲市 多々納 テル子

蝶結び抱えて友の誕生日

前向きな卒寿の余生学ぶこと

七十坂笑顔絶やさず修業中

冬の夢枯木に花が咲いていた

老眼鏡不要なだけが取り得です

雲南市 毛利 幸

涙雨禍根を全て洗い出す

人生の流れくねくね蛇行する

皇室の男女の壁が消えていく

欲張りで太陽抱いて床につく

シルバーの元気ほどほどにして欲しい

島根県 伊藤 寿美

植山的路銀なかなか貯まらない

亡夫が居たらと思う羊羹お薄のむ

古里はライトブルーに塗り潰す

スローライフ一途に生きてきた振子

節曲げぬ先祖の松と共に生き

岡山市 井上 柳五郎

心電図変化は杞憂で呼んだ笑み

合併でわがふるさとの名が消える

階段を上り終えての深呼吸

悲喜交交別れと会うの三月よ

四代の揃い踏みにてわが家初春

岡山県 国米 きくゑ

結ばれて夫婦春秋幾度か

二人なら耐えて渡れる浮世橋

好いお酒ですなと言われ狂われず

風の音五感で聞いている巨木

ふところに切り札抱いている笑い

岡山県 大石 あすなろ

よくしゃべるつくしに出逢う春の土手

さよならのあとがまだある一通話

坂上る戦力外にならぬため

帰省した子が時間差で去って行く

校庭をそぞろ歩けば過去に会う

岡山県 福嶋 智恵子

一時の過疎を賑わす桜花

永劫に醍醐桜を護る過疎

携帯のややこし過ぎて役立てず

Eメール開けば危ない橋もある

立ち止まりふと想い出を追うている

倉敷市 井上富子

パソコンに青い男の太い指
酒女みんな肥やしにプロの花
前向きな背中を温い風が押す
こんがりと嫉妬いてとんがるおちよほ口
株式の森に深入りした子猫

倉敷市 小野克枝

泣き虫の母は駄まで送らない
得もなし損もないから笑っておく
北風を避けて通れる歳となり
古日記甘い香りと白い雲
妻としてよりも女としての欲

美作市 小林妻子

夕食は孫等夫婦の献立てで
コージ漬の白菜がある昼ごはん
猪と分ける田植も待っている
入学進学年金配る祖母がいた
鶯の方が知ってる田ごしらえ

美作市 山本玉恵

夢追いの靴まっ白に匂い立つ
温もりの言葉のほしいひとり部屋
どうあっても世論に背いては生きられぬ
雨にはあめの風情いとしや散る桜
世渡りの所どころに無の時間

美作市 福原悦子

素顔で喜怒哀楽のまま生きる
深呼吸そろそろ告げる胸の中
三猿を守り続けた亡母しのぶ
ほんまや生きてるのは丸儲け
桜咲き今昔しみじみ懐古する

竹原市 小島蘭幸

麻生路郎の弔吟があるいい宿だ
昔むかしの風景があるしじみ舟
弔吟の屏風の中で飲んでいる
横なぐりの雨よ昔むかしの宿に着く
無味無臭やがて透明人間に

竹原市 石原淑子

ゆく春をはらはらはらと花吹雪
あちら立てこちらを立てて両隣
夢を追いつい袋と崖つおち
クツクツと笑い声煮るおでん鍋
平行線がこんな夫婦仲がよい

竹原市 正畑半覚

抜け殻にしてはならないこの地球
蟬時雨じつと聞いている蟬の殻
白い大地の下で抜け殻あためる
蕾が殻を脱いで春の音がする
殻を脱ぎ第一球で勝負する

竹原市 森井青居

宇部市 平田実男

世話役に徹し人脈広くなり

乱用をしたら薬に殺される

好調なビジネスに酔い過信する

法王は死しても地球自転する

原油高止める手立てが見つからぬ

竹原市 時広一路

歳相応少し多めの句読点

花言葉気には添わない花もある

携帯の番号誰にも言っていない

ノンシユガー見ればつい手伸びる

ナスコールあまた淋しがりやだな

竹原市 岩本笑子

チラリカラス自由な空があるかぎり

春になるとお地藏さんも昼寝する

一面の桜とピカピカ一年生

菜の花もツクシも食べて春の中

小川さらさら春を運んで夢を運んで

広島県 藤解静風

母親はいい誕生日の電話

毒のある誘いにこころ拉致される

真剣な瞳でさせる蟹の足

敬称を省くと至近距離になる

同い年の桜にすこし嫉妬する

少年の顔になつてゐるクラス会

相思相愛と思つていた誤算

握手して口とは違ふのが分かり

偏差値は低いが信頼度は高い

鳴き砂と話がはずむ土踏まず

美祿市 安平次弘道

濃厚な緑にいつもだまされる

標的から落ちて来たのは五月閣

縁だけで梯子をはずすのはよせよ

運命線君は地獄を知つてゐるか

無防備な人でもティッシュ渡せるか

東かがわ市 池内かおり

笑つたら笑つてくれた幼稚園

犯人は筍だった吹出物

たつぷりのもてなしみんな良い笑顔

よく見ると開け口ここと書いてある

同じ穴の貉弱点つかない

東かがわ市 原賢

そつとしておこう嵐が過ぎるまで

車椅子渡る信号短かすぎ

野仏が山ほどの愚痴聞かされる

風ぬるみ微笑みうかぶ道祖神

一杯の酒が言わせる裏話

東かがわ市 伊勢 八重子

学び舎を出て人生の向い風
今日のウツみんな包んだおぼろ月
産院の廊下命の声を待つ
消したはず胸の炎を持って余す
恙無く過ぎてきれいな茜雲

東かがわ市 清川 玲子

お遊戯会どの園児より光る孫
哲学者になつたつもりで歩く道
京の旅納骨堂の父母に会う
おだてられ父さんが立つ台所
掘り出し物狙うて来てる陶器市

東かがわ市 川崎 ひかり

孝行をしなくてごめんお母ちゃん(九十五歳母逝く)
極楽のハスが開いた音をきく
下手な経亡母が笑つて聞いている
初七日が過ぎて涙の日が続く
来世も娘と呼んで下さいね

東かがわ市 神保 坊太郎

猪が一族つれて出稼ぎに
職業は農業米は買つてます
人間が神の領域蝕める
死角などあろうはずない神の視野
逆転へ茶断ち塩だちして祈る

東かがわ市 成重 放任

大名の気分味わう旅の風呂
手を合わす所にお座す神仏
白菜を漬けて一夜の旅に出る
職退いて怖いお方はもう居らん
一仕事終え朝ドラと食事摂る

松山市 古手川 光

本籍地この辺りですダムの底
ホームレス ペットをとても可愛がり
人類の宝九条崖つ縁
陣痛の宿命背負い女児生れ
振り込めにもATMは礼を言い

松山市 丹下 美津子

原色の衣装が似合う巫女の舞い
父の無い子が憧れる肩車
一生の不覚を取った甘い酒
飾らない言葉身に沁む老いの床
会計監査頭悩ます二三日

松山市 宮尾 みのり

低空飛行何としんどい病み上がり
書評だけ頭に入れた新刊書
いつの世も洒落は反逆スピリット
いい歳をして純愛は似合わない
町内会ボスが立場を譲らない

松山市 高橋宏臣

花むしろみんないい顔しています

不機嫌な日の味噌汁は匂わない

古里へ虹の欠片を取りに行く

ピカピカのガラスのドアが閉まつてる

与党化へ回想録も書き替える

大洲市 中居善信

善と悪二つの顔を持った僕

ああ四月 六十八になっちゃった

ダックスフント僕のあだ名の事ですよ

反日へ少し大人にならないか

私が選んだ妻とよく喧嘩

西予市 黒田茂代

雪ふわり春近き日のバレリーナ

絵の中のさくらと温い夢を見る

表紙絵に託す作家の思い入れ

考えも体も風呂で柔くなる

川柳塔碑探す高野の碑の数多

高知市 北川竹萌

懐しい郷山一日感謝して

大崎中学三年勤め県吏員

林道の真白卯の花すがすがし

二年前整理お墓に参拝す

お旅所に植えたひょうたん桜です

高知市 小川てるみ

ピアガーデン暖房付きと笑わせる

菜の花に朧月夜というチャンス

猫の目が糸になつてゐるいい天気

まあいいか花を持たせておくゆとり

スパイスを効かして登る六十路坂

高知県 赤川菊野

北帰行涙そうそうの鶴の舞

カレンダー一枚毎に春の音

満ち足りてこの侘しさと虚しさは

日程はテレビに合わせひとり者

不況風マツケンサンバで吹つとばせ

高知県 小澤幸泉

サフランの花咲き娘赤子生み

歩くことただそれだけの血糖値

膝痛が生きよ生きよと告げている

堪え難き萎えた手足の先のさき

居酒屋に遠い会話が消えてゆく

熊本市 永田俊子

軽い罪捨てよとのたり春の海

万難排し下戸も加わる花見酒

盃の落花に詩心くすぐられ

ときめきを失くして作り笑いする

次の旅へ風が身軽にしてくれる

熊本県 高野 宵草

理髪館店主も客も孫の代

妻の留守やっぱりに先に逝かなくちゃ

ママの名はおいと子供が覚えこみ

補聴器も悪口ならば聞こえない

若い気にしがみついている誕生日

熊本県 岩切 康子

試し履きそのまま帰るお氣に入り

ひとり居に付き合う昼の一時間

古希の声少し図太く生きようか

言葉に棘怒りの腹を押えてる

空いているコースでゆっくり背泳ぎ

唐津市 坂本 蜂朗

運動会だけは元氣な親譲り

色付いた娘を入れておく箱がない

子は巢立ち母御は糸の切れた凧

式次第私の番が来る地鳴り

泰平が続く男の耳飾り

唐津市 宗水 笑

だんだんと佳境に入る物忘れ

勝力士しめると吉の黒まわし

拉致回答偽者送る鉄面皮

神さまの意表をついた震度七

ジーンズの穴に若さの自己顕示

唐津市 井上 勝視

彩が見え日々ときめいて待つ椿

佗助が含み笑うて二分開く

予報見て椿に傘をさしかける

恥じらって芯を見せない八重乙女

最後まで絆崩さぬ落ち椿

唐津市 樋口 輝夫

始まるととどまり知らぬ孫自慢

見てくれと言わんばかりの胸の谷

豊満な裸体がお好きルノワール

一票が足りず明日からだの人

ばらばらの拍手の中に義理もある

唐津市 市丸 晴翠

楷書から草書になった父の肩

イベントに合わせ咲かせた鉢並べ

三代代操縦桿は嫁が取る

その時の備えを試す震度六

四季の花匂う絵手紙見舞状

唐津市 久保 正剣

逢えばまた罪を重ねるジンフィズ

試されて二十日ネズミは癌になる

ハンドルの感触失せて二十年

旅楽し舌に地酒の夜が来る

細木数子に妥協はしない恋もある

唐津市 山口 高明

英霊は神か仏か首相どの
絶対に勝つと自身に暗示かけ
洪面を見れば返事も分りそう
飯食うて行けやと老父は淋しがり
賢兄の自慢はっかしお母上

弘前市 今 愁 女

雪おんな駆けて去つたとクロツカス
啓蟄も月遅れなり虫走る
肅肅と守られ登校ランドセル
逃げ出す術も教え込まれるランドセル
ロスタイムほしいとおもう孫の守り

弘前市 宮 崎 ヒサ子

春の日差し手品のように雪解かす
待ちくたびれた雪割草が歌い出す
春春と幾度書いても書き足りぬ
椅子くるり回して別の思案する
夢一つ渴かぬように手囲いす

弘前市 相 馬 銀 波

躰糸亡母の足跡形見とす
義理欠いた日の傷口はストレスに
価値観の相違乗る人降りる人
雪害の枝におみくじ春よ来い
輪の中の孤独煙草が離せない

弘前市 櫻 庭 順 風

祝卒寿戦争に生き詩に生き
わくわくとリーチをかける役揃い
お土産を自宅に運ぶ癖がある
役得で校長餞になりました
留学費寄って集って飲まれたり

弘前市 須 郷 井 蛙

サクサクと研がれた鋏で春動く
大鮪解体ショーの観光地
急な客チョット失札早化粧
入浴剤日本温泉旅をする
サービスの残業もあり社が保ち

弘前市 高 瀬 霜 石

ああ今日も抜け毛にさようならを言う
深呼吸十回知恵の種ひとつ
失恋も慣れて丼飯を食う
人間を上手に修理する外科医
直るがん直らぬがんのクジを引く

弘前市 福 士 慕 情

ストライクゾーン変った要注意
指先に力が入る歯科の椅子
頂上へ長くはおれぬ黒い雲
職場から去れば去ったで飛ぶ噂
ライバルが臥して寂しい将棋盤

弘前市 岡本花匠

十和田市 阿部進

旅立ちを祝つて咲う福寿草

天神の森から拝む津軽富士

今生と後生を思い花浄土

宿命に構え煩悩負の時間

ねまり不動許せぬ悪を閉じ込める

弘前市 高橋岳水

ニユース連綿許せぬ事が多過ぎる

ふつ切れると道一筋が見えて来る

老人の辛苦を偲ぶ郷土館

帳尻がゼロになるなら御の字だ

平安の根底にある思いやり

青森県 小寺花峯

ふる里の小石に戻り一人ぼち

卵割る一人の音が飛んで行く

賞味期限切れた私は味音痴

日の入りをいまかいまかと待つ熱燗

堀越しのバラは深紅で咲き誇り

黒石市 相馬一花

後ろにも目がありそうな歩き方

生温い男にまぶす鷹の爪

美人には毒も薬も役立たぬ

少年のポッケの中にある銀河

囁きが咳きになる負け戦

夢のある暮らし続ける古希夫婦

久し振り帰る古里変り果て

ホイきたと返事かろいが腰重い

貧しくも豊かな顔で生きている

ハイヒールはけない歳になりました

砂川市 大橋政良

無精髭もう一面の僕を見た

絵馬を吊る背に欲望のあからさま

ちつばけな夢もうれしい時がある

一病に定年がないお付き合い

輪の中で暫くおとなしくしよう

さいたま市 八田敏

突然の夏日にさくら慌て出す

咲き急ぐ桜に日本落着かず

コンクラーベ無関係だが意図わかり

桜満開傘寿に遠い春戻る

癌告知慌てぬ度胸娘婿

佐倉市 岡井やすお

後れてはならじと韓も攻め始め

掃わねばたかるぞ膳の前の蠅

土砂降りにしょんぼりしてる鯉のぼり

男でも女でもよい救世主

花嫁が万事リードでハネムーン

八王子市 播本充子

サークルの明日へ男性を募集
肩こりも病気となると恐ろしい
腕が痛くて真つ直ぐに歩けない
得るものが沢山あつた参加賞
温もりが熊野古道に落ちていた

武蔵野市 亀井円女

桜満開阪神連勝万々歳
人間ゆえに極楽へなど行けませぬ
時は駈足孫よ輝け熱くなれ
乱れとぶ変な横文字短縮語
夢の花ならこの年寄りも咲かせます

東京都 清原悦子

一日の長さを知つた回復期
日焼けしてやつと実力ついてきた
木の椅子で心優しくなつていく
折り鶴が飛び立つ日まで手を合わす
一生を贅沢言わず生きてます

東京都 岸野あやめ

姑はパートで嫁が守る家
ペイオフが解禁だつて平気だよ
無洗米特売なので買うてみる
本当の夢は黙つて抱いている
マンションの犬は英語で叱られる

横浜市 小野句多留

暇人と擲擲られている昼の寄席
情報のに浮遊化するニート
締め切つて外に出ぬのに何故花粉
地球博付和雷同の好奇心
負け続きアンチ巨人は機嫌良い

横浜市 菊地政勝

お花見が好きで私は日本人
車椅子押しして桜の樹の下へ
割れものに触れるように母抱え
夕焼けと過疎が絵になる静かな日
すんなりと逢えず離れていて想う

静岡市 安本晃授

盆前の畑で笑うネギボーズ
目玉焼き好きな夫婦で平和主義
来る夏へ妻がドラマの彩を塗る
そつと手を出してくれてる思いやり
失業へ三度の飯は変らない

静岡県 藪田猿杏

新調の帽子ダンプに飛ばされる
幸せと思う時間を蓄える
雑草も負けじと春の花咲かす
絵手紙で御地の風がわかります
浅漬けの色鮮やかに自然食

富山県 島 ひかる

野も山もみな萌え渡る竹は秋
経文を奉じ仏と近くいる
目の回る街に住んでる蝸牛
ペイオフは心配ないと言う暮し
真実を知らず煽られ騒ぐデモ

愛知県 早川 盛夫

長かった冬へ爆発するサクラ
庭がありとても幸せそうな家
言い難いことを言わせたワンカップ
途中下車 人の情けに触れる旅
さて何処へ旅は気まぐれ春景色

大津市 中 宗明

真剣にぐれた生徒と話し合い
自分史の残る半数ゆっくりと
妻に愚痴言つてストレス軽くする
退院も間近に春を待つばかり
ドジのためストレス溜めて苦悩する

川柳塔のぞみ6月旬会

日時 6月28日(火) 13時から
場所 人形町区民館(地下鉄人形町A1出口5分)
宿題 「じゃがいも」「半分」「ユニーク」

各題2句「自由吟」1句 欠席投句6月25日迄
〒193 0832 八王子市散田町2-31-3 播本充子



(つづき)

犬山市 関本 かつ子

子育ては叱り孫には誉め上手
目指すのは自由そろそろ羽づくろい
合格の絵文字メールが春を呼び
人柄も入れて集める自治会費

静岡市 中西 雅

かまほこの指輪がしゃべる誕生日
明日散るを知らず空見てほこる花
ジャズが鳴る私の耳をあずけよう
老人会マツケンサンバの腰のゆれ

横浜市 金森 徳三

お花見に石焼芋が腰を据え
長話初めの中味忘れてる
朝の行お茶と梅干し老いぬぎめ
分別にやつと見つけたロゴマーク

昭島市 野口 忠

喧嘩して仲直りして四十年
どう生きるターミナルまであと少し
四月馬鹿ウソと思わせ本音吐く
目に浮ぶ故郷の友はセピア色

川柳塔の

川柳讃歌

⑥

木津川

計

黒粹の中の笑顔が気に入る

高瀬 霜石

笑いながら「御愁傷様」と悼む人はいません。にかかわらず、遺影が笑顔ではそぐわないではないか、沈痛の霜石さんの腹立ちももつとです。ですが、こう思いませんか。逝った人は難儀な此岸を脱け出せて、ほつとしたとき笑みがこぼれたのです。「しがみつくほどのこの世でなかりけり」(路郎)と達観できたら、さつさと逝くに限りましょう。どなたの俳句でしたらう。「愕然とまた欣然と牡丹散る」。僕もそう願いますから霜石さんも、黒粹の中で欣然といしませんか。

年金で暮らし文化の果てにいる

川端 一歩

文化の果てでなく口中にいようとしたり、条件二つが必要です。即ち、経済的ゆとりと時間的ゆとりであります。カネはあるけど暇がない、も暇はあるけどカネがない、もつら

いことですが、カネもなければ暇もない、を人生の最悪とするのです。「金のない日曜みみず掘ってこい」(天平)に感心したことでしたが、一歩さん、失礼ながら時間的ゆとりはおありでしょう。「時はカネなり」と自らを慰め、生きてゆくとしましようか。

まだ続く長い旅路に要る笑い

伊藤 玲子

そうです、玲子さん、沈んでいてはなりません。文化の条件に続いて笑える条件を挙げましょう。やはり①経済的ゆとり、を第一に、②精神的緊張や不安からの解放、③肉体的苦痛からの解放であります。こう考えると、笑えるとは有難く、恵まれたことなのです。玲子さんにいつまでも笑いがもたらされますように僕は祈ります。

境界線少しぼかして会うふたり

渡辺 富子

笑いも必要なら、恋のころも大切です。それも、この一線を越させてなるものか、と構えたり構えられたりでは面白くありませんね。富子さんの賢明ですが、「会う」は会話するみたいで色気がありません。「逢引き」はあつても「会引き」とは書かないでしょう。ここは「逢うふたり」が正解です。

花を買う男性みんないい人だ

坪井 孝一

「それいゆ」「ひまわり」を焼け跡鬧市の時代に出し始めた中原淳一は花屋さんでよく花を、ときにはひと桶全部の花を買い、脇に抱えて帰つたださうです。花と会話のできる、白い花の好きな、やさしい人だったといわれています。

タンポポの空へ舞いとぶ志

岩屋 美明

風に乗ってあえかなタンポポは大旅行に発つたのです。志なくしてそんな冒険ができませんか。三好達治も薊を謳いました。「ああこともなげに、健気な、小さなものの旅立ちよ」。小さな薊の笑も志、あるいは夢を持つているのでしょうか。

明日からは古希夢をまとめている日記

相馬 銀波

生きていくことは切ないから、人間は夢見ることと慰めと励ましを得たのです。焼け跡鬧市の街で歌われた「誰か夢なき」を思い出のです。僕も夢見た、青い山脈、でしたから今日まで生きてこられたのです。銀波さん、まとめる夢がまだあつてお幸せです。

(立命館大学教授・「上方芸能」誌代表)

自選集

療養日記（記録あり記憶はなくて雪月花）

（做）橋 高 薫 風

入院やただよいながら生きるべし

落花へは歎喜落胆相半ば

北海道名寄郡の冬木立

冬木立キャンパス眉に力なし

病窓の孤独ビリケンの足の裏

奥 田 みつ子

錯覚で生きるこの世に味がある

人病むに花に浮かれる浮かれてる

しがみつく命でないがさりととても

振り向けばみな透明になる月日

すべては無ただ恩返し恩返し

河 井 庸 佑

切羽詰り打った一手で生き返る

辻褄を合わした嘘と見透かされ

匠の業無駄な力を入れてない

反論も真摯に受けている器量

原点に戻って見詰め直す謎

川 島 諷云児

ほんとうに妻が怒っている静か

波はおしゃべり遠いあの日を語り出す

まだ未練あって余生に身構える

無愛想案外人がいいのかも

明日も行く道があるから靴磨く

木 村 あきら

本棚で眠りが深い知恵袋

真つ直ぐに歩いてカニに笑われる

信楽の狸に化かされそうになる

終電の顔草臥れた戦士たち

雑沓を抜けると碧い空がある

黒 川 紫 香

さくら見た話ではずむ談話室（病院にて）

また一人死んだ噂を寒く聞く

病院の食事も旨い日の話

病院でひとりが消えた日の寒さ

新入りの患者の悲鳴聞く夜更け

小 西 雄 々

ジョーク聞くうちにすっかり気を許す

世渡りにイエローカード付きまとう

エピソードまでは真面目に式に座す

浄土にはもう着く頃と葬儀終え

グラスに浮く噂いっしょに飲みほした

小林 由多香

はるばるとニーハオ黄砂やってくる
要には無口だけれど父が居る
ジグザグのコース気を抜くところがない
せり人の威勢へさかなはねている
家計簿にブレイキかけた跡がある

斉藤 焔

出土した種子から湧いてくるロマン
ドラマなら涙を拭いて済むものを
直球をまともに受けた掌のしびれ
目を入れてからのこけしは饒舌で
木鶏の心深くて深あくて

田中正坊

南京の守りは固し中華門（中国紀行）
中山陵はるばると来て立ちすくむ
300、000の数字が重し記念館
上海で一足先に乗るリニモ
姑娘の掌が温かしマッサージ

玉置 重人

大時計一期一会を愛おしむ
道草もしました まるくなりました
正眼に構えて風を読んでいる
花便り釘煮菜の花若竹煮
カレンダーのぞけば春のスケジュール

恒松 町紅

面影は忘れていない人に会う
感情を押えることも年の功
生き甲斐がここにもあった味自慢
世間とは狭いなこんなどこで逢い
思い出せるからまだいいと自惚れる

遠山 可住

出稼ぎの盃に舞う花吹雪
さくら咲くまでに一升空になり
晩霜へ老木の芽はあわてない
野良猫の逃げ足老いをあしらわれ
ちぐはぐの嫁に黙って追いてゆく

土橋 螢

あしたも晴れと牡丹ぼたんの花が咲く
安心させる麗らかな男おとこになる
爺さまの杖の先から草萌ゆる
罪を着る白い木綿のシャツを買う
寿命とは無色透明 春と行く

仁部 四郎

公民館の公民時にくすぐられ
公民館老若男女会議中
公民館で習ったサラタ木の匙で
公民館黒ネクタイも貸してくれ
公民館植木の寄付はくじを引き

野村 太茂津

優しいひとに手取り足取り導かれ

波瀾万丈倅せな生涯で

白寿まで負の体験を懐に

泣き言うな世界に通じない

負の体験を基に世間に何できる

波多野 五楽庵

潮騒をゆつくり食べる夕渚

玉葱がザクリと夏の音になる

二つ目の帽子も風が持つてゆく

体温が残る女の果し状

水鏡素直になれる訳でなし

藤村 女

すこやかたただありがたし卒寿坂

九十五年ドラマを抱いてまだ動く

人は皆やがてははてる風の音

九十年ドラマを語る写真集

水かえて澄んだ金魚の目と出合う

芳地 狸村

いろいろの匂い満ちてる花の庭

杉苔の彩をかざった落椿

お隣のさくらが誘う旅心

紫陽花を七彩染める雨しどろ

精一杯春をたのしむ花の庭

宮口 笛生

人間のアク抜く聖書読んでいる

九条が輝く日本信じよう

成るように成るを待つてる無責任

人間と同待遇の犬を飼ひ

終章を飾る祭壇花で埋め(弟逝く)

森下 愛論

満月へ己を晒す貌を持つ

企みを崩して溜まる悔い幾つ

寒風の中で喘いだ愚か者

妥協する裏を読んてる生きようと

花無尽花におぼれて花に酔い

八木 千代

葉桜と話して通る散歩道

今や花粉通りとなった杉並木

通行人だが人のふり見て通る

だからだと通れば何も見えぬ道

通りゃんせこほど怖い道はない

八十田 洞庵

風見鶏 風の噂は好きらしい

着飾った夜叉が仏の顔で出る

シヤネル5が陽気にさせて風に乘る

美人薄命どころか火傷するこわざ

仁清の壺は転んでいませんか

友よ友あの世の句座へ着いたか
 生きると悲しいものだなあ月よ
 永田町に防腐剤など効くもんか
 臨終に三つ立ち合い春がゆく
 大義なき派兵だ兵よ死ぬでない

両川洋々

阿萬萬的

家にまで愚痴持ち帰る曇り空
 老後の日日勝気な妻が舵をとる
 日課です妻につき合う荷物持ち
 しょうもない事まで妻は念を押す
 あんたそれつつ抜けですよと妻笑う

石川侃流洞

よちよちの曾孫へ似て来た僕の足
 最初はグーじゃんけん孫に叶わない
 積ん読の手頃枕に昼寝する
 猫勝手お出でと呼べば尻を向け
 ミイラ取りがミイラになった千鳥足

板尾岳人

どうしても逢わねばならぬかすみ草
 ピストルに構えた指にある嫉妬
 逢いに行く約束だった男下駄
 散るサクラ戦争ごっこ知らぬ振り
 君が代を上手に唄う影法師

第24年度 夜市川柳題と選者

	(題)	(選者)	(締切)
第1回	「トップ」	高瀬 霜石 選	6月末
第2回	「舞う」	岩田 明子 選	7月末
第3回	「牛」	新家 完司 選	8月末
第4回	「ドア」	西口いわゑ 選	9月末
第5回	「肌」	住田英比古 選	10月末
第6回	「発見」	赤松ますみ 選	11月末
第7回	「並ぶ」	金築 雨学 選	12月末
第8回	「奪う」	藤田 泰子 選	1月末
第9回	「週末」	天根 夢草 選	2月末
第10回	「甘い」	波多野五楽庵 選	3月末
第11回	「恥」	大野 風柳 選	4月末
最終回	「浮く」	小島 蘭幸 選	5月20日

特別常任理事会

日時 六月七日(火) 十三時から
 六月七日(火) 十三時から
 アウイーナ大阪 四階 マーガレット
 案件 一、同人・誌友の現状について
 二、その他
 ○参与以上の方はご出席下さい

主幹 河内天笑
 理事長 板尾岳人

あかつき会 川柳

日時 7月1日(金) 14時から 於II国労会館
 「もくもく」「激流」「清い」各題3句
 投句先〒596 0824 岸和田市葛城町891 22 岩佐ダン吉



奥田みつ子選

藤井寺市 鈴木 いさお

どこまでも母は母なり子は子なり

古希の身を案じてくれる母がいる

繰返し息子の歳を訊く卒寿

早起きと粗食で通す九十年

お迎えはまだまだ先と高笑い

ありのまま話してごらん楽になる

和歌山市 柏原 夕 胡

独り居てひとり独りを嘔みしめる

二兎を追い樹海に迷い込んでいる

ゆらゆらと酔ってあなたを忘れよう

真剣に叱ってくれる君が好き

わたくしのころはどこへ行くのだから

運命へ弱い葦だと知らされる

河内長野市 大西 文 次

やり直す人生ならばやめておく

九十四の暮しを猫にのぞかれる

我が庭に今年も残るはぐれ蝶

同じ山でも富士山と天保山

俺だつて今に見てろと言う秀句

もて過ぎて困る困ると言つておく

神戸市 山田 婦美子

親の歳越してうれしい春の宵

母居たら下りてみたいな通過駅

ささやかな喜び分かち生きている

描いてた夢とは遥か遠い城

旧友の便りは涙の隣です

花の下しばし無心の時が過ぎ

兵庫県 安達 厚

梅一輪咲いたと妻に告げに行く

毎日が試されている 生きている

登下校ままならぬ国さむ気する

無位無冠農一筋のいぶし銀

残される恐さ男は知っている

京都市 清水英旺

脳ミソよ衰えるなよバズル解く
虐げられて民族の怨消しがたし
眼鏡のくもりか世間の薄汚れ
軽い財布に相談しても埒あかず
晩節の道に思わぬ尖り石

三田市 堀 正和

各停の窓から春がやってくる
絵手紙をはみ出している春の詩
アパ地下で北海道を買ってくる
仲間だと思われている聞き上手
鬱の日に百均でする無駄遣い

羽曳野市 森 下一知

口裏を合わせて受けるとばつちり
泡を盛るジヨークの好きな紙コップ
合併へ足した梯子が揺れている
貧乏性嘘とヨイシヨが身に付かず
アドリブで逃れる道の行き止まり

大阪市 升 成 好

百葉の長百葉の酔い心地
遊びから学んだ人の裏表
老農は大地の声を掌から聞く
まどろみのみどり児にふと笑みこぼれ
父の役務めた母の苦労働

八尾市 赤木妙子

子を抱けば生きる確かさ温かさ
にこやかな裏にかくした嘘ひとつ
言い訳を猫にくどくどおちまける
目を入れて命吹き込む人形師
フィルムがのんびり回る日向ぼこ

今治市 塩路 よしみ

四面楚歌二人に青い空がある
ときめいて詩集繰ってるまだ女
仲間だと勝手に思う日の誤算
連れ添うて似たもの夫婦になる不思議
言い訳は恥の上塗りしてしま

和歌山市 喜田 准一

呑み込んだ本音で今日も生き延びる
収穫の明日を信じて種を蒔く
足して二で割れぬ話を持つて来る
油断した顔へ二の矢が飛んで来る
誉めちぎる飾り言葉の裏を読む

高知県 桑名 孝雄

神のご配慮年金つきのロスタイム
真っ正直が売りもの髪は染めてない
一宿一飯そんな絆もふたつ三つ
楷行草使い分けして生きている
ハンカチは白です すぐに旗になる

今治市 野村 清美

何もかも水に流して皿洗う
咲き誇る夢が楽しい花の種
リハビリに耐えて花粉にいじめられ
雨上がり若葉青葉に活貰う
仏前に今日も無事だと感謝する

大洲市 花岡 順子

山道を登ればそこに君が居る
年一度好きな桜に逢いに行く
人混みを避けひっそりと立つ桜
父の手は土を掴んで生きてきた
風を掴んで男は夢を追いかける

岐阜市 平野 あずま

春風に笑みをもらした仁王像
膨らんだ蕾を春の陽がノック
好奇心老眼鏡を買い替える
信号の黄に人間が試される
海賊にロマン抱いた少年期

奈良市 乾 春雄

てのひらに包みきれない義理の数
酒も唄も道づれにしてバスツアー
ヒーローもいつか挽歌を耳にする
風船も男も紐を切りたがる
日記帳あせた記憶に棲む慕情

広島県 馬場 利子

少子化の前途みちびく光待つ
罪一つ許してひとり風を待つ
風みどり明日のヒントが浮いて来る
自画像へ古里の花書き足そう
心の傷癒してくれる花を買う

日立市 加藤 権悟

父さんの日銭ベイオフなど無縁
再会があじさい寺と決めてある
善人の笑顔に勝てるはずがない
少子化を語ると沈めない夕陽
逆境の試練に耐えて来た拳

八尾市 脇 俊子

リストラの風はトップの足に吹く
肩書を脱いだら風邪を引きそうだ
心にも芽ぶかせたいと種子ひとつ
聞きなれた音にも喜怒の叫びあり
程合いの定規が上手く使えない

札幌市 三浦 強一

待つことが苦にならぬ趣味ありがたい
いつからか妻もルーペで辞書を読み
悪いのが一人も居ないから揉める
ハンドルに遊び ぼくには縄のれん
近道に馴らされてゆく電子辞書

シドニー 坂 上 のり子

六歳にサイコロで場を仕切られる

朝は先ず香一本に祈る無事

追伸の手書きに見えた意外性

バラ手入れの奥義拾った立ち話

病む友の苦痛想えばダンスなど

シドニー 三 谷 たん吉

乱気流 地震覚悟で日本行き

乱気流 地震がましと息つめる

スチューワーデス家にいるときどんな顔

古希超えてまだ隠しごとたんとある

さあ帰ろ花粉地震のない国へ

メルボルン 藤 原 ポン吉

コスモスで花見楽しむメルボルン

明日こそあさってこそと歳をとる

ロイヤルの大恋愛に励まされ

太陽の塔がマンモス牙になる

桜色藍色染まるゴルフかい

唐津市 岩 崎 實

村が市になっても田舎ほっかぶり

妻からの笑いなさいに笑えない

うっかりがまたうっかりが出てしまい

ケイタイのカメラで孫にうつされる

人力車ゆふいんまちを乗ってみる

北九州市 岡 田 幸生

入学に合わせて咲いたチューリップ

誤字脱字気にせず母のメール読む

カタカナの氾濫脳がうるたえる

転居した博多へ追ってきた地震

どんぐりの輪を抜けるにも要る勇氣

高知県 近 森 功

福耳を誇示するようないヤリング

ハードルをライバル並に上げてみる

ヒロインは孫です茶の間沸いている

爺さんも仲間入りする花粉症

ペイオフは知らない僕の預金帳

高知県 百 田 幸

恩返し墓に頭を下げるだけ

金よりも若者欲しい過疎の村

お見合いで顔も知らずに結ばれて

播いた種生えずに播かぬ草が生え

自分では若いつもり同い年

松山市 山之内 八重美

居眠りを見抜かれていた間の悪さ

スッキリと野心を捨てた老いの坂

トラクター山の悲鳴を無視してる

ほどほどにめぐる歳とおつきあい

ちぐはぐな話で老いの日向ぼこ

宇部市 高山清子

タイミング悪く軽口突きさささり
気にするなと言うから余計気にかかる
切れかけた絆をつなぐ花見酒
身の程を知らぬ背伸びをして転び
言い方で反発心が頭上げ

倉敷市 撰 喜子

四季に彩変える池畔に余生のび
養殖の鯛が通ぶる舌に勝つ
顔を拭くことに始まる介護の日
抜擢の人事嫉妬の目が寒い
職ひいて遊びも習う趣味の会

雲南市 福間博利

医者通いでできる幸せ動く足
パソコンも相手見ていたすねていた
躓いた小石にリズム教えられ
忘却という穴がありはまり込み
九条の鈴の音大分さびてきた

鳥根県 武島 ちよえ

咲きました貴男の植えたチューリップ
答えてはくれぬ遺影に話しかけ
一言も言わず桜が散るように
もう一度して見たかった口喧嘩
思い出に浸っています古日記

鳥取市 横田春名

感謝され感謝でこの世別りたい
喜寿夫婦初恋飾り笑い合う
花の下おさなご遊びああ平和
下り坂ゆっくり歩く老いもよし
心萎え ためいき一つ 笑みもどる

境港市 遠藤 那珂子

さわやかに生きよと神の声がする
さわやかな夫婦でいつもスニーカー
愛深くにらみきかせる父である
ここだけは私の城だ光らせる
親に似ずしつかり者に育った子

米子市 猪森 スミエ

もしもからまさかに変わる風の向き
合併の地図を囲んで首長選
ブレーキをしめてゆるめて育てた子
わくわくと夢つめ込んだランドセル
ああ新車 とほほ黄砂で厚化粧

鳥取県 平木 公子

廃校の桜変らず咲き誇る
悪い足なだめて父祖の地を守る
人の裏見抜けずピエロ演じてた
試着ではたしか似合っていたはずが
心地よい甘口ばかり聞きたがる

鳥取県 竹 森 富久江

風ぐるま肩の広さも憶えてる
下駄ひとつ道一すじに悔いはない
思案する僕の手のひら歩がふたつ
なっぱはネおひさまとつちのあじがする(六歳かおり)
わが君は腕白ざかり憎めない

和歌山市 寒 川 武

外人が支えてくれてる国技
片隅に明るい記事も載つてある
妻の電話向こうも暇な人らしい
空の財布投げ出し泣いた母おもう
歴史には残れないけど生きている

和歌山市 根 田 よしこ

孫等摘むわたしが播いたれんげ草
母親の役に終わりは無いと言う
孫よりもはしゃいで見てる万華鏡
新卒がヨッシャと見てるライブドア
おはようの老母の笑顔が宝もの

和歌山県 木 村 徑 子

ほとばしる詩に抱かれて翔ぶ卒寿
百めざす君を寿ぐ蝶群れる
一期一会駆け出しの詩祝卒寿
我も追う今熟成の最中です
ゆるゆると晩成にかけ夢無限

和歌山県 森 下 順 子

トレーニングすれば少しは力つく
来し方を語りつくしてさくらかな
見ただけで分からなかった人と添う
緊張が走る一見怖い人
いい事が続いて傷口が癒える

和歌山県 村 中 悦 男

卒業式やはり泪があつていい
今日生きる過去の誤算を乗りこえて
火を囲む談笑時を忘れさせ
正直が誤解を受ける破目となり
子育ての道に誤算がつきまとう

奈良市 矢 野 良 一

化粧するより素っぴんの君が好き
明日を語る少年の目が美しい
温もりが欲しくてくぐる縄のれん
酔うほどに本音出てくる酒の席
隠し撮り笑みが自然で美しい

橿原市 藤 永 実 千代

同病に囲まれ暮らす安堵感
意識下の意識を理解出来ずいる
尽くされて尽くし返せぬ不甲斐無さ
先生の腕に託した我が命
頑張らず諦めないで生きる道

奈良県 (前) 江 波 正 純

あたふたと妻にすり寄る定年後
深々とゴメンの頭よく下がる
気にしない気にしない庶民の痛み気にしない
快い疲れに泡がよくなじむ
便利さに人の心が侮られ

神戸市 両 川 無 限

強がりはまだストローの先にある
だんだんと無色になっていく祈り
灰汁みんな抜くと魂まで抜ける
見抜かれた時から嘘が上手くなる
苦い酒飲んで男は強くなる

神戸市 田 中 章 子

青信号自己責任で渡り切る
お叱りも愛と思って受けておく
ネクタイのセンスいいねと妻を褒め
花粉症梅の香りもマスク越し
がんばれと言われ深みにはまる鬱

神戸市 木 村 忠 義

しあわせな桜よ人が寄ってくる
寝不足はいやだと脳がストをする
ぎっくり腰地震のように不意に来る
ギブアンドテーク冷たい言葉だな
親子には見えないうけど親子

相生市 村 木 信 子

桜満開年忌の姑の声を聞く
駆け引きに妻の啖呵も入れてある
虚飾などさりと捨てた五十年
平均寿命まだある安堵女坂
人柄のぬくさをもらう国訛り

尼崎市 河 津 正 治

その頃は純愛でした幼な妻
己が非を純真な瞳に諭される
つい漏らす愚痴に本音が見え隠れ
一呼吸置いて気付いた振りをする
激論の知恵を生かした妥協案

篠山市 谷 田 多 美 子

リフォームにもえて老碌隅へやり
いい婆ちゃんでいたい角とりつのをとり
スカーフを貰ってオシヤレ知らぬ老母
花に酔い月に酔ってる人の波
孫三人個性のばして巢立つ春

三田市 阪 本 藤 朗

長生きは医者を手付けているらしい
足腰がOKを出し地球博
フアックスでまたも遊びの誘い来る
名はあるが名も無い草で終わりそう
スポーツ紙無縁となった定年後

三田市 石原 歳子

外出を取り止めさせた杉花粉
幸せな一日でした布団しく
齒の痛み若い証拠と夫言う
やさしさが刻んだ姑の深い皺
つばくろが今年も来たと日記書く

三田市 福田 好文

山裾の笹ユリそつと我を呼ぶ
へそピアス見とれ一駅乗り過ごす
田に水が張れて蛙のシンフォニー
要るいらん墓のチラシでもめている
夫よりベットと話よく弾む

西宮市 片山 忠

男なら僻みたくなるホリエモン
リスナーと共に歩んだラジオ局
うらぶれた真似はしないぞ年金で
わが主治医ざらざらしないから通う
これだけは言つて死にたいありがとう

大阪市 中井 萌

マネキンが着ればいい服だったのに
翔びなさい母さんずつとここに居る
桜咲く春にも憂い人かなし
バイキング二歳児だけが元を取り
ペイオフが決まり困つたふりをする

大阪市 伏見 雅明

気球上げ妻の出方を打診する
一輪の目立ちたがりが遅れ咲く
口八丁 足がお留守で蹴躓く
見下ろした苗木をいつか仰ぎ見る
だんまりに耐えかね妻の粘り勝ち

大阪市 三浦 千津子

お祝いが続く家計簿軋んでる
雑学のさまざま杖に古稀の坂
春という響きに命気張つてる
鮮やかな嘘へ寡黙になる心
大吉の予言わくわく電話口

大阪市 尾崎 黄紅

対面は帰還以来という奇遇
骨董の九谷の皿のようなひと
ほほえまし大工左官の手弁当
金あつて殺され 無くて殺す世に
惜別の情大正の銭湯が消え

泉佐野市 備後 三代子

庭隅のひなたに慈悲の指定席
昨日今日過ぎて八十路のすぐそこに
後何度会えるだろうかさくら花
愛燦々ベランダ泳ぐ鯉のほり
悔しさをバネに大器のフレッシュマン

泉佐野市 稲葉 洋

無粋にも一句浮かぶか花の下
任せろと立てた親指しけている
送別会どこか矛盾の賑やかさ
ひとりでも歌って帰る茜空
今という時をつないで行く彼方

岸和田市 中岡 香代

マイペース流れに添えず目立ちすぎ
ママ作る手作り料理風が付く
ドラマみて涙したあと子がみつけ
ごめん言う機会逃がして残る悔い
祖母の手に生き抜いて来たしわをみる

岸和田市 森元 ふみよ

歳月は姑の態度やわからかく
喪の友に声掛けられず立竦む
カレンダー此の丸印何だっけ
歳重ね亡母の味覚に相似形
無人駅ポピー一本揺れていて

堺市 藤井 一二三

桜いろの頬で宴のなかにいる
思っておき無うて桜の散りいそぎ
花無心 散って桜の潔し
寿を九十かさねて花の宴（野村太茂津氏の卒寿祝う
身をよじり泣く文雀の芸の艶（艶容女舞衣）

堺市 大久保 伸子

消しゴムで消せない過去をもてあます
外様そとさまと言つて外出しています
大空に征きたる人を忘れ得ず
もう歳を重ねぬ母の誕生日
シャンパンの泡はグラスをかけのぼる

堺市 奥 時雄

言い返す言葉とつさに出てくれず
我先に競つてしゃべる出演者
釈明を眉間の皺がはね返す
同窓会思い出せない人が注ぐ
失恋の相手の子女が部下となる

吹田市 二宮 栄子

肩の荷を降ろして趣味の風と会う
胸のうち読まれてばかりいる私
胸底に開けてはならぬ窓がある
娘と孫に電話のたびにだまされる
一輪の椿に心いやされる

羽曳野市 吉村 久仁雄

羽はもうないが火の鳥飼ひ続け
欲しいもの手にして欠伸ばかりする
ししおどしまだ日本を諦めず
反省に手間どり敵に追い越され
峠まで神が背を押し古道行く

羽曳野市 福田悦子

五指動く神に感謝をしなければ
百までではゆっくり進め砂時計
ちらちらと脚は女の彩を出す
あと少し終章飾る絵が画けぬ
かたかたと崩れて行った自信過多

枚方市 二宮紫鳳

花冷えへ心の傷が春遠し
同級会なまり飛び交う京の春
高台寺ねねの昔に思いはせ
おしゃべりがすぎて自責の念に恥ず
入園へ孫が主役のハイポーズ

藤井寺市 西村栄一

子ら元氣竿いっぱいの洗い物
好きだからあなたの風に乗っていく
あの日から妻の風向き変りだす
順風の中でクシャミが止まらない
芸が無いので隅っこで飲んでます

藤井寺市 吉田喜代子

地球博並ぶばかりの疲れた日
桜咲く誘いの電話したくなる
桜だけ祝ってくれる誕生日
その昔父の背ばかり追った下駄
ワントンポ後れて人の輪に入る

八尾市 平川幸枝

釣り人も魚拓と同じ額に入る
にこやかな夢には過去の人ばかり
マスクして勝気がのぞく耳二つ
真ん中で右も左もやり過ぐす
負けるものあつて他人と仲が良い

八尾市 松葉君江

空腹になると短気が顔を出す
姑の世話あすは我が身とだぶらせる
米一粒粗末にしない戦中派
古傷に他人平気で塩を塗る
まあしゃあない気持ころつと裏返す

八尾市 田邊浩三

余生でも粗末にすまい持ち時間
ぶつぶつと指折り曲げて明日句会
同類だ車中指折るおばあさん
男性のためです女性専用車
行き過ぎた女神あたふた追いかける

八尾市 寺川はじむ

行く前に土産で揉めるふたり旅
腹据えた途端に晴れてきた濃霧
他所の子と比べたくなる孫二歳
雑念を洗ってくれたギターソロ
朝霧へ予感膨らむ散歩道

大阪府 神野 千恵子

雪の日はコーヒーの湯気なおやさし
島国で魚偏旁幅きかす

似て非なる奥ゆかしさとかまどとと
大人にもうごめいてゐる疳の虫

ラブレターポストの口が待てと言う

大阪府 畑中 節子

窓ごしにくぎ煮の匂う春隣

大匙も小匙もいらぬ指加減

法要をすませ微笑みくれる亡夫

関取のお国をさがす世界地図

お日柄はともかく神も酔う挙式(孫結婚)

大阪府 小栢 こずえ

陽光とワルツを踊る名残り雪

卒業式山越え孫もたくましく

日々ドラマだから楽しく生きてます

水仙が春のラツパを吹き鳴らす

お世辞でも旨いと言われはずんでる

京都市 榊本 宏子

時々夫にいけず それも愛

休肝日ビデオ見ている長い夜

私似のズボラ息子といて平和

診断はパソコンにさす聞き上手

占いは都合よいよう胸に留め

京都市 三宅 満子

九条を支えきれない風当たり
巢立つ春ブルーになつた母心

懐かしい人に会えそな春の宵

平和やな都はどこも花絵巻

世の無常いつも桜に学んでる

長岡京市 山田 葉子

寒さ知る花芽に春が溢れ出す

情報の溢れる街に孤独死も

浮き沈みずつと見てきた流し雛

忙しそうに見えるだけの蟻もいる

まあだだよすぐに尻尾を隠すから

犬山市 金子 美千代

アンテナが錆ついてきた冬籠り

今が大事 今が一番若いから

悩んでた事はアホらし花吹雪

連合いは珍獣ワタシ異星人

忙しい人を選んで頼み事

尾張旭市 三浦 きぬ

天国の住まい予約の潮時か

逝く時はコロリと決めて手を合わせ

極楽の設計図書くうきうきと

幸せは七十年余の級友がいて

長電話孤独を癒す妙薬だ

愛知県 河合 ますみ

東京都 井上 つよし

ハーモニカみんな持つてる森の木々

負うた荷の軽さに気付く古稀の坂

にっこりと刺のある手が撫でに来る

春の陽に手抜き掃除を見破られ

しがらみを意地の鉄が切りたがり

横浜市 巖田 かず枝

酔客とゴミに桜が愁えてる

散ってなお筏となつて魅了する

裏表お日様浴びて老母元氣

音読のように聞こえる独り言

口下手の婿がぼそつと言うお世辞

横浜市 長島 亜希子

平和だなトップニュースが花便り

花粉症仲間が増えてハイタツチ

若者の肩持つわたしまだ若い

健康な夫の頭痛で大騒ぎ

乗せられて辞めるつもり役を受け

東京都 小川 賀世子

満開に燃やせば燃えるものを抱き

宇野千代の袖にあふるる花吹雪

花吹雪 友達ひとり帰らない

花吹雪 古傷ひとつ疼き出す

花散つて紫陽花までの句読点

虚か実か情報津波駆けめぐり

釣糸を垂れて朝餉の握り飯

鮎色のおでんの味は老妻の味

賞味期限に追いついてたまた肥り

おんおんと鐘の余韻の泣く今宵

草加市 飯土井 健翁

汗が好きシツカリかいて夜の酒

神ほとけよりも妻の霊信じ

死ぬまでを義理の浮き世の熨斗袋

ドン底を舐めた心を宝とし

亀の足九十五歳まで辿り

日高市 根岸 方子

師の文字に思わず涙溢れさせ

師の文字に努力不足を見透され

年齢を言えば未熟さ透けて見え

夢の中桐生の桜見えますか

お互いに我慢の糸の紡ぎ跡

秋田県 湊 修水

九十四歳高いハードル越えました

白寿まで頑張りたいと思えます

檜山の道にもさくらあるでしょか

大雪も消えて大地にわが名書く

長生きの秘訣も知らず歳重ね

鳥取県 毎田 信雄

粗食でも赤い血となり肉となる
子に意見するよりされて苦笑い
年金を卒寿でもらう面映ゆさ
誘惑に負けた振りして腰をあげ

今治市 渡邊 伊津志

野良犬のラッシュに馴れた歩きぶり

黄昏に溶ける野犬の細い影

吊り革の女性モデルのように立ち

両方が譲って空気丸くなる

伊丹市 延寿庵 野鶴

ロボットが視線集めてラッパ吹く

真っ白い時間をうめる写経筆

人人人の中で人試される

無色だがこれから染まる呱呱の声

藤井寺市 伊藤 アヤ子

春を恋し歌を愛して古希になり

今更と言わないでまだ古希ですよ

桜木の下で名も無い花も咲き

春ごよみ予定それぞれ丸がつき

鳥取市 森 美智代

ペイオフと騒ぐ人あり他人事

若者の自由ニートの電子音

六十の半ばを生きる以下余白

彼岸へと花見に行つて帰らない

鳥取市 山口 千代子

花便り心わくわくブラン練る
女です米寿過ぎてても紅を引く
重い口酒が次第に軽くさせ
花を肴に酒酌み交わす老いの幸

府中市 藤岡 ヒデコ

二番手につけて周りを見るゆとり

春うららうらうらうらとやり過ごし

かけ声をかけて立ったり座ったり

お陰さま今日も元気をいただいで

浜松市 杉浦 えむ

ティファニーの値札はつけぬ恋だった

コンビニの明かり誰かがいてくれる

温かい拍手に余計泣けたピリ

もう想定範囲内にはいない妻

藤井寺市 増井 ヨシ枝

春彼岸亡母に聞きたい事がある

よく笑う友にもあつた辛い日々

亡父の前老母を囲んで子沢山

時により苦言をくれる友を持つ

鳥取市 岡田 信恵

毎日が良きも悪くも運次第

新学期ピカピカ鞆飛んでいる

いつまでもおしゃれ心を身につける

幸せの瞬間あつて有り難い

東かがわ市 向山 治延

宝塚市 丸山 孔一

一步二歩三歩尻もち初歩き
空晴れて白寿をめざす万歩計
水琴窟やさしき音いろ耳すます
老農の田植する身に汗光る

倉吉市 前田 喜美子

心の手ずっと離さぬ夫婦みち
むずかしいブレーキかけるその尺度
囲まれて笑顔のまんまお浄土へ
男靴二度と軍靴は履かないで

堺市 荻野 像山

試す気が明日へ楽しみ繋いでく
言いそびれ悔いが渦巻くあだ枕
化粧して心の皺を伸ばして
緊張が解けて大きな欠伸出る

藤井寺市 俣野 登志子

嫁した娘と女同士の間電話
聞き上手下手な話も聞いてくれ
相談に乗って責任取らされる
真剣に聞いて損したのろけられ

池田市 多田 契子

お祝いの袋に義理の匂いする
四月馬鹿考え中に日が替り
眠らんと美人になれぬメラトニン
あの手口財を成したと噂され

戸締りを列車に乗って案じだし
合併で味も香りもない市名
新緑の山の息吹きに抱かれ立つ
通院の常連来ない病気かも

高槻市 佐甲 昭二

先頭を切れずに嘆く影法師
いたずらな誘いに乗って火傷する
躓いた小石に歳をたしなまれ
母の愚痴あくび殺して聞いている

倉吉市 酒井 芙美子

母さんの笑顔我が家の太陽だ
カーテンの向こうに見える灯が温い
星空に亡母の笑顔が見え隠れ
天の川泳げばきつと涼しから

和歌山県 辻内 次根

膝痛へ春のイメージ貼って寝る
怠けると夢の形が崩れだす
ぐつと踏むペダルで春のなかを行く
ありがたいお経を読んで無になれず

兵庫県 黒崎 美紗子

職さまり父子仲良く探す部屋
飛行機雲ゆつたり描き何処へ行く
雨の中花芽ふくらみ春を待つ
死ぬまでは女らしくと紅をひく

岸和田市 坂口英雄

命がけおりますやろか議員さん
春らんまん宴の後はゴミの山

何もかも喋ってしまふ酒の酔い
朝掘りの竹の子食べて今日の幸

松江市 山根邦代

廃校になつても桜咲きみだれ

ストレスも混せて花見のちらしずし

背中押す風がやさしくなつて来た

友の詩読んで負けん気湧いてくる

柏原市 伴洋子

思案顔負けを認めた十手先

人の手は借りぬと気負う老いの杖

クラス会真顔で歳を聞いてくる

根の深い悲しみ抱いた震度7

門真市 矢阪英雄

ポランティア緑の風で汗をふく

ポランティアお金の事は咽で止め

天秤に掛けた奉仕が重くなる

心から咲き出て嬉し奉仕花

西脇市 七反田順子

雑魚でいい雑魚のようだと言われても

プルームス親がお先に船をこぐ

水仙は同じ気持ちで咲いている

花と小鳥田舎暮しのよい所

横浜市 布山嘉信

米研げば色染まりそう赤い爪
褒め言葉枕に添えて左遷告げ

強制の国旗国歌がなじめない
自己主張桜の前にこぶし咲く

出雲市 荒木英子

エープリル嘘が真で有頂天

外に出て日本の善さを見直そう

歳のせい和食の味を恋しがる

脳叩き顔のシワなど伸びたよう

真庭市 矢谷富士野

しつかりと生きた証の川柳塔

手を引かれ孫三人と相馬の湯

花冷えに蛙顔出し引っこんだ

山笑い膝も笑うて花の山

佐渡市 高野不二

ペイオフの知恵を生かせる金がない

八十歳損する人もいる保険

新札の一片やつぱりにらんるる

子が吞まぬから遠慮する今日の酒

三田市 辻開子

ピッカピカの孫一年生春うらら

初挑戦旬のくぎ煮が卓の花

具だくさん味噌汁食べて病なし

同窓会還暦忘れ子に還る

高知市 伊野部 和江

雲南市 菅田 かつ子

入学に合わせるように桜咲き
イチローに職人氣質の顔を見る
天秤にかける余命と贅肉と
人は人間口広がる年の功

府中市 岩本 雅代

安来市 原 煩惱児

一輪の椿に口づけして惜しむ
桜餅友の好物手土産に
祝宴に老いも招かれ弾むのし
パンジーが個性で笑い春くれる

松江市 松浦 登志子

それなりの写真は箱に入れたまま
花激写どどん腕をあげる母
二回目は席が決まっている講座
右足の苦労話を聞く左

出雲市 川島 和歌子

物言わぬ恩師の笑顔夢に消え
方言で楽しい話父子酒
花の名を一つ覚えてまた忘れ
病んで見て歩く幸せ今気付く

出雲市 加藤 スズコ

今日の無事祈る感謝に箸の位置
老後設計寒い金利に崩れ出す
楽しい日化粧も乗った春鏡
姑の忌にむらさき色の花を買う

聞こえないふりしていつもマイペース
聞き上手 話上手でまるくなり
ゆつくりと行こう人生一度だけ
泣きなさい 笑いなさいと亡父の声

鳥取市 山岡 紀子

改修の川に魚は逃げたまま
ダム作り人も魚も戻れない
山奥の棲家追われた熊哀れ
春耕へ楔の弛み締めもして

鳥取市 谷岡 清子

愛犬の澄んだ瞳のいとおしき
老いたとて燃える気力はまだあるに
底辺に生きて諦めくせになる
馬耳東風思いのままの主生きる

鳥取市 河田 のり代

春雪に足を取られて舞い歩く
宝物身の健康に気が付かず
趣味多く八十路で友が増えて行く
今日は足明日は腕の痛む番

鳥取市 近藤 秋星

春が来た我ら老人ホームにも

花の下今年も春を満喫す

桜散つたら春駆け足で逃げてゆく

うちの娘の納采の儀も無事に終え

鳥取市 大坪 天涯

冗談を知らぬ頭が居て困る

旅立ちの駅が心にまだ宿る

メガネして見易くなつた世にまどい

もの言えぬ父は子供に詫びている

境港市 中井 虎尾

川の水うつした月を置き流れ

適量の酒は親しい夜の友

万札はうなぎのようだつかめない

嫁という守り神いて福の顔

米子市 小塩 智加恵

大家族あつたかごはんおいしかろ

嫁手術息子と孫が看護する

爺落とし婆が拾つて今日暮れる

手ばろする回数ふえる午後三時

鳥取県 橋谷 静江

愛の芽をいつのばすだろ孫の恋

酒二合飲んで花見へ夫の歌

はつきりとしなない噂がくすぶつて

子の躰大切にする匙加減

鳥取県 岡村 孝明

少子化の波に母校は碑を残す

祝宴に主の勲章近く見る

師の色にすっかり染まり許される

振り返る涙もあつた五十年

和歌山市 土屋 起世子

おだやかな言葉と歩く春の道

戸じまりをど忘れ花見上の空

平凡で平凡がよい母達者

誕生日買い物誘うカードくる

和歌山市 坂部 かずみ

風邪ひいて喜んでいる卵酒

侘しさにひとりであうたう応援歌

ポツポツと雨音を聞く亡母の声

春風に押され人生走りだす

和歌山市 山田 侃太

年金の額へ余命の貢献度

焼き鳥の串 上役を指揮する

もつたいないと言う親を続けよう

カクテルへ魔法にかかるコツを聞く

生駒市 小西 稔

強くなる女の力企業でも

共白髪強いきずなに感謝する

遠足といえは弁当母の味

花見酒弁当ひろげうさばらし

尼崎市 古川 正子

矢を放つ小さな的を狙つて

白木蓮咲き始め見る散歩道

浄水場古木の桜美事咲く

公孫樹の芽ぐんぐん伸びる若みどり

尼崎市 小池 幸子

春の空土筆摘む野辺小鳥達

長く生き曾孫に会えた今日の感動

野の草を生けて自然の風に会う

亡き人の螺子巻時計刻む音

兵庫県 永井 かほる

七七祝い宝が出来た孫手紙

孫も来て二度芋植えの好天気

手芸の日みんな夢中で目が光る

島にはこんな楽しい夢が湧く

兵庫県 岩本 美緒子

甘くないが選んだ彩筆終るまで

荒ぶれる神鎮まりて四方の春

君子蘭芽吹く今年も恵みくれ

嫁の心受けて楽しむ花の酔い

大阪市 池上 清治

涙そうそう哀感こもる歌に酔う

ライブドア若手の旗手と見るもよし

北へ行く鶴の親子の無事祈る

筆使う手触りやよし久しぶり

大阪市 中村 れんげ

縁とはいとも不思議よ豆のつる

どれほどの人に縁や今日を生く

この足でたしかめ今日の句が生まれ

残り花はらはら散りて亡夫思ふ

大阪市 吉田 富美

大クレーンわがもの顔に花の空

棟上げの槌音若葉風運ぶ

花吹雪逢いたい人を追って舞う

母の手の思い出つつむ柏餅

大阪市 寺井 弘子

紀宮日本中がおめでとう

大相撲ファンの声援減ってゆき

高学歴誇って見たが今ニート

抱き癖がつくから見てるだけの孫

大阪市 若月 祐作

山海の珍珠求めて旅に出る

旅に出て妻は初めに土産もの

手土産を持って団地の輪に入る

冬帽子裏を表に春を着る

大阪市 吉内 タカ子

モンペにも深い思い出たんとある

好きなこと出来る元気が三分咲き

花咲かす夢に向かつて走つて

合格の孫の自慢がしたくなる

大阪市 平嶋 美智子

カラオケで誉めてもらつた初参加
あの方のやさしさ背なに感じます
まだ若さ見せたくて出す空元氣
底見せる池に木洩れ日ゆらいでる

大阪市 吉川 弘泰

鯛の身の煮付けが出来て腕を上げ
飼い犬の糞が判かる犬の便
年寄りも若氣求めてテバ巡り
ありがとう昔の服が着れる日々

大阪市 平井 露芳

結核にかかつて猿も木から落ち
雨少ない香川も今じゃ水浸し
塩田がないから雨も遠慮せず
天皇家誰もしてない白髪染め

池田市 北出 北朗

蕨の子みんな仲良くサイショはグー
童心を田螺の道へ置き忘れ
蚊を叩く運命線に私の血
初恋の恥じらいの耳桜貝

泉大津市 助川 和美

嘆くより褒めれば変る子育ては
メールから怪しいにおい妻の勤
糖尿の亭主の味にならされる
お目当ての元彼来ないクラス会

河内長野市 印藤 智子

本日は会話あつたと書く日記
通販は眺め楽しむだけの歳
犬猫のペットに年寄り隅による
夫の心あついか試し老いに華

河内長野市 木太久 正一

年金が老人パワーに力添え
教科書をつくる会には四面楚歌
桜咲き心優しくなってくる
なによりも夫婦元氣が一番だ

河内長野市 内海 綾乃

川土手が舗装され草みつからず
引越して地震ないとこ捜して
ガソリン代何処まで上がる皆歩こ
事件のたび学校の門高くなる

岸和田市 堤 楯代

九条が逃げないように縛りたい
陽気にはついて行けない花粉症
背が縮みかわりに足が一つ増え
留守電がなければ淋し独り者

岸和田市 林 力子

別人の顔で出てくる美容室
ぼろぼろの封筒恋も期限切れ
奉仕する無欲の汗も虹の彩
便利さを使いこなせず居る不便

堺市 羽田野 洋介

切り絵のようくつきり浮かぶ遠い日々

長さより過ぎた時間の重さ知る

吹っきた後ろ姿が生き生きと

束の間のゆつたりに酔う仕舞い風呂

堺市 河盛 龍三

才能のあるのにひけらかさぬ奴

転勤の娘夫婦は里帰り

楽しくて摘み過ぎた芹どう食べる

朝ぼらけ今年も春の匂う庭

高槻市 安田 忠子

進歩して新たな病作り出す

ふぶく中ゴンドラ乗って夜の底

雪上車ガイドが付いてなお楽し

満開の弘前城はピンク色

高槻市 大崎 侑子

期待感持ち続けてる親心

自己中の割りには感化され易い

反応を見たくて仕掛けスカを食う

女ならオセンチだとは限らない

豊中市 源田 啓生

春の海のたりと行かぬ鳥があり

ランドセルばかりが跳ねる花の路

花の精胸のしばりを解き放つ
常識の囲みを抜けて時の人

富田林市 古田 千華

樹々芽ぶき気持はればれ迷路出る

三面鏡背なの丸さが気に入らぬ

母逝ってそれから背なに丸みでて

贈られた花の額ある女医の室

寝屋川市 北田 ただよし

飛行機が浮くがごとくに世を渡り

友が逝くポツリポツリと歯が抜ける

吸いとり紙こぼした涙消してくれ

放任主義格好だけで帰り待つ

羽曳野市 永田 章司

強制でないと書いてる奉加帳

偏差値が子供の未来決めたがり

子宝を願う神仏はしごする

いい人を味方にしたが頼りない

羽曳野市 松本 静子

お茶室は心落ち着く四畳半

卒業し今は懐かし道草も

見つけたよハミング響く春景色

猫だけが私の歌を最後まで

羽曳野市 仲谷 真一

はたる族おぼろ月夜をながめてる

裏声でささやかれたら気をつけろ

葬式とまだまだ縁のない私
はらはらと卓を囲んでパイにぎる

東大阪市 米田水昇
過ぎた日の恋呼び戻すロゼワイン
乾杯の盃に一ひら花が舞う

第三の青春映す赤い酒
空見れば我慢が消えて広くなる

東大阪市 今岡真人

フィナーレは河内男の名調子

前向きに生きれば明日が見えて来る

古今東西祈る姿は美しい

風を待つ枯れ葉身支度出来ている

枚方市 小川良吉

すぐたまる小銭自販機呑んでくれ

善し悪しを呑んだつもりが愚痴る酒

老いてゆく夫婦それぞれ癖あらわ

繕うてもったいないと郷里の母

八尾市 西川義明

欲しいのは若さ溢れる玉手箱

わが五体父母の形見を賜わりて

腹立てぬことにも馴れた薄い髪

その調子頑張る孫へ応援歌

八尾市 笹倉ひろし

ハイテク品買って老化を思い知り

通学の孫のガードに雇われる

内憂と外患に病むわが国土

遅れても共に苦楽の古時計

八尾市 中島春江
お花見の場所取りこれも仕事です
桜ひこばえ花弁くつきり目の高さ

口喧嘩時どき夫婦仲がよい
かぎりある命を生きる心して

八尾市 田中トシエ

合鍵を探して今日も生きている

老いの身に横文字ばかり責めて来る

色々とある人生の途中下車

一石を投ずる石が見当たらず

大阪府 高木道子

物忘れ認めたくなし六十路坂

意地からも咲いて見せたい雑草の花

浅学に辞書が離せぬペンの先

選挙前出来ぬ言葉を言ひすぎる

大阪府 西川冷子

岡本の疎水にあそぶ夫婦猪

万歩計猪に出遭って狂いけり

孫は今 金食い虫に御座候

参観日夫婦喧嘩を微に入りて

犬山市 吉田幸子

殻破る音聴いていたユニホーム

ソプラノが腹の底から春を呼び

生い立ち記春の小川のように聴き

よいしょしてやる気互いに呼び起こし

(関本かつ子・中西雅・金森徳三・野口忠の四氏は53頁に掲載)

特集



思い出の歌 (曲)

(順不同)

相馬の空

天正千梢

かれこれ二十年前になるでしょうか、宴会の席で相馬盆歌を聞いた時、

「はるか彼方は相馬の空よ 相馬恋しやなつかしや」の一節に何か胸にとぎつとする感じを覚えたものでした。

それから相馬の人達は人情厚くやさしい方がそろっているのだらうと、思い出すだけで相馬の空が見たくて、息子に「相馬の空を見に行きたい」と言いましたら「奈良から空が続いてる、行かんぞええ」と一言。

しばらく心をしずめていたのですが、カセ

ットを買って聞いていると矢もたてもたまらず、とうとう仙台まで新幹線、常磐線と乗り継ぎ、相馬駅下車タクシーで中村神社まで着けてもらい、本殿の前でああこの空が焦がれ焦がれていた相馬の空なんだと、首がだるくなるまで青く澄みきった深い空を眺めていると、次から次へと涙が流れて来て心ゆくまで眺めていたのを、ついこの間の事のように思い出します。

待つてもらってた運転手さんは「相馬はいい所ですよ、馬追いの祭りの時は大変な人出です」と言います。私はお祭り以外で参拝人の少ない方が、心が落ち着いて好きなんです。「それにしても相馬の空だけ見たいと、はるばる奈良から出かけて来るなんて、珍しいお客さんですなあ、三十分待つてましたよ」

との事でした。

今でも相馬盆歌を聴くたびに、あの日のことをありあり思い出して楽しんでます。もちろんテープは度々聴いています。

馬追いの祭りはさぞやすごころう 千梢

片手でオルガン

井上桂 作

楽しかった低学年のころ、朝寝坊の時は真隣の学校へ塀を乗り越え教室に飛び込んでいました。それでも宿直の先生方には可愛がられ、放課後は学校でオルガンをひくのが日課となりました。当時音符もなにも知らないのに、耳から入ってくる童謡はたいいてい弾けるようになり、得意になって片手でオルガンに向かっていたのを思い出します。

終戦後、並木路子の「リンゴの歌」が全国に広がりましたが、たとえ自由な時代に変わったとはいえ、急に流行歌を歌えというのは無理な話です。しかし、成人して一番忘れられないのが三木露風の「赤トンボ」でした。童野の駅を降りた時、お昼のサイレンの代わりに赤トンボの歌が町中をながれていまし

た。「十五でねえやは嫁にいき」……ちょうど私の母も、お見合いもなにもなしに十五歳で嫁にきた話をしてくれました。当時は十五歳が結婚適齢期とされていたようです。

次に陽気な歌声で唄った「かもめの水兵さん」です。北米のラスベガスで見たホテルのショーで、イギリス海軍の制服を着た大女たちのラインダンスにはびっくりさせられました。そのうえ日本人観客のためか、何回も何回もこの歌をながしてくれました。ひとりで涙が出てきたことを覚えています。

ついで子供心にもしんみりさしてくれた北原白秋の「この道」でした。現在でも幽玄性のある詩歌が好きなのは、この歌のせいかも知れません。終わりに案外難しかったのが「荒城の月」でした。当時の小学校の国語の教科書に、「欧州を旅行中日本人とみるとよく聞かしてくれたのが荒城の月でした」という旅行記が載っていました。そんなによい歌なればと、一生懸命練習した思い出があります。

いまでも童謡は好きですが、付き合いが悪いと言われても「カラオケ」だけは遠慮していません。最近暇をみつけては、新しく購入したオルガンで、子供時代の思い出に耽っています。

ます。いまま昔同様笑われながらも片手でしかひけません。左手は添えているだけです。

お仙の茶屋

高 島 啓 子

むこう横丁のお稲荷さんへ一銭あげて
ざっと拝んでお仙の茶屋へ
腰を掛けたら洗茶を出した
洗茶よこよこ横目で見たら
土の団子か米の団子か
とうとう鳶にさらわれた

この唄を祖母以外の人がかうたうのを聞いたことがない。明治十四年生まれ祖母は江戸っ子で浅草猿若町育ち。小学校を卒業したのが自慢だった。

二歳過ぎから七歳の敗戦の年まで私はおばあちゃん子であった。狸、狐の化ける話を毎晩聞かされ、江戸子守唄で寝かせてつけられた。時には「青い目の人形」もあったが、「お月さまいくつ」や、猫じゃ猫じゃで始まるわらべ唄をよく唄っていた。

たまたま『柳多留名句選』下（岩波文庫）を読んでいて冒頭の唄のお仙は笠森の団子

は七日母が売り—の脚注に出てくる茶屋女である、ということが解った。おせんがお仙とはつきりした。何だかとても嬉しかった。

祖母は私に片仮名、平仮名を教えた。おかげで戦前の漫画はのらくろを始め、夢に見る位読んだ。本を讀んでいかなかったら幼時の記憶は貧弱なものになっていたであろう。

祖母は戦後、東京に居たが何度も来阪し、梅を漬け、かきもちを焼き、あくまで娘であった母や孫たちのために働いていた。中でも糠漬は絶品で、茄子の浅漬けのおいしかったこと。夕食の時間に合わせて漬けると言っていた祖母の濃やかな愛情を想う時、涙腺は弛む。

三つ子の魂

福 士 慕 情

祖父は大工の頭、祖母は助産婦と当時としては珍しい共働きであった。私が生を受けて、何歳から記憶があるだろうかと追憶すると、三歳の時に弟が生まれ、町内を触れ回ったことから断片的に記憶が甦ってきた。祖父は武家の次男として生まれ、武士の商法で何人か

の土工を雇い、請負をしていたらしい。私の記憶では大工さんの出入りはあつても、祖父が自ら仕事をしていた様子はなかった。祖父が仕事をしていた関係からか、とにかく人の集まる家ではあつた。酒が出ると祖父は自慢の喉で詩吟を吟じる。「ベンセイシユクシユクー」そこで私の出番となる。母が使っている物差しを腰に挿して鉢巻をし、吟の意味も解らず祖父から教えられた通り物差しを振り回し、お客の前で得意げに舞うのである。

吟が終わると祖父は、私を膝に抱いて頭を撫で酒の肴を食べさせてくれた。それが五歳まで続いた。祖父は神経痛を悪化させて寝たきりとなり詩吟を吟じなくなった。私もまた詩吟を忘れていった。それから十数年の時を経て或る日、白虎隊や、武田節の中に挿入されている詩吟を聴いて、それらの歌謡曲を口ずさむようになった。

還暦を過ぎてから詩吟の会へ入会し、祖父が吟じていた「ベンセイシユクシユクー」は、実は「不識庵機山を撃つ凶に題す」頼山陽作ということがはじめて解った。詩の意味も今では解るようになったが、三歳時に舞っていた「ベンセイシユクシユクー」の舞は何一つとして思い出せない。三歳の重の舞い姿

を想像するとき、ひとりでに頬が綻んでくる。六十年の歳月をかけてやっと祖父の吟に巡りあえたのである。

題不識庵機山圖

鞭響肅肅夜過河 曉見千兵擁大牙
遺恨十年磨一劍 流星光底逸長蛇

涙の渡り鳥

小 玉 満 江

雨の日も風の日も みんな散り散り

私じゃ浮世の渡り鳥 泣くのじゃないよ

泣くじゃないよ 泣けば翼がまた濡れる

私には悲しい唄の一節である。桜が咲くと

想い出し、涙が出て悲しくなってしまう。

それは昭和二十七年の桜の咲く頃の事である。夫は戦傷を受け昭和十九年、内地送りとなつたが傷も癒えぬまま、傷が元でその頃恐れられていた結核にかかってしまった。

どこへも行けず二階の窓から外を眺めると数百米先に桜の山の階和園が見え、道行く人も楽しそうだ。そして山からかすかに「リンゴの唄」がきこえる。夫は窓に寄りかかり、淋しい声で「涙の渡り鳥」を唄っていた。そ

の後ろ姿を見て私はなんども涙をふいた。夫の心が痛いほどわかる。病気がうつるといけないからと、子供は側へ寄せつけなかった。孫を可愛がる私の母が居たから、子供達は救われた。そして入院生活八年、ついに夫は帰らぬ人となつてしまった。

子供達を思い、親を思い、私の事を思い、「ごめんなあ、子供達のことば頼んだよ。ああ苦しい」。それが最後の言葉であつた。

桜が咲くと私はこの歌を口ずさみ夫の冥福を祈る。

お蔭様で今は幸せに暮しています。安心して下さい。

人生の応援歌

岸 本 孝 子

この坂を越えたなら

しあわせが待っている

そんなことばを信じて

越えた七坂 四十路坂

いいのよ いいのよ あなたとふたり

冬の木枯し 笑顔で耐えりや

春の陽も射す 夫婦坂

この歌は都はるみが昭和五十九年、歌手生活に一区切りをつけて引退する時に歌った記念の曲です。

丁度この前後私も家庭的に苦しい時代でした。病弱な姑の世話や、住宅ローンをかかえて仕事を辞めることもできず、また、子供の学費の仕送り、それに加えて夫の単身赴任等、何もかも一人で背負い大変な時でした。

そんな時にこの歌に出合い「この坂を越えたなら幸せが待っている……」という歌詞をかみしめながら頑張ったものです。

それから二十年、長いサラリーマン生活も終え、姑も送り、子供二人もそれぞれ家庭を持ち、今では同居の孫も成長して自分の時間も持て、ゆつたりとした生活を送ることが出来るようになりました。

「冬の木枯し笑顔で耐えりや、春の陽も射す夫婦坂」という結びの歌詞そのものの生活を送っています。

今でもこの歌を聞くたび、苦しかった頃を懐かしく思い出させてくれる不思議な力を持った歌となりました。

命ある限りこの歌を大切に歌っていききたいものと思います。

ちなみに私は都はるみの大ファンで、再デビューを喜んだひとりで。

その昔

安食 友子

思い出の歌と言えば古くて恐縮ですが、小学生の頃に流行った「麦と兵隊」でした。その頃に力強い「徐州徐州と人馬は進む」東海林太郎の歌がラジオから流れ口遊んだものでした。さぞや兵隊さんは馬までも大変だろうと子供心に焼き付きました。それに実兄が中支で馬の当番兵をやっていたので、余計そう感じたのかも知れません。

当時の先生からのお勧めもあり数人で慰問袋を作り、その中へ軽いレターも入れて送った所、一人の上等兵さんからよろこびの返事が参り、遠い中国からのお便りに誰もが感激してしまい回し読みしたりして大事でした。何せ物の無い時代で千人針を作ったりもしましたが、返事はかりで悪いと思いつながら、ひたすらに国のためにがんばって下さい、と書き送り続けた事はありありと覚えていてます。終戦となってどうしようかと思いついていた矢先に、島根県山奥から無事に帰還されたとの朗報があり、そこで終局となりました。

た。私の幼稚な小さい愛国心のエピソードでございます。

海と私と青春歌

乙 倉 武 史

青い背広で 心も軽く

街へあの娘と ゆこうじやないか

紅い椿で ひとみも濡れる

若い僕らの 生命の春よ（以下省略）

昭和も初めの頃はまだまだ平和で、ぬるま湯的なロマンチックな雰囲気の色濃く漂っていた。巷では軽快なリズムのメロディーが氾濫し、サラリーマン向けの歌が数多く流行していた。

岡山の小学校を終えると神戸の兄の奨めで上神、サラリーマン生活を初めて体験した。その頃はやってた歌は今でもおぼろげながら、ときたま口ずさむと、あの頃の光景が走馬灯のようになつかしく思い出と共に蘇る。歌は不思議な力を持っている。

その後、船会社の遠洋航路給仕に転職、マドロスの卵になったのは十九の春だった。当時日本は国策により満州国を建国誕生させ

た。内地と大陸を結ぶ唯一の海上ルートを、大阪商船が一手に賄っていた。ドル箱航路だった。神戸港から満員の船客を乗せて毎日の如く出帆していた。

私も乗客六百余名の身の回り寝食の世話の一端を担い三泊四日の航海中はとてもしつらく、われわれ下っ端は朝早くから夜中遅くまでコマ鼠のように働いた。

色々ストレスもあったが、若さのせいかわれも忘れ、元気で毎日朗らかを心掛け、流行歌の替え歌など作って日頃の鬱憤を晴らしたものだ。

元唄（ああそれなのに）

空にや今日もアドバルーン
さぞかし会社で今頃は
お忙しいと思うたに
ああそれなのにそれなのに
ネエおこるのおこるの
あつたりまえでしよう

替え唄（ああそれなのに）

朝は四時から起こされて
晩に寝るのは十二時ヨ
それでも月給は十五円

ああそれなのにそれなのに
ネエおこるのおこるの
あつたりまえでしよう

現在は労基法も整備されて働く者は護られて安心だが、戦前は働く者は不利な労働を強いられ、過労も見過がされるのが普通だった。歌は世相を映す鏡、時には励まし勇気づけ、寒しく心を慰めてくれる此の世の宝物と思う。

お宝テープ

吉岡 修

歌は好きで、よく聴くし歌ったりする。

三月十二日NHKテレビのど自慢チャンピオン大会の放送をじっくり観た。

この日びっくりしたのは、二〇人のチャンピオン、いずれも若い人の中に、七十八歳という男性がいる。私と同じこの人が見事に谷村新司の「群青」を歌った。

これがまた実にいい。いいと言うのは私も歌えそうに心地よく響くからだ。こうなる性質上自分もクリアしてみようと思いつく。

ここで私のストックのテープが役に立つこ

とになる。自分で再録した歌のテープが今手許に六十八本ある。平均二〇曲入れているので約一三〇〇曲、自分好みのはかり、たいたいの歌が入っている。「群青」も勿論あった。

早速一曲テープに移しかえてこれを繰り返して聴く。みな我流の練習だが、何度も聴くとたいたい覚えられる。

「群青」もきつとマスターするだろう。ストックのテープにはこの他にもいろいろ思い出のものもある。

ひと頃クラブでホステスさんとデュエットしたのをテープにしてくれたものだ、「修&ナオミ」などと書いてある。そんなのも何本がある。

古い歌手のものでは、東海林太郎、美ら奴、淡谷のり子、市丸、奈良光枝、ビング・クロスビーなんかも何曲が入っている。

そんなのを含めて時々これらのテープを聴いていると、改めていいなあと思う歌に出くわす。これを折々練習して、カラオケで歌うとこれがまた面白い。「吉岡さんまた新しいのを覚えたのか」と驚いてくれる。

これらは私の古い古いストックのテープから拾い出して来たものとは、誰も知る由もないだろう。

ニヤニヤしておく。いいテープだ。

思い出の歌

白根ふみ

私の青春時代は大東亜戦争の真つ直中で、美しいものに憧れるとか、恋の悩ましきなど一切なかった。セーラー服にモンペを穿き、日和下駄を鳴らしリュック（帯の芯でつくった手製）を背負って登校したものであった。

休日になると、家の前を若い特攻隊が、茶色の繫ぎに茶色の飛行帽を被り、真つ白いマフラーを首に巻き、明日はないと語りかけているようだった。また予科練生は、ブルーの服で列をなして規則正しく歩いていた。

どこからともなく「同期の桜」が流れてきた。「貴様と俺とは同期の桜、同じ兵学校の庭に咲く、咲いた花なら散るのは覚悟、みごと散りましょ国のため」。……等と明日のいのちのない若者の歌が平気で流れ、それを当り前のように聞いていた。

やがて悲しい敗戦を迎え、挙つて若は自棄糞ばかりが蔓延っていた。

その頃はまだ純情さが多少でも残っていたとみえ親のために働かなければなど考えてい

た。

世の中もぼつぼつ落ちてきて

「新雪」 昭和十八年 灰田勝彦

紫けむる 新雪の

峰ふり仰ぐ このころ

麓の丘の 小草をしげば

草の青さが 身にしみる

と流れてくると、矢も楯もたまず、この数年間のプランクを一気に消してしまった。美しい声、甘いメロディーに若者はみな酔い痴れたことであらう。

いい歌は人のこころを魅了し、人のこころを和らげ、明日への希望をもたらせてくれるものと思う。

天に向つて言うことはない

天に向つて感謝の歌を唄うこの頃である。

童謡に今日という日がありがとう ふみ

悲 愴

榎本舞夢

終戦後、世の中が混沌としていた頃、女生だった私は学校で習う曲以外、クラシックにあこがれ、小沢征爾さんに夢になったも

のでした。音楽会といえ、無理をしてチケットを求め、フェスティバルホールに通つたものでした。

当時、音楽喫茶が流行っていて、コーヒー一杯で好きな曲を聴いたものでした。

卒業してからも、コーラスやラジオのリンクエストに夢中になりました。特にチャイコフスキーの「悲愴」が好きでした。人を好きになつても「悲愴」。失恋しても「悲愴」と……

結婚してからは童謡・流行歌、テレビから流れ出る曲に癒されて来ました。今、人生において忘れてられない歌や曲を持っていますかと尋ねられても、これといつてない私を情けなく思います。

小学校六年で疎開し、女学校で終戦を迎えた私にとって、結婚するまでのクラシック音楽に夢中になっていた時代こそ、いい青春だったと思います。

深夜のリズムと遊ぶ

園山多賀子

大正元年生まれ。数え年九十四歳の老婆。厨事も卒業し、結構な身分である。徒然に、

夜はもう九時頃には早寝の床に就く。すると深夜の三時頃には眼が覚める。枕元のラジオのスイッチを入れる癖がある。ポリリウムを下げ、不寐ながら臥したまま、深夜放送を聴く。「砂山」、「ちんちん千鳥」など、遠い昔の歌が流れる。老いては、大正、昭和時代の歌が懐かしく、夢幻の境地で聞き惚れる。ささやかなリズム感に、生かされる喜びがある。卒寿の孤独を癒す一刻でもある。若い孫達は、一笑に付すと思うけれど……。

リズムに合わせ、私独特の健康体操を続けている。テレビや新聞などから収集し、自分なりに編成した全身運動である。それが希代に歌のリズムに合うから不思議だ。勝手に合わせているのかもしれない。凝り性というのか、執念深いというのか、曖昧な自負かもしれない。

曾て、尼緑之助氏から「何事も継続が肝要川柳に於いても尚」と教示を受けた。それが深く肝に銘じていたのかも。そんな些細なリズム感を大事にしたいと思う。

私は元来が音痴で、カラオケなどのストレスのはけ口もない。専ら聴き手にまわり、結構楽しんでる。

深夜放送のリズムと遊ぶ。私のささやかな

贅沢だと思ふ。臥したままの我が儘な姿勢を亡夫の遺影に恥じながら、詫言ひている。

私は就寝前の体操をした後、両脚を伸ばし、仰臥の型で眠るのだが、眠ってから無意識に涅槃像の姿勢になってしまう。

逐次、仏に近付いていく証かもしれない。

懐かしく遠い歌

毛利 幸

遡ること約半世紀前、私は東京で生活する大学生であった。まだその当時は戦災の傷跡があちこちに残っていた。アルバイトで学費を稼ぎながら、学業生活を送る遠い昔の想い出の歌がある。

学生寮で起居する同室三名、部屋には机代わりのミカン箱が置いてある殺風景なものであった。その頃大学近くの出身で現在でも活躍している、島倉千代子さんの「りんどう峠」が毎日、五時十五分になるとラジオから流れていた、この歌が合図のように夕食が始まるのである。寮監の「メシダー！」の大きな声が聞こえると、各室からドタンバタンと賑やかに厨房へ急ぐのである。その時の情景とこの歌が懐かしくオーバーラップし、今もなお

忘れないでいる。

私のような地方出身の学生にとつては望郷の念は強い。これを刺激するように、今は亡き春日八郎さんのヒット曲「別れの一本杉」がまた忘れられない。当時私は都内の保健所でアルバイトをしていた。昼間の暑い中、下水路の消毒のため重い噴霧器を担ぎ、町内のあちこちを回っていた。汗と涙の生活、苦しい労働に一時の安らぎと癒しを与えてくれたのがこの歌である。歌詞中の「泣けた泣けたこらえきれずに……」この一節が私に元気をくれたような気がしている。特に青春時代の歌は何時までも忘れられなく終生心に焼きついて残るものである。

歌は時代を映す鏡である。その時々々の生きざまを過ぎ去った残像として、この二つの歌が懐かしく私の脳裏を今も、走馬灯のように去来しているのである。

懐かしい歌は私の青春譜

幸

『婦系図』の主題歌

富田蘭水

映画の主題歌は、その映画が偉大であり人々にこよなく愛される時、それは人々の心

の底に水久に生きている。全くすばらしい。
湯島通れば思い出す

お薦、主税の心いき……

私の大好きな歌に、一世を風靡したと言っても過言でない映画「婦系図」の主題歌がある。いささか現代の若い人には古い存在で未知かも知れぬ。「婦系図」は、「金色夜叉」の尾崎紅葉と共に、人も知る泉鏡花の代表作の一つで、映画、演劇でよく紹介されたものである。

私は昭和二十年代、東京の日大文学部日文科の学生で、婦系図に深い関心を持ち、神田あたりを歩くたび、湯島天神へ参詣した。

主題歌にうたわれている「お薦」主税のあまりにも悲しい物語。舞台が湯島の天神の白梅。実に若い学生心をこの上なく揺り動かした湯島天神への愛着を深めていった。この歌が私を強くとらえたのは、この頃からである。その後、縁あって教職につき、会合等の直会での歌は、湯島の白梅オンリーであった。私はこの歌に誇りと愛着を持っていた。

尾崎紅葉の「貫一、お宮の熱海の海岸」も人口に膾炙されていたが、私にとっては「湯島の白梅」がどれほど、強く私の心を捕えたかは論をまたない所である。心の糧であった。

世の流れにつれ、我々の暮らしの一つに、カラオケが流行した。私はいつも、この湯島の白梅を選曲、しばしの間、歌に心酔し曲にひたり、すばらしい価値を友とした。

老齡の今、歌詞の記憶が不十分であるが、問題ではない。生涯私の心を深くとらえたこの湯島の白梅、私にたくましさすら与えてくれる。歌にひたる時、湯島天神が彷彿として生き、この文学作品の価値まで想起させてくれるこの頃である。

海底のマーチャンに

丹後屋

肇

「我が大君に召されたる、命映えある朝は
らけ 讀えて送る一億の歡呼は高く天を衝く、
いざ征け、強もの、日本男児」 姓は稲葉だ
が、正芳か、正信か、正昭か、よく分らない。
僕らの仲間うちでは、マーチャンで通っていた。
マーチャンは僕が小学三年の時、確か高
小二年になっていたから、五ツか六ツの違い
だろう。彼は僕を家来のように、また弟のよ
うに可愛がってくれて、トンボ捕りや、淀川
のハゼやセイゴ、イナ釣りに連れていってく

れた。捕ったトンボに鬼ヤンマという、子供
にとっては垂涎の逸物を、いとも簡単に僕に
くれた。釣りも魚のいそうな場所を、指をさ
して、このヨシの奥に浮子を投げると言った。
その通り投げると確実に魚が食いついてき
て、僕はその手心えに夢中になった。マーチ
ャンは僕には神さま以上の兄貴分であった。
昭和十九年のある日、戦局が次第に不利に
なって、「ボクも征く！家族やお前なんか
辛い思いをさせないぞ」。志願兵だった。「マ
ーチャン頑張って」僕はマーチャンが必ずア
メリカに勝って、片手を突き上げて帰ってく
ると、信じていた。その出征の日に「我が大
君」を近所の人たちと一緒に、思い切
り大声を張りあげて、大阪梅田の駅まで見送
った。そのマーチャンの戦死を聞いたのは、
数ヶ月後であった。「ウソだ！」僕は怒り狂
った日事を忘れない。人々の噂では、マー
チャンは南方輸送中の船底で、敵の魚雷一発
で、一瞬のうちに海の藻屑になったという。
僕も中学生で焼夷弾の戦禍に遭い九死に一生
を得たが悲惨な戦争の爪痕は平和の今も深く
心に刻まれている。

マーチャンの一瞬の死が、僕に長い人生を
享受させてくれたのだと思うと、彼のた

めに立派に生き抜いて、その志を受け継がねばと時に触れ、強く思い起こす。この軍歌が、どの作詞家作曲家のものか、僕はいまだに知ろうとは思ひもしない。

異国人に童謡を聞かされて

岡 本 久 峰

我々司令部大隊がシベリアで多くの戦友を失い、再びウクライナ州の首都ハリコフ市に連行されたのが、二十一年九月で既に寒さが忍びよっていた。その時、先着のドイツの捕虜達が、戦争で破壊された工場の再建に青写真を引いていたのが印象的であった。その後、道路工事、石材運搬のラポータに追われた。

ウクライナもシベリアに劣らずに冬は寒い。満州当時の防寒外套を着ていても、夜間は足踏みをせずに寒くて立ってられない。翌年春になると、コルホーズ（国営農場）で日独共同で種まきをやらされた。先駆けをする我々に比べて、彼等は整然と一列に並んで作業をやる。弱兵を庇っているのである。

ある日慰問団の一行が訪れた。ドイツ兵を囲んで持参したパン、ビスケット類を配って

いる。やがて近くで眺めている我々に近づくと、ヤポンスキー コンニチハと頻りに握手を求める。親日的で、浜千鳥、サクラサクラ、めんこい子馬等いろいろの童謡を演奏して聞かせてくれた。アコーディオンの響きが広野に流れていく。思わぬプレゼントに我々も一緒に合唱した。涙が流れた。祖国を離れて遠く異郷万里の地で耳にする童謡に、万感胸に迫るものがあつた。この先どのような運命が待っているのか知る由も無い。ひたすら帰国を夢見て耐えた当時が、いま鮮やかに蘇ってくる。

ポロポロの戒衣を濡らす子守唄 久峰

うた日記

成 重 放 任

人生を走馬灯のように生き、六十有余年を振り返ったとき、どのような生涯、どのような生き方をと、自分ながら想いに更けるとき、追いつ追われつ、まるで走馬灯のような道を辿ってきた。

まず浮かんだことは隣のおばさんから、農協貯金の招待旅行の話を持ちかけられた談話

の中で、旅先での解放感、一女性に還つての自由などを聞かされたとき、不意に、
ホーム隣れた主婦の座に戻り、と我ながらすばらしい句が浮かんだ。
その頃は西瓜の栽培が盛んで長雨が続きと生産者は、栽培防除に苦勞の連続であつた。この味わいの中で、

長雨に耐えし西瓜の玉直す

いくときありて苦勞やわらぐ
の歌が生まれた。

年月を重ねて子供たちも良縁に恵まれ、しあわせな結婚生活の中、夫婦ともに里帰りしたとき、家族そろって小豆島を観光したことがあつた。途中、名勝の夕日ヶ丘で休憩、余りの美しい光景に誰となく「この景色を持って帰りたい」と言い出した。

風ぎ渡る水面に浮かぶ島々の

この絶景を持ち帰りたし

この歌を想い出すたび、家族の団欒、また島の美しさが目に浮かぶ。妻も、健康管理の一つとして、扇舞、民謡にと勤しみ、毎年、一年間の練習の成果の発表会を楽しみにしているようだ。年老いた母も、発表会を楽しみに待つこと頻りに、

姑が拍手を送る嫁の舞

この情景は、私の誇りとするところである。川柳や短歌のほかに若干詩吟を嗜んでいる。詩吟は、詩心を会得してないと情景や感情が表れた、他人に聞いてもらえない吟は吟じられないことから、歌を詠むうえに大変役立っている。

町制三十五周年を迎えたとき、町民から町歌が募集された。私も挑戦した。当時私の町は旧四ヶ町村による合併である。合併前の町村を思い出しながら綴ってみた。

「しろとり音頭」と題して、

ハアー（ソレ）五名ダムからあふれる水に、
跳ねる若鮎湊川、金と銀との絵巻の中に、
ボンとおさめて残したや、（ソレ）

サツサ輪になれ踊って音頭、しろとり音頭
でシャシャンとね。これが一節である。

詩の心通じ町歌の賞に榮え

縁あって私の歌が採用され、唄・金沢明子と最高の町歌となったことは、生涯忘れ得ぬ出来事だった。

町歌発表の日、金沢明子さんの生の歌声に合わせ、町民三千名の踊る姿を感慨無量で眺めたものである。

上手、下手は問題とせず生活感あふれるものを詠み続け、生涯を綴ってゆきたく思っているこの頃である。

第8回鳥取県川柳文芸大会

日時 7月10日（日）午前10時開場
場所 新日本海新聞社5階大ホール
（JR鳥取駅南口から徒歩3分）

兼題と選者「魂」池 森子選

「隙」村上佳津代選

「典」水水ミツコ選

「封」山下 蟹郎選

「スープ」石井 富子選

「とっさ」山本 鍾馗選

「さらさら」下田茂登子選

「息」蔵本 悦子選

席題なし 出句各題2句まで 出句締切11時30分
会費 当日2000円（軽食・大会誌呈）
欠席投句1000円（大会誌呈）

表彰 1句1点方式 総合成績上位10人まで呈賞
（出席者優先：同点の場合上位句のある順
午後4時頃閉会予定）

欠席投句 締切 7月5日（当日消印有効）
用紙 自由（事務局により清記）
あて先 〒680 083 鳥取市南吉方3丁目364安田方 春木圭一郎

第8回鳥取県川柳文芸大会
実行委員会事務局

主催 鳥取県川柳作家連盟

第3回 銚子発・いわし川柳誌上大会

課題 「いわし」いわしをテーマにしたもの（新作2句）
その他参加吟として自由吟も2句連記（新旧自由）全員掲載

一〇〇〇円（小為替・切手）

発表誌呈・封書で応募のこと

自由・〒住所・氏名・年齢・電話番号を明記

応募用紙 電話番号を明記

応募先 〒288-0055

千葉県銚子市陣屋町1の17

名雪凜々宛（いわしと朱書）

Tel・Fax 0479-2210518

締切り 7月末日 消印有効

賞品 特選5句（生魚など各一万円相当）

第一次選者 銚子発・いわし川柳誌上大

会実行委員会

第二次選者 銚子川柳会会長

銚子市教育長

千葉県川柳作家連盟会長

発表日 平成17年10月4日・一〇四の日

（当日記念句会あり）

主催 銚子川柳会

主催 銚子川柳会

■新刊紹介

『一句一姿』

仁部四郎自選句集

田中 正坊

愛それはいわゆる戦後民主主義
謎それはいわゆる戦後民主主義

本誌三月号のもくじ下に仁部四郎さんは、「二字の推敲」と題して、「春に出る句集に当初は前者の句を入れたが、印刷に出す段階で後者に替えた。しかし、二句並べようかと実はまだ迷っている」と書いていた。

そして、このほど刊行された『一句一姿 佐賀川柳五人自選句集』には、後者の句だけが掲載されている。十二歳の八月から体験してきた戦後民主主義が、長く高校教師として世界史と政治・経済を担当した著者にとつて今後の展開という意味では、「謎」であることを実感されたからだろう。それは、次の句からも窺うことができる。

あの頃というトンネルがある昭和

世界地図国防色で塗り分ける

世界史は神が書いているわけじゃない

さてこの句集は、地元の出版社である書肆草茫々が、これまでに詩・短歌・俳句の五人自選作品集をまとめており、今回は佐賀県における川柳界のリーダーである撫尾清明・小松多聞・酒谷愛郷・葛浦正明・仁部四郎の五人自選句集として刊行したものである。そして著者は、全句集・全柳誌から自選した百四十句と「長い字余り」と題し、これまでに唐津新聞などに発表した随筆五編と自筆年譜を収録している。

ブーツなりリーゼントなりヤングなり

一九七九（昭和五十四）年、佐賀新聞の読者文芸に入選して初めて活字となり、これをきっかけに著者が川柳の道へ進んだ思い出深い句である。

欠席が続く生徒も見てる雲

献血に行儀正しいニキビ顔

学校へらしらしさのみな頼み

万引の指も野辺では花を摘む

やはり教師としての目が詠んだ句が多い。

沖繩の海美しく嘘のよう

結婚二十周年を記念して沖繩へ家族旅行をした時の句だが、家庭生活を詠んだ作品も目

にとまる。

父と子でカレーと目玉できました

洗濯が好きです母の夏休み

元日の妻の化粧を疑わず

デパートで見て郊外へショッピング

著者はこれまでに二冊の句集を出版しており、今さらあれこれの作品を紹介するまでもないが、前記の随筆の中で、自らの作品について次のように述べている。

「一杯の水八月十五日」や「八月に世界史少し読む予定」などの社会詠は、私の川柳のいわばA面であり、B面はより日常に見聞することを材料にした生活詠とも言うべき句である。そして、教員として三十余年を過ごしたのだが、今に至るまで「大東亜戦争」と「太平洋戦争」の、「記憶」と「理解」との距離が縮まらないことがA面に固執させる結果となっているようである。

そして今、「ふつうの国」という表現の使用頻度が高くなり、九条を標的とする改憲の動きが強まりつつある時、これを指摘する句をあげて紹介を終わりたい。

九条の範囲八月ごとにすれ

九条のおかげで喜寿が並になり

御民われ二十五条を楯とする

愛染帖

波多野五楽庵選

和歌山市 木本 朱夏

プロッコリーの森からわつと春になる
花の下ひとはやさしい声になる

ジャスミンティーひとりほつちもいじやない

富田林市 池 森子

面取りをされて微笑仏になる

パレットの上で燥いでいる さくら

大の字にはなれない夢はまだ臚

尼崎市 長浜 美龍

不協和音それも人の世さくら散る

直向きになるには歳をとり過ぎた

春愁や胸の振り子が鳴り止まぬ

和歌山市 武本 碧

ジグソーパズル一つ外して生きのびる

這い出せば等身大にあく鑄型

堺市 山本 半鏡

次の世は蝶になりたい花ばたけ

父母を語れば蓮の台かな

弘前市 高橋 岳水

焼悴を己が力と思ひ込む
直ぐ金に見積る癖が治らない

弘前市 斉藤 劔

水仙も古希もラッパを吹く花野

信仰の深あいねむりこけしだなあ

弘前市 高瀬 霜石

掛け事も恋もしばらくしていいない

もう誰も笑つてくれぬハイチース

唐津市 市丸 晴翠

丁寧生きて二十四時では足りぬ

点々と私が紡ぐ生命線

尼崎市 春城武庫坊

腹割つた話に旨い酒まわる

迦陵頻伽亡母に調べを聞かせたか

自画像の朱がどんどんと褪せてくる

透明な炎になって逢いにゆく

今生にひと目あいたい札束よ

死火山になってひと目を避けている

したたかに明日への火種埋めておく

酸欠の街で孤独がすれ違ふ

れんげつんだ少女の日など夢の夢

どの人も同じ色した影法師

千一千 羊を連れて夜が白む

高知市 小川てるみ

一人ずつ崩し七人味方にし

八尾市 宮崎シマ子

虹の端つかみに行つた二輪車

其の時は其の時 桜散るように

枚方市 海老池 洋

砂文字を消したあの日の波の音

同じ石につまずいてから謳がとけ

高槻市 乙倉 武史

恋かしら淑女のふりをしたくなる

死を覚悟してから空の青いこと

逝つたひとの声も聞こえる花だより

姿見の中に女の四季がある

いい顔になった樞の中の僕

届きたい想いのペンが割れる春

再会を信じさよなら軽く言う

絶好調わたしを売りに出かけます

欲のない男であてにできません

かけらほどの春を見つけた吹き溜り

京都府 都倉 求芽

大坪 天涯

安土 理恵

澤田 千春

福士 慕情

神夏鏡典子

神夏鏡典子

神夏鏡典子

神夏鏡典子

和歌山県 三宅 保州
トランポリンだった私の浮き沈み

和歌山県 辻内 次根
ほろ酔いになると難なく越えられる

八尾市 吉村 一風
騙されて許して人の丸うなり

三田市 石原 歳子
恥かいて具になりたい私です

鳥取市 岸本 宏章
どんぐりのときはなかつた仲違い

大阪府 初山 隆盛
これきりの人だと思つた茜

八尾市 田辺 鹿太
花の下ふつと私が居なくなる

八尾市 村上ミツ子
春です ね しゃれたシナリオしゃべりだす

西宮市 牧淵富喜子
思い切る両手にむなしさだけ残る

和歌山県 中後 清史
明日を咲く花に背中を叩かれる

鳥取県 谷口 次男
胃袋も父の遺産と覚悟する

砂川市 大橋 政良
割り切れぬ形が僕の影にある

八尾市 高杉 千歩
大阪弁つなげば川柳 一何三句

尼崎市 春城 年代
水溜り昔のように跳べそう

西宮市 西口いわゑ
朝の水キラキラ今日も生かされる

生駒市 飛水ふりこ
言いつ分はあるがスマイル押し通す

横浜市 金森 徳三
上を見て下見てやはり下にする

大阪市 小谷 集一
大器晚成タイムオーバーかも知れず

出雲市 園山多賀子
林檎剥く皮の長さにある余生

交野市 田岡 九好
五里霧中 不思議と晴れる時が来る

八尾市 生嶋ますみ
これからを決めかねている靴の先

奈良市 米田 恭昌
まだ七〇のまだに未来が透けてくる

海南市 谷口 義男
松茸や蟹攻めの旅してる夢

今治市 野村 清美
寝転んで空一面に咲く桜

黒石市 相馬 一花
浮雲に別れを告げる悲しい日

唐津市 仁部 四郎
年の功ですと諺書いてみせ

唐津市 樋口 輝夫
呑み込んで良かった愚痴の残り滓

唐津市 坂本 蜂朗
栄光の過去を喋れば胸に穴

富田林市 大橋 鐘造
薄氷を踏んだ記憶のある背中

堺市 奥 時雄
聞いているふりの欠伸が目に入る

鳥取県 土橋 螢
爺さまのおしゃれ万年筆で書く

八王子市 播本 充子
アイディアをA5サイズに盛っている

三田市 北野 哲男
すばらしい顔だスタート切った瞬間

鳥取市 吉田孔美子
良い寝顔懐温いんだ きつと

弘前市 宮崎ヒサ子
時々胸の小鬼と妥協する

三田市 久保田千代
埋み火をも一度燃やす風を待ち

四條畷市 吉岡 修
何もかも解き放たれた顔で逝く

神戸市 田中 章子
手を伸ばし届く範囲の幸でいい

和歌山県 桜井 千秀
奥の手を垣間見せつつ弱音吐く

東京都 清原 悦子
寝転んでみれば些細な事はかり

熊本県 高野 宵草
人災も天災にしてあきらめる

大阪市 井丸 昌紀
かみ殺すほどわがままになる欠伸

美林市 安平十次弘道
老醜にあらず中身が薄いだけ

大和郡山田 坊農 柳弘
裏返しをされた男にあるドラマ

松江市 川本 畔
突風の男に足を抄われる

羽曳野市 森下 一知
ワイシャツの紅に巻きつく乱気流

豊中市 櫻谷 郁子
八十路来て道振りかえり振りかえり

今治市 塩路よしみ
胃袋に小骨を溜めて生きている

米子市 林 瑞枝
藤の椅子 今でもちちの影をひく

倉敷市 撰 喜子
春眠が襲う真昼の会議室

米子市 白根 ふみ
春風に凭れるものが目立ちだす

羽曳野市 吉川 寿美
B面に本音を伏せた処世術

河内長野市 坂上 淳司
古希に来て仄かに見えた人の道

西宮市 門谷たす子
折らねばずんと減る持ち時間

和歌山市 玉置 当代
虎の威を借りて天狗になっている

大阪市 板東 倫子
もつたない棄てられないとゴミを溜め

茨木市 藤井 正雄
ぬるま湯に野望が溶けてゆく暮らし

池田市 北出 北朗
私も一役買った母の皺

倉吉市 米田 幸子
待針を打ったところからほころびる

大和高田市 鍛原 千里
泣きたいが泣かせてくれる胸がない

藤井寺市 鴨谷瑠美子
少し病む人形だから抱いてやる

宇部市 平田 実男
追い風が吹かなくなった父の死後

吹田市 太田 昭
若い日の想い筆筒に閉じ込める

泉佐野市 稲葉 洋
誘蛾灯あしたに骸浮く定め

羽曳野市 洒井 一壺
シナリオになかった壁に試される

池田市 栗田 久子
食べられて鯛は成仏できますか

和歌山市 楠見 章子
お喋りもぶつきら棒もいる小庭

鳥取県 石谷美恵子
恋終りキーホルダーも変えてみる

和泉市 横山 捷也
気の重い仲裁に向く長い坂

羽曳野市 福田 悦子
友達の数だけ咲いたチューリップ

和歌山市 田中 みね
やさしゅうに小姑さまにお姑さま

和歌山市 柏原 夕胡
透明なガラス正直すぎないか

和歌山市 榎原 公子
春なのに二人は寒い無言坂

鳥取市 録沢 風花
年金も身も削られてやっと春

高槻市 富田 美義
流れては噂にからむ春の水

岸和田市 雪本 珠子
またひとつ出会いの中に種をまく

倉敷市 小野 克枝
雑用を残したままで風邪を引く

大阪市 岩崎 公誠
コンビニのコピーはいつも紙つまり

寝屋川市 坂上 高栄
ロボットが人間臭くなる怖さ

大阪府 丹後屋 肇
救急車停ってドラマ走り出す

倉敷市 井上 富子
寝められて不安の壁が崩れ落ち

弘前市 櫻庭 順風
役得にありつきすぐに辞められぬ

藤井寺市 若松 雅枝
弱点をさらけ出したら友が出来

西宮市 片山 忠
明太子なんかで妻は騙せない

八尾市 井尻 民
大根干す母の小さな背を偲ぶ

高槻市 左右田泰雄
傷つけずお断りする難しさ

藤井寺市 中島 志洋
澄んだ目で見られて嘘を引込める

鳥取市 福西 茶子
相棒と歩幅が少しずれてくる

鳥取市 田村 邦昭
立たされた廊下はダムに沈められ

藤井寺市 鈴木いさお
あちこちに老いの兆しが忍び寄る

誹風柳多留二四篇研究 79

橋本秀信・粕谷長生
伊吹和男・大野秀二
小栗清吾・山田昭夫

清 博美・佐藤 要人

623 さてよくしゃべる獵師めだと楽天 雨譚

橋本 楽天は中唐の詩人、白楽天。

白楽天は日本の智恵を計ろうと、筑紫松浦
湯にやつてきたが、和歌の神住吉明神が、漁
夫の翁となつて迎え、詩歌の問答をする。
「日本では生きとし生けるものすべて和歌を
詠む」と語り、これを追い返したという、謡
曲『白楽天』に拠つた句。獵師は漁師の誤り。
青苔衣を負ひて巖の肩に懸り、白雲帯に似
て山の腰を囲る（白楽天）
苔衣著たる巖はさもなくて衣著ぬ山の帯を
するかな（住吉明神）

獵師たと見たが楽天ひが目也 三四3
楽天ハ麦めしおやちたと思ひ 八19

日本の土ハふませぬ和哥の神 七四22

清・佐藤 賛

624 井戸はたの桜でお秋名が高し 潮水

橋本 お秋は俳号秋色。生年未詳。享保十年
四月十九日没。伝五十七歳。江戸小網町の菓
子屋大坂屋の娘。照降町の大目某（号寒玉）
の妻。夫とともに其角に入門、師の没後その
点印を継承し、追悼会を主催するなどした。
十三歳の時、上野の花見で

井戸ばたの桜あぶなし酒の酔
と詠んだという秋色桜伝説をはじめ、数々の
伝説がある。（『日本古典文学人名辞典』）

秋色桜の作者を詠んだ句。この句碑は上野
清水寺の横に現存する。

井戸ばたの桜あぶない年でもよみ 一〇九35
我としへ四字足したのが名句也 二六20
生酔が来ぬと名のない桜也 五六35

小栗 賛。しかし、何が面白いのだろう。

「桜」で「秋」が名をあげたということか。

清 賛。「桜でお秋」と季節の取り合せの違
うのが面白いと感じられたのでしょうか。

佐藤 賛。

625 御法から花ちる里で大一座 箕山

橋本 「御法」四十帖、「花散里」十一帖。
いずれも「源氏物語」五十四帖の名。

「源氏物語」の帖名を読み込んで、千住の
葬式（御法）帰りに吉原（花散里）へ繰り込
む大一座を詠んだもの。類句のように「源氏」
の帖名を詠み込んだ句は多い。

おもしろさ花ちる里へ身をつくし 三六19

は、きゞをたまし花散里へ行 四四28

御法をハ真如の月かさへて書キ 二九13

清・佐藤 賛。

626 御納戸金がよし原へ三度落チ 雨譚

橋本 納戸金は、納戸役や大家の調度、衣服
などの奥向きの費用に用いられる金。特に大

家で用人などの手元に保管されている金（「日国」とあるが、要は主人、およびその家族のために遣われるブライベートな金と解する。御とあるので、主題句は、大名家を指す。

吉原の大夫を身請けした（しようとした）、三人の大名の句。時代順にいうと、仙台伊達綱宗（三浦高尾）、姫路の榊原政岑（十代高尾）、名古屋の徳川宗春（春日野）となる。そのたび莫大な費用が吉原に支払われただろうと、うがった句。

けいせいハ三人跡ハ遊ぶ女なり 二二四
大名が三人そしてざいもくや 安九礼²
清・佐藤 賛。

627 極楽の道法りほどの句もゑらみ 丸 龍

橋本 「道法」は道のり、道程と思う。極楽は十萬億土の彼方にあるという。

その意味で、無数の句を選んだ有名な俳諧点者を詠んだ、何か故事のある句と思つて、誰を指しているか判らない。江戸座の創始者と目され、逸話も多く、川柳にもよく詠まれている其角がまず浮かぶが、決定するだけの材料はない。

と何日か前に書いて、今はと気がついた。これは初代川柳を追善した句で、宝暦七年、

寛政元年まで三十三年間、万句合を興行したことを讃えたものだ。

この二四篇の28丁以降は、寛政二年九月十三日に没した、初代川柳の一周忌（寛政三年）に、その追善のために編まれた「玉柳」である。その序に菅江（朱楽菅江）は次のように述べている。

追善 玉柳

年ころ川柳翁俳諧（諧）にふけて、としく万句合の批判に及ぶ。その聲謂ツへし獅々吼に等と。しかるをこそこの季秋諸連吼聲をおさめて世を辞す。今年季秋諸連會して、かの翁の追福のために二も、ちあまりの言の葉をあつむ。（中略）諸連獅々吼の餘波をしたひて、終に梓にいのちながうす。名つけて玉柳といふところハ。

寛政辛亥九月廿二日 菅江序す

小栗 賛。なるほど。

清 御明解。
佐藤 賛。

628 本庄のそば後に芝のかゆを喰い 雨 譚

橋本 赤穂浪士が討ち入り本懐後、泉岳寺へ引き上げる途中、芝口の仙台屋敷の門前で辻番が一行を差し止め、邸内に報告した。その

とき江戸詰奉行柴田九郎次が賞揚し、一同に粥を喫したという話に基づいた句。討ち入り前はご存じそば屋に集合した。本庄は本所を五音にするために故意に当て字したと思う。

そば切りとかゆの間かさわき 明三滿

そば腹で本望たつしかゆをくい 四〇一九

蕎麦腹の跡ハ馳走の粥を喰 七五二一

清・佐藤 賛。

629 疵ものにひと直段を其角付ケ 石 斧

橋本 其角は榎本（宝井）其角。蕉門十哲の一人で随一の高弟であったが、後師の佐びさびとは別の伊達洒落風の句に転じ、江戸座俳諧の道を開いた。機知に富んだ句は江戸人士に好まれ、人口に膾炙した句が多い。

其角の夏の月蚊を疵にして五百両（延享四年・五元集拾遺）題材にした句。

元句の意味は「春宵一刻値千金」というが、夏の月は蚊がいるので、半値の五百両だと洒落のめした。川柳・雑俳と変わらない趣向句である。

夏の月其角半ふんはめて置キ 寛元宮一

さずものを五百両迄其角つけ 天五信一

蚊が無いと其角千両迄ハつけ 二二二三
清・佐藤 賛。

尚香のむ

政岡日枝子選

合掌のどの指ほどくおほる月

散りぞめの桜わたしも軽くなる

私の根っこに母の絵が眠る

黄昏れておんなひとりの水の音

風葬がはじまりさくら散り急ぐ

浮きうきとさくらに芯がすれそうな

期することあつて並んだ列がある

人間をやめたくなつてよくねむる

これからの道を見つめて掃いている

ほめられて重い荷少し軽くする

お豆腐の白と勝負はせぬことに

人間でよかつた酒のおいしい日

海近くなると時計も速くなる

賢くくて黙つてるのではありません

大好きな人だ大事にして上げよう

素足にもそろそろ出番やつてきた

大らかな家族ねこまで二重あこ

ちよつとしたぜいたくうまい米を買う

充電をしてから歩き出すとする

富田林市 片岡智恵子

羽曳野市 徳山みつこ

富田林市 中井 アキ

西宮市 門谷たず子

藤井寺市 高田美代子

米子市 白根 ふみ

西宮市 牧瀬富喜子

米子市 中井 ゆき

米子市 野坂 なみ

神戸市 田中 章子

和歌山市 古久保和子

西宮市 西口いわゑ

米子市 林 瑞枝

豊中市 安藤寿美子

八尾市 宮崎シマ子

境港市 遠藤那珂子

和歌山市 田中 みね

八尾市 村上ミツ子

米子市 青戸 田鶴

謎ときをくり返しては前進だ

結願の心豊かに若葉風

指きりは肩のこらない人とする

死ぬという一単位だけ残してる

しようもない事で天狗にあらいやだ

もみくちやに私を洗う洗濯機

大切な人へ小さな土産買う

古稀翁寿遺言状がよく変わる

ひとり住み隣に負けぬゴミを出し

いいこともあるよと春の月が言う

春一番こころの扉とりはずす

その奥を覗いて戻れなくなつた

田に水を張つて田舎が生き返り

潔く散つて悔いない椿の緋

久々の立ち話です春が沸く

花の下みんな赦してしまおうか

散り急ぐ桜わたしに明日がある

ダンゴより花でよかつた女です

お花見の約束やぶりにそぎ逝く

昨年の花見は元氣だった人

母と見て良かつた今日は桜散る

八十路来て去年の桜と会う至福

葉桜よ私もしてる夢支度

自分史と共にこの世にあるさくら

花盛りお国の外は荒れている

米子市 澤田 千春

八尾市 井尻 民

米子市 小塩智加恵

堺市 志田 千代

香芝市 大内 朝子

和歌山市 榎原 公子

八王子市 播本 充子

和歌山市 福本 英子

八尾市 高杉 千歩

熊本市 永田 俊子

和歌山市 岩本美智子

和歌山市 居谷真理子

兵庫県 中上千代子

和歌山市 武本 碧

弘前市 宮崎ヒサ子

橿原市 安土 理恵

尼崎市 長浜 美籠

大和高田市 鍛原 千里

松江市 兼本 政子

富田林市 古田 千華

美作市 山本 玉恵

豊中市 櫻谷 郁子

海南市 堂上 泰女

和歌山県 森下 順子

寝屋川市 太田とし子

世の中に何があっても咲く桜
世間見る椅子は回転速くする
仰ぐ人仰ぐ物あり背を正す

息吸って吐いて花粉に攻められる
一つや二つ喋りたくないこともある
良妻はとつくにやめて五分と五分
回転椅子人の儂さなど思ふ

ノーと言えばドラマ違っていたはずだ
うす味のふたり暮らしに塩こしよう
諦めが往つたり来たりドア辺り
哀しみの想いのままに陽が沈む
気の毒と言つて逃げ出す他人です

傲慢な鼻を泣かせた杉花粉
同じ血を分けた同志の内輪もめ
誕生日亡母にだんだん近くなる
土筆坊年は取らぬと言つている
いつからか跳べなくなった水溜り
潮騒はきつと砂丘の子守唄
あんま機の動きに任すこれからを
悲しみの数を覚えていた食器
ミスリードされた気がする現在地
荒れ畑を道路にとられ大もうけ
しなやかな竹の囁き聞いて春
麗らかな陽射し待つてる春の服
ほのぼのと両の掌溢れる恩がある

大阪府	畑中	節子
鳥取市	西川	和子
堺市	矢倉	五月
和歌山市	楠見	章子
河内長野市	植村	喜代
鳥取市	岸本	孝子
三田市	久保田千代	
奈良県	渡辺	富子
芦屋市	黒田	能子
松江市	川本	畔
鳥取市	福田	登美
倉敷市	小野	克枝
堺市	西村りつえ	
倉吉市	米田	幸子
羽曳野市	福田	悦子
西脇市	七反田順子	
東大阪市	笠井	欣子
鳥取市	録沢	風花
堺市	山本	半銭
藤井寺市	太田扶美代	
寝屋川市	籠島	恵子
鳥取県	佐伯	やえ
和歌山市	玉置	当代
大阪市	本間満津子	
出雲市	園山多賀子	

度の合わぬめがねを笑う広辞苑
風みどりあるける幸を謳歌する
繕うた羽根で笑われながら舞う
ケイタイも井戸端会議参加する
黙りをいぶかりだしている周囲
眼がかすむパソコンのせいしたくない
淋しさに慣れ来て独り葉飯食う
人の愚痴聞くだけ聞いてすぐ忘れ
正直に生きて来たのに認知症
淋しさは病友の笑顔が瘦せてくる
言い訳に更年期とは無理がある
後味を大切に母の箸
目が覚めてかぼちゃに見えてきた男
投函の音確かめて頼みます
認知症おそれて本の拾い読み
天の句が載つた柳誌をまた開く

智恵子さんの句―生も死もすべては「み手のまん中」と寺に書いて
あったのを思い出した。自然の悠久を思わせるおぼろ月と大いなるも
のの中に生かされている倅せとを結びつけて、読む者の心を楽しくさ
せてくれる句である。みつこさんの句―桜の木に私を置いてみる独特
の見方、独特の表現法で、人生の悲哀を詠んだ作者。多少の明るさを
も含んでいて共感を呼ぶ句である。アキさんの句―五七五の中で「全
くその通り」と皆に言わしめる事の出来るのも川柳の力。母と同じよ
うに何事にも耐える力が私の根にも隠されていると作者は詠んでい
る。うまい句作りであると思う。たず子さんの句―句の取り合わせは
新しくないが、実感そのものから生まれた句であらう。説明的でなく
水の音に、春独特の明るい印象をあたえる素直な句に仕上がっている。

今治市	塩路よしみ
大阪市	津守 柳伸
倉吉市	山中 康子
交野市	山川日出子
松江市	安食 友子
兵庫県	黒崎美紗子
八尾市	中島 春江
西子市	黒田 茂代
大阪市	板東 倫子
鳥取県	石谷美恵子
尼崎市	小池 幸子
八尾市	田中トシエ
和歌山市	柏原 夕胡
寝屋川市	坂上 高栄
鳥取市	奥谷 彩子
鳥取市	永原 昌鼓

嬉しさは結婚式を終えるまで

卒業も入学もあり孫の春

成人式この娘も嫁ぐことになる

結婚式二度とないよう派手にする

式典へ肩張る雑魚で疲れる

方程式親孝行に要りません

式次第を見て抜け出しを考える

式辞まだ続く眠たくなつてくる

幸せの罪はみんな手動式

式終えてやっと素顔になれました

地味婚で良い一生を添い遂げる

生きていく方程式はたんとある

式辞ではとにかくほめることにする

葬式の服はいつでも吊っている

生きていることに卒業式はない

佳

以下同文形式だけの表彰状

めしと汗今朝もわが家の出初式

明日からは他人にかえる式がない

入学式ぴっかぴっか包まれる

先生の恩は歌わずいざさらば

人

鯨鯨は儀式のようにさばかれる

地

入社式みんな駿馬に見えてくる

天

さくら満開代読が続く式

軸

私の一式つつむ旅仕度

理恵

倫子

妻子

たもつ

雄々

典子

シマ子

善信

美義

夕胡

あやめ

みつこ

圭一郎

田鶴

保州

浜丘

藤朗

弥生

ヒサ子

(志)千代

勝巳

岳水

播本充子

たつぷり

初山 隆盛選



人間をたつぷり盛っている柳誌

振り出しに戻れたたつぷりある時間

百歳にまだたつぷりとある時間

たつぷりの汗目標は甲子園

たつぷりと平和につかり平和ボケ

ひまだけはたつぷりあって金がない

たつぷりの母乳幸せそうな音

たつぷりと食べて頭を空にする

たつぷりと母に甘える里帰り

農機具にたつぷり油注す日和

球根にたつぷり聞かす春の夢

日曜の朝はたつぷりジャムを塗る

たつぷりとおしゃべり続く小半日

たつぷりの雨をもらって野はみどり

たつぷりの湧き湯につかる仏顔

たつぷりとわたしを浸すしまい風呂

たつぷりはないが年金ありがたい

人間が好きでたつぷりもまれてる

ライバルが自信たつぷり手を伸べる

たつぷりとのんでたつぷり悔いている

いい話たつぷり聞いて休む耳

慕情

美紗子

勝巳

猿杓

宗明

修

(花)順子

千枝子

一知

照彦

かずみ

(園)正和

たつぷり子

(佃)節子

こずえ

タカ子

たつぷり

正剣

一壺

弥生

時雄

理恵

たつぷりと流した汗が実を結ぶ

たつぷりの自信が浴びる紙つぶて

自画像へ嘘をたつぷり塗っておく

たつぷりのうまい話に裏がある

欲たつぷり人間臭くなつてくる

たつぷりと貯めて極楽釜うつつもり

夕焼けをたつぷり吸つた木守柿

たつぷりと浴びた夕日へ祈る明日

たつぷりの墨に心を遊ばせる

たつぷりとあつた絵の具が枯れてくる

たつぷりと水をもらって枯れている

たつぷりと土の匂いのする土産

たつぷりと言葉のお札なら言える

友だちに会つてたつぷり夢もらう

ぬるま湯にたつぷりつかる三代目

佳

おばあちゃんたつぷり生きた知恵がある

満ち溢れ不足の言葉忘れてる

たつぷりと喜びくれた花吹雪

目も耳も足もたつぷり好奇心

たつぷりと十指使つてする会話

人

明日散る花にたつぷり水をやる

地

たつぷりの青空がある故郷があり

天

生きようと決めたたつぷり泣いた後

軸

たつぷりの湖面いやしの風が立つ

志洋

碧

かおり

夕胡

千里

北朗

一風

典子

あずき

久仁雄

朝子

和重

圭一郎

正雄

あずま

(南)正和

とし子

(矢)五月

伊津志

充子

天涯

初歩教室

題一 サイズ

三宅 保州

推せん句の鑑賞

この教室では、毎回「今月の推せん句」を、二、三句程度選んでいます。毎月、一百句を越える集句の中の二、三句ですから、競争率は約百倍の厳選になり、初歩教室といえどもどこへ出しても恥ずかしくない、誌友の皆さんの佳句揃いに感嘆しています。

皆さんが初歩教室という同じ舞台にチャレンジした中の推せん句で、批評とも併せてじっくりと鑑賞してみてください。

私の選句の基準は、作者の思いや訴えなどがあつて作者が主役である句、そこまでよりそこから詠んだ句、発想・表現・リズムともに優れている句、好きな句や作りすぎた句よりも良い句を選ぶことを心掛けています。

皆さんも推せん句を鑑賞されて、なるほど良い句だと思われたり、こんな句がなぜ推せん句なのだと批判されたりすることが、あな

たの川柳眼、選句眼の向上に役立つものです。

【添削・批評句】

過去の疵自国のサイズで行けぬ道 道子
サイズで詠むのは無理があるテーマでは。

原 孫の靴サイズ合うのではありません きぬ子
添 ビッターで孫のお下がりで履いてます

原 うちの家族靴のサイズは皆同じ 順子
添 遺伝とや顔もサイズも皆同じ

原 玄関に大きい靴が乱れとぶ 喜子
添 玄関に泥棒よけのでかい靴

原 成長期靴のサイズがすぐ変わる 那珂子
添 子のお下がりには私がいち早く成長期

原 お洒落してサイズの合わぬ靴に泣く 洋子
添 お洒落してみてもサイズの合わぬ靴

原 婿殿が来たらしでかい靴がある 美紗子
添 婿殿のでっかい靴が頼もしい

原 帽子までゆつたりとする髪量 章司
添 歳とともに帽子までもがぶかぶかに

原 MからL L Lへと育つ妻 好文
添 SからM スリ Lへと育つ妻

原 タンスからセンスどうあれ着れる服 みね代
添 もう着られるサイズの服がないタンス

原 口込みでサイズ外れの夜市立つ 俊子
添 口コミでサイズ外れも売るフリマ

原 サイズ合う親子なままで着て歩きタカ子
添 取り替えて着てるサイズの合う親子

原 Lサイズ買って毎度と礼言われ 益子
添 スリ L買うので顔を覚えられ

原 プレゼントいたくならはLサイズ 信子
添 スリ Lと言えはよかったプレゼント

原 形見の品頂くサイズ合わぬとも 像山
添 どの服もサイズの合わぬ形見分け

原 ワンサイズ大きい筈がびつたりと 萌
添 大きいと思つた服が小さすぎ

原 かたくなにMにこだわる試着室 好
添 着れもせぬMにこだわる試着室

原 瞳に止まる服のサイズが腹さめる 雅代
添 気に入った服のサイズが気に入らぬ

原 お気に入りの服のサイズがそっぽ向く 子
添 お気に入りの服のサイズが文句言う

原 大好きな服のサイズが横向かれ 徑子
添 大好きな服のサイズに横向かれ

原 大きい目の服を着ている三才児 正和
添 大きい目のお下がりでよい成長期

原 大きめのサイズで並ぶ新人生 宇乃子
添 ぶかぶかの服で新人生並ぶ

原 ひやかしへサイズびつたり出れぬ店 はじむ
添 ひやかしのサイズびつたり買う羽目に

原 大らかに生きて寸胴にストリートに。 幸
食べるだけ食べて寸胴にストリートに。

原 難しいサイズ探して足は膨 開子
添 身に合ったサイズ探して足は棒

原 淑やかに歩いて隣りたたらふみ 千華
「サイズ」の句とは言えないのでは。

原 育ちゆく孫はママよりDカップ 冷子
添 もうママをはるかに越したDカップ

原 ぶりぶり太るサイズをしに替え 美恵子
下五は説明調。ぶりぶりの擬態語が良い。

原 食べ過ぎてサイズがランクアップする ござえ
添 食べ過ぎて体重計も悲鳴上げ

原 定年後服に合わせる身のサイズ 孔一
添 服のサイズに身体合わせる定年後

原 シンデレラサイズお見事玉の輿 映子
シンデレラと玉の輿が重複します。

原 大中小サイズ合わせるテクニク 信雄
添 少々サイズの違いなら合わせ

原 現代子足が長すぎ力出す 雅明
添 現代子身体ほどには力なし

原 重労働サイズ太目不足無し 利子
添 肥満体力仕事にもを言い

原 肥えた私肥えた同輩サイズ聞く ミヨノ
添 肥えた者同士でサイズ探り合い

原 大足のサイズ今では普通です 智加恵
添 歳とともに足も小さくなりまし

原 夕方のバーゲン物菜あさつて 水昇
「サイズ」の句とは言えないのでは。

原 オニギリのサイズいろいろ作ります 綾乃

添 おにぎりも大中小の三世代
原 玉子・芋サイズ選べる自由有り 光枝

添 安売りの玉子やっぱりSだった
原 逃げられた魚のサイズ五割増し いさお

添 逃げられた魚はだんだんでかくなる
原 目が点に大きいタイヤのゼロの数弘子

添 サイズより私に合わせぬゼロの数
原 新聞にお詫び活字のミニサイズ 北朗

添 読めぬほど小さく載せる謝罪記事
原 年齢とサイズ聞かれて怒り出す 稔

添 年齢とサイズは聞いて下さるな
原 現状維持結婚式が終わるまで 典子

添 結婚までは何が何でもMサイズ
原 デジタル化心のサイズ測りたがり たたよし

添 デジタル化してもサイズは変わらない
原 別注の家がいろいろな子の育ち 千代子

添 別注の家要りそうな子の育ち
原 最初からサイズ違うに共白髪 清

添 でこぼこのコンビだけれど共白髪
原 太ったか結婚指輪抜けやせぬ 真一

添 結婚指輪抜けなくなったのは内緒
原 少し工夫すれば佳くなる句

添 案の定去年のサイズ遥か越え 秋星
原 案の定去年のサイズ着られない

添 ひとまわり小さく成った母の背な
原 ひとまわり小さく成った母の背な

原 飛行機代サイズハンデにしてほしい のり子
添 小柄でも飛行機代は同じです

原 ビーナスのスリーサイズが理想的 英旺
原 カタログに僕のサイズは載ってない 武

原 店員がサイズ小さめ聞いてくる かずみ
原 引越して郷のサイズに合わせてる 孝明

原 七号の服が入荷と呼びとめる 政子
原 伸び縮みサイズ合わせる嫁姑 昇

原 身の丈の儂さ見つつ骨拾う 藤朗
原 デザインとサイズ合っても値が合わぬ 満子

【佳句】
だぶだぶのお下がり今日も着て元気 イセ
せめてM着られるまでは汗をかき 起世子

Mサイズびつたり似合い春うらら 忠子
腰回りが合わなくなるサイズ 准一

ウエストが渋い顔するア・ラ・モード つよし
【今月の推せん句】

買ってきた家具がうちには大きすぎ 長島亜希子

家の狭さを忘れていたという穿ち。

肩凝りで悩んでいますFカップ 柏原 夕胡
肩凝りという悩みが読者にはおかしい。

身長は一センチだけ高く言う 奥 時雄
一センチという微妙さが動かない軽味。

【私の句】

口の中に拳骨入るおとうさん

秀句鑑賞

同人吟 春 城 武庫坊

— 5月号から

還暦を越えてから職を退き、余暇を頭の退化を防止するために、手引書を頼りに川柳を始めました。

終戦翌年、中支より復員し紀州の山中で炭鉱に十年勤務中、俳句を教えて貰って句を作っておりましたが、大阪本社に転勤して作句は中止しました。川柳も十七文字の文学だからと簡単に考えて飛び込みましたが、本と句を読むたびその奥と幅が広いことに気がきました。

心をゆさぶる句がなかなか出来ないまま八十路の坂を登るようになりました。このたび秀句鑑賞の依頼を受け、能力不足かと考えましたが、一生一度のことであり、川柳塔社に対する役目を果すべく筆をとることに致しました。

千九百五十六句と対面致しました。

さて入選句はどう決めるか？三月号で田中正坊様が述べられたように、選句は個人の経験した過去の経歴の中より生れた感性により異なりますので、私の感性に触れた句を選ばせて頂きました。作者の皆さんの意に添わな

い点があればご寛容お願い申し上げます。

心配を貰いまだまだ惚けられず

太田 昭

心配ごとを聞かされてその援助をしなくてはならない。然し自身は老いの坂を登り、脳のはたらきがぶくなってきたが、心配事に対処するためには惚け防止に努力せねばならない。日常の生活を正しくすることを重点に、生きる努力を決心する覚悟がよくわかります。

自身に叱咤激励。

道教え曲がり角まで見届ける

松尾 柳右子

道を尋ねられると口で説明するかメモに簡単に書いただけなのに、教えた曲がり角まで出向いて教えるやさしいその心遣いがうれしい。

神の声聞きたい耳が遠くなる

江原 秀夫

今まで神の恵みを聞いて無事幸せに過ごしてきたが、老いの坂にかかりもつと聞きたい耳が不自由になり、恵みの言葉が聞かれなくなった。

不安が増してくる老いの道を進む難しさは同感です。理知的判断で堅実なる行動を。

椅子席の本堂寺も洒落てきた

有沢 せつ子

お寺詣りして本堂に上ると畳敷き、正座してお経を聞いているが足がもたない。法話を聞いても身につかずお焼香に行く時もまともに歩けない。こんな経験をしてきたが最近、私が行く山寺で椅子が並べてあつて大助かりしました。下五が的確。

ありがとう言ええ言うほど幸せに

土橋 房枝

ありがとう、とお礼をいう時は恵まれた行為、行動、物を受けた時である。その恵まれた有形無形の行為を受けることは幸せである。

その幸せを受ければ、自分が相手にそのように、なるようにすれば幸せな世界が生れる。心からありがとうといえるときは、心も温かく幸せな気分になり、それに気がつくことが大切だと思う。幸せな世界を作ろうよ。

いらっしやい威勢の良さも味のうち

安達 忠央

食堂や料理店に入る時、景気よく元気な声で出迎えられると気持がよい。これが口の中でぐずついた声で無愛想に案内されると、食欲にも影響する。これに目をつけて作られたこの句、下五の「味のうち」と表現された言

葉が素晴らしい。

階段の下り気になる歳になる

森村美花

阪急武庫之荘駅で地下道へ通る私のうしろ姿を見られたのかと一瞬ハツとなった。左側の下りる階段に第一歩を踏み出す時、横の手摺りをしっかりと握り第一歩を確かめる。

横に急ぐ人が進んでも、マイペースで下りる。過去に二、三度階段を駆け落ちた人を見たことがあるので、手摺り握って足を運ぶ、これが歳のせいかと思うことがよく表現されている。

待春やぼっくり寺へ長寿バス

長谷川春蘭

年寄りの気持をずばりと表現された、ご長命の作者の巧みに感服致しました。

時候のよい時に苦しむこともなく、生を終えれば自分も周囲もよい、とポツクリ寺へ参る気分が十分に満ちています。

白いもの降って来ましたお大事に

安藤寿美子

雪が降り出した、寒さを一層感じる、風邪の心配、あまり関西では降らないが、道に積もれば歩行困難になる。

雪国の人のように、雪になれていないだけに雪が降ると困ることが多いと思います。降る雪を見て「お大事に」との下五に深いお心遣いを感じます。

頑固親父がモデルになった紙おむつ

米田恭昌

世相の变りを巧く表わしている。おむつといえは赤ン坊であるが、現在は老人もおむつを使用する、それに頑固おやじを配置したのが新鮮味があつて面白い。

月曜日いちばん軽い靴を履く

高瀬霜石

週があければ颯爽と出勤する。前週からの問題が色々残つていても、それを処理する心構えを持つて職場に乗り込めば解決するだろう。軽快な足取りで元気に出勤しよう。

命あるかぎりはない夢を追う

井尻民

自分の希望に向かつて努力し、日々励むことは人生の実のあることで、それが軽いものであつたとしても、努力しながら生きるということは立派な人生である。

五人囃子が一人足りない古い囃

板東倫子

毎年囃を飾るが今、五人囃子は四人しかない古い古い人形である。新しく買い替えず、古い四人のお囃子を毎年飾つて大事に仕舞うのは、この四人のお囃子が何かこの家まつわの歴史を秘めているのであろう。その思い出を大事にするため、毎年四人でお囃子するのでしょう。

人間に生まれてよかったなと思う

正畑半覚

生かされている一番の有り難さ

玉置当代

人間として、生きていることの喜びを率直に表現した2句に素晴らしい思いがしました。

神社より露店が目当て天神さん

生田義一

これは京都の北野神社のことである。菅原道真公の命日(二月二十五日)に基き、毎月二十五日に縁日が開かれ参拝する人が多い。

広い境内に食料品、衣料、履物、道具類、骨董品の店が品種別に店が並び、沢山の人がそのブロックに流れる。その情景が、中七にうまく表現されている。私も小中学生の頃、親父にお祖母ちゃんの荷持ちについて行けといわれ祖母と一緒によくお詣りに行った。本殿にお祈りしたあと、祖母はあれこれと品を買ひ、担いで帰つたことを覚えてる。北野神社の緑日の光景がうまく表現されている。

ステーキをやこうかしらと病みぬける

木村貴代子

発病中は食欲もなく、何を食べてもまずく、食が進まなかつたのに、ふと好きなステーキの香を思い出し、食欲が湧き出た。これで体も恢復した嬉しさがうまく表現されている。

水煙抄

秀句鑑賞

—5月号から

板東倫子

支えあう糸が家族の色を出す

花岡順子

家長を中心に同じ家に住み支え合う家族。父の色系に家族夫々の色系が和合する至福。

いつからか素顔さらして生きている

両川無限

一歩外へ出れば七人の敵を意識して本心を見せなかった男も何時しか平気で素顔をさらしている。丸くなったのか弱くなったのか。

生きるとは片道切符だけの旅

野口忠

長い長い人生の旅はどこまで続きどこで終るのだろう。引き返す事もやり直す事もない旅。片道切符を握りしめ今日も歩き続ける。

もう一度恋してみたい春キャベツ

撰 喜子

転がせば弾むような春キャベツをサクサク刻みバリバリ噛む。青春の恋よ。もう一度。

別腹を告発しだす皮下脂肪

青井はつえ

三食昼寝夜生活のたたり、と諦めていた膨大な皮下脂肪の原因は私の別腹でした。嗚呼。若く見られて訂正しないまだおんな

吉田喜代子

お世辞でも嘘でも若いネと言われたら訂正するどころか上機嫌。私六十歳まだ女です。ふと見るといつて来るのは妻ひとり

伏見雅明

若い頃は自信满满。友人知人に囲まれ賑やかな生活だった。人生も充実期に入りふと見ればいつて来るのは妻ひとり。いとおしい。

家計簿の都合は聞かぬ慶弔費

三宅満子

年金暮しだろうとおつき合いは大切。お祝い事はこちら嬉しいが御香料はいや。悲しい事は少ない方がよい。(懐工合もあるし)

悔いの無い人生でし建前は

金森徳三

「豊かで楽しく後悔のない人生だった。」と胸張って言う人。本当かな？建前かもネ。

竹光で妄想叩き切っている

辻内次根

誇大妄想、被害妄想もろもろの雑念が妄想を生む。気にせず一気に竹光で叩き切ろう。

朝掘りと言う筈の土も買い

阪本藤朗

春の味覚朝掘りの筈を売りに来た。木の芽和えに焼筍など夕餉の膳が楽しみだけれど湿った土までたっぷり買わされた。商魂見事。

何となく来て何か買う植木市

渡邊伊津志

散歩のついでにふらりと植木市へ寄る。片すみの苗木や花の一鉢を求めて帰る事もあ。小さな庭が華やき荒んだ世相を和らげる。

貯えは未練残らぬほどがよい

百田幸

巨万の富を残したためのお家争動。莫大な遺産相続の裁判沙汰。あさましい話を聞くにつけても我々スツカラカンは呑気なものです。この世に未練が残る貯えは害を残します。

ハッピーエンド家に明かりが点いている

杉浦えむ

ここ数日来気になってた隣家のこと。家人の気配もなく夜も暗いまま。つい良からぬ事も考えた。アツ窓に明りが点った。ヤレヤレ。

何と無くひらがなにする春の文

高木道子

春つらら。友を誘ってお花見でもとピンクの便箋にひらがなの手紙を書いた。さくら。はるかぜ。とてもやさしい心になりました。



蓮の台もおしどりで

松川芳子さんを偲ぶ

都 倉 求 芽

松川杜的さんが亡くなられてからの芳子さんは落ち込みも激しく、誰の目にも元気のなさを感じられた。何処の句会にも夫婦で出席されて、そのおしどりぶりを誰も口にした。

無理もないが元氣を出してもらうため、要らぬことも言ってみた。「何処の奥さんもご主人がなくなると若返られるのに……」

京都塔の会がお家の二階で発足した当時は、まだ芳子さんは川柳には遠かったが、句会場が代つてから出席されてみるみるうちに上達。そして本社や他の句会でもしばしば天位をとられるようになった。

杜的さんの遺句集「いのち」に芳子さんもお相伴されて、その中にいかにも京都の奥さまでという句がいくつか見られる。

近所には目立たぬように出る夫婦 芳子
ひっそりと暮らして噂の種になる 〃
人形の生命を入れる細い筆 〃

しかし、この句集に載っていないが私に忘れられない句がある。

男の子はあかんあかと立ち話

一人息子さんの典正くんは小学生の頃から職場の吟行句会に杜的さんと一緒に参加され、8歳ノリマサと可愛い声で呼ばれていた。

芳子さんは常々、他処の女の子が羨ましいところばされていた。その典正氏から4月半ば一枚の封書が届いた。

突然ですが母芳子は昨年11月4日その生涯を終えました。79歳でした。股関節を痛め思うように歩けなくなり……8月中旬介護施設

に……一人で歩行器を使い歩けるまでに回復……その矢先突然呼吸状態が悪くなり、たった一日の入院で逝ってしまい……奇しくも仲の良かった父と同じ11月に父を迎えに……温暖な湘南

の自宅近くに母の住まいを見つけた矢先……2月には百か日も済まし……

一読して眼が熱くなり心がしめつけられた。「体の不調と足が動かないので脱会させて頂きます」とお手紙が届いたのは、昨年9月中頃で全文を句報に載せて皆様で紹介した。実のところ、ただ足がお悪いだけだと思つて投句だけでもとお返事し、句報もこの4月まで送っていたが既に11月に亡くなつておられたとは……。ただ茫然とするばかり。

お一人になられてからも私は何もしてさしあげられなかつたけれど、ただ正坊さんたちとご一緒に、ヨーロッパやニュージーランドへ旅行されたのが、せめてもの想い出だったのではと思う。

芳子さんの母上がよく「あの子は小さい時から体が弱くて……」と仰つておられていたが、母上もご主人もおくつてからの旅立ちだから心残りはなかつたと思う。

吟行のこと、合同句集「千社札」発刊のこと、杜的さん一周忌記念句会、三十周年句会、そして何より杜的さんが肺気腫になって、酸素ボンベを提げて句会へこられるのにお世話されていたこと……。鮮やかな走馬灯に今もつて亡くなられたとは信じ難いが、ただただ心からご冥福をお祈りするばかりです。

おしどりへやさしく開く蓮の白 求 芽

(合点筆)



西谷大吾さんを悼む

相馬 一花

三月二十三日の朝、東奥日報朝刊を見て西谷大吾さんの訃を知り、愕然となったも一度見直しました。

三月二十二日、午前九時四十三分永眠、行年七十四歳でした。

ここ一年半ぐらい例会に欠席していたので、地元の名士であり公私ともに多忙なため、思っておりませんでした。もしかして体調がよくないのではないかと昨年の十一月頃に電話をしたところ、病気ではないとの元氣そうな声でしたが、なんとなく不安でした。

大吾さんは黒石市、尾上町、平賀町の小学校で教鞭をとり、浪岡町野沢小学校の教頭を経て尾上町猿賀小学校長として退職されました。

川柳を始めたのは平成七年からで、最初に川柳塔みちのく同人となり、平成八年川柳塔同人、平成十年青森県川柳社（ねぶた）同人、

平成十年黒石川柳社同人となり、素晴らしい発想と凄じい情熱で川柳活動を続けてこられました。

とても気さくで偉ぶることもなく、いつも例会を盛りあげていたので柳人仲間の憧れでした。

平成十二年には百句集『北の系譜』を出版され、内容の素晴らしさに感動しました。

青森県川柳社の最高の賞である平成十三年度不浪人賞は次の句で受賞されています。

人間の顔になるまで石を彫る

また、平成十三年度賞も受賞されたので、このダブル受賞にわれわれ柳人は拍手喝采で祝福しました。

大吾さんを知ったのは平成七年からですが個人的にも大変お世話になりました。

大吾さんはベテランドライバーで時々遠距離の家族旅行を楽しんでいたようですが、交

通が不便な会場の川柳大会では私も便乗させていただきました。

川柳塔みちのく例会終了後の食事会には最後まで楽しく付き合う大吾さんでした。とても残念です。

次に『川柳塔みちのく』誌のみちのく抄（平成八年〜平成十五年）から作品をご紹介します。と思います。

屋根裏の詩人も腹が減るらしい
夢を吊る梯子は妻と子が支え

納豆をぐるぐる捏ねて過去を消す
水平線に辿り着くまで舟を漕ぐ
地吹雪に津軽すっぽり神隠し

どうしても抜けない父の錆びた釘
輝いてこの世に見えぬ星もある
生き様がどうであらうと陽が昇る

義理ばかり重ねて橋を渡れない
病む母が呟いている手毬唄

『北の系譜』の最後の一句ご紹介致します。

外は雪こけしがそつと眼を隠る

白鳥が浄土へ還る春彼岸

合掌

一花



中田あい子さん さようなら

小糸 昭子

あい子さん、あい子さん、どうして逝ってしまったのですか。あなたの嬉しそうな笑顔、真面目そうな真剣な目などさまざま表情が思い出されます。

旦那様と可愛いお嬢様を早く亡くして、一人で乗り越えて来られたと聞き、立派なお方だと感心していました。私と仲よくして下さいたのは同時期に柳友となったからですね。実際の姉のように何時もにこにこして「あなたとおしゃべりが楽しいから来る」などと上手いこと言っておいて先へ逝くなんて、ちょっとずるいんじゃないですか。

固いかなと思うような時事吟をよく作られて「あなたの選では通った事がないんよ」と叱られましたね。寝込まれるまで中風さんやはじめさんと、タクシーで城北川柳へ来ておられました。句会では耳が遠いので前に座っておられました。清水谷高女出の才媛で、

人々のお世話をよくされ、墨字が滅法上手くお手紙を頂くと恐縮してしまいう位でした。

城北の柳友は結束が固く、回生病院へ一度目の入院の折は私も時々お見舞にあがったものです。そして退院後ケアハウスへ行かれたとの事。その時もごはんは美味しいし、お風呂も入れてもらえるし、楽しい所だと言っておられました。それを聞きあいさんはその場その時に楽しいことを見出せるのだと感心しました。

今はもう天国で旦那様とお嬢様と三人で、きつと幸せな家庭を築いておられるでしょう。そこは大声で笑い合い、話し合い気遣いのない世界でしょう。あいさんはこれで一番幸せになられたのだと思う事にして自分なぐさめています。

あいさんの句

亡き夫のありせばベアで着たいシャツ

つまりいた石けりかえすハイヒール
あいづちのよさにつられて本音まで
花の声よく聞こえる造園師

おしくらもかごめ知らぬ塾通い
耳からの葉を無駄にすなと母

くされ縁切れずにきたと老夫婦
ルールとはいわぬルールが潤滑油
忙中閑このほんやりは至福です

うっかりとこぼした本音で四面楚歌
深刻な不況に福祉の二字かすむ
満ちて引く天の摂理を守る波

考えてみると四月二十日のお葬式なんてとても良い日に逝かれました。寒くも暑くも無し、お参りの方々に御迷惑にもならず、あい子さんらしい気配りだと思います。あの世で「あんな事もこんな事もあった」と、色々な話を満開の桜が花びらを散らすよう一杯話をされているでしょう。

今年は暑くなったり寒くなったり、奇妙な天候でした。いつものように桜の時期は短かったけれど、私もこんな時期にお迎えが来て欲しいです。ぱつと咲いてぱつと散る桜のように花びらと共に逝ったあい子さん。本当にうらやましく思います。四月十八日没

法名「釈尼妙連」

合掌

栞忌 本社 五月句会

五月十日(火) 午後五時半
アウイーナ大 阪

絶好の行楽日和の下、109名の参加を得て、五月句会開催。まず四月二十四日死去された橘高薫風名譽主幹と城北川柳会の中田あい子さん、京都塔の会、松川芳子さんへ一分間の黙祷を捧げる。

初出席は高槻市の富田美義氏と、高槻市の川上真木夫氏、池田市の上嶋幸雀さんの三氏。お話は理事長の板尾岳人氏。

病床の名譽主幹にお会いした時のお話の後には平成七年に他界した西尾栞先生の思い出でひどく叱られた事、栞先生の名句を交え、汲めども尽きぬ思い出の一部を熱く語った。可愛がってもらった幸せを噛みしめながら、栞先生へ極楽で仲よく暮らしてほしいと結んだ。栞先生から山男の岳人氏へ贈られた句。

「山男山の画集に汗落とす 栞 (扶美代記) 月間賞は富田林市の藤田泰子さんに輝く。(司会)朝子・玄也 (記名)真理子・恵子 (受付)義・寿美 (清記)富美子

席題「和」

志田 千代選

酸素ボンベ外し温和な師のお顔
和顔愛語栞先生の声がする
里帰りして和やかな風に逢う
故里の味がとろりと和三益
平和だな六甲おろしやつている
来年も食べるので決めて木の芽和え
木の芽和えついでにまぜる愛と愚痴
円卓に花一輪の和を添えて
飛行船見上げて和やかな親子
和ダンスに嫁入り衣裳詰めたまま
妻だつて捨てたものではない和服
和室なしみんな洋間で子等の家
ひんやりと茶室の畳敷くさし
持ち寄りして食べると和む女の輪
老夫婦相和している物忘れ
和を保つ狐と狸化かしあい
和を保つために親から折れてゆく
姑が来ると夫婦の和がぐらり
アスマスクやつと柔和な顔になる
和のためにいつも黙れと言われている
他人から見れば和気あいあいに見え
勇気だすごめんさいでする和解
他愛ない嘘で和んだ夫婦仲
和解するつもり黙つて手を握る
めざし焼く背伸びをしない平和な日
地図掀げ顔よせている金婚日
連休はみんな平和な顔になる

たもつ 柳伸 萬的 律子 弘洋 蕉風 更紗 朱夏 柳弘 美代子 ばつは 恵子 正坊 千里 シマ子 和夫 弘一 ダン吉 朝子 幸雀 玄也 ますみ 哲男 尚士

ぬるま湯の和みばかりで惚けてる
和訳してますます解らなくなつた
核を持ちながら平和を唱えてる
和の中でだんだん瘦せていく個性
和洋折衷何でもこいのフライパン
佳
和解したらしいなデュエットはずんでる
和の額も情独で見てる薄埃
和の中で孤独の風に堪えている
赤ちゃんを抱いて心を和らげる
和やかさ小便小僧ありがとう
人
人の和を考え過ぎて小さく居る
地
隣国にわかつてほしい和の心
天
軽やかにステツプ和やかにシニア
軸
白けないようにピエロを演じてる
兼題「母」 寺川 弘一選
思春期の娘は母の眼を恐れ
母こえる女性に会つたことがない
同じように息子がおかん言うている
運転手の母の苦悩をふと思つ
虐待に母の神話がかくずれたる
濡れ衣を黙つて干してくれた母
呑めぬ母梅酒今年も漬けている
母さんのヘソクリ父の危機救う
能子 真理子 夕胡 美籠 俣子 かりん 月子 更紗 俣子 ばつは 典子 深雪 茜

一歩 (久)千代 保月 菜月 光久

学歴のない母からの人の道

母さんが好き困らせてばかりいる

世話を焼く母を避け出す十五歳

母さんに言うておいたで事がすみ

せがむから連れて来たのに母を恋い

母の過去女同士になつて聞く

雑用の無い日の母が淋しそう

鏡台に亡母の口紅まだ一つ

氣イつけや卒寿の母に見送られ

母として百点妻としてさあて

風呂上が母を女と見てしまう

胎動へ母と初めて書く日記

孝行のつもり施設へ母を訪う

亡き母とよく似た人に席譲る

マザコンでよろし母とは慕うもの

かあさんが笑つてるから子も笑う

晩年の母そっくりになつてきた

母からの手紙は全部とつてある

母の日もお仏壇にもカーネーション

母さんへぶつさらばうにカーネーション

百歳の母が手にするカーネーション

母の日の自分旁う一人膳

ひとりで育つた子だと母は言い

佳

母さんのメモのとおりに生きてみる

母に似た爪の形を見て飽かず

子を持たぬ娘がくれた赤い花

母の日も母はやつぱり仕舞い風呂

幸雀

能子

玄也

五月

春蘭

はじめ

美代子

章久

哲男

美代子

あや子

はじめ

ますみ

倫子

五月

賢子

尚士

求芽

月子

千恵子

西彦

則彦

恭昌

文

扶美代

みつ子

真理子

倫子

母だから泣けないだから踏ん張れた

そばに居てあげよう母の日だ今日は

多くの名を忘れた母も母は母

まだ札を言つてないのに母が近く

まだお袋が生きてる友に嫉妬する

兼題「洗う」

川端 一步選

洗えば洗うほど久留米餅の美しさ

洗つたら消えるぐらゐの行き違ひ

まっ白く洗いわたくし色にする

真つ白に洗つて地球汚す水

悲しみを洗い流そう若葉風

新緑にこころ洗われ身が軽い

神さまが見ていなくても手を洗う

丸丸と育つ児洗う嬉しい手

つまみ洗いを教えた孫によるこぼれ

しつとりと女を洗うぬか袋

可も不可もない一日の口漱ぐ

汚れたら洗つてくれる人という

ワイシャツの紅を洗っているしこり

洗つても落ちない罪をたんと持つ

魂を丸洗にする滝の音

洗脳の姿になつている座禪

五臓六腑酒で洗つてほなさいなら

責任のある顔だから良く洗う

西

瑠美子

幸雀

富美子

満津子

あやめ

いわゑ

幸雀

寿子

瑠美子

たもつ

愛論

冬葉

朝子

美籠

ますみ

とし子

シマ子

叔子

太郎

天笑

民

無洗米お米に失礼だと思ふ

ひた向きな汗だ綺麗に洗つとこ

覚悟した首だきれいに洗つとこ

心洗う言葉を探す今朝の記事

ありがとうの五文字で心洗われる

花遍路命を洗う風になる

洗つても洗つても消えない嫉妬

洗いざらい喋つて腹が減つてくる

歳月を洗い清めているおんな

アリバイを洗うと妻に凄まれる

カーテンを洗つて青空近くする

洗脳の怖さを思う自爆テロ

図書館でマンネリズムを洗つてる

清貧を食べて一人の箸洗う

佳

父親の望郷を聞く耳洗う

決心は顔を洗つてからにする

見栄を盛る皿だきれいに洗わねば

ルノアールの背中流してこ円満

ポランテア地球を洗う井戸を掘る

百人の犠牲の上で膳洗う

居るのです古布のおしめを使う人

地

白旗を何度も洗い生き延びる

天和

昭和史に洗い流せぬ血の匂い

軸

芋の子を洗う時代のよき文化

和夫

欣子

千里

みつ子

ダン吉

富美子

夕胡

玄也

俣子

尚士

西

富美子

美義

瑠美子

千枝子

千里

耕治

求芽

蕉子

深雪

楓楽

保州

人

自分色で生きたくなくて切った縁

深雪

咳阿など切らぬ女で山動く

地

哲男

切り取り線の向こうは自由な風が吹く

天

義

軸

切れ過ぎぬように包丁研いでいる

兼題「良心」

河内 天笑蓮

良心とスローライフを考える

アキ

見て見ない振りに良心とがめられ

昭子

悪ぶってみても良心こぼれてる

西 紀

口止めの料理が胸につかえてる

朋月

陰口を言ったところが寒くなる

夕胡

天秤にかけて良心もてあそぶ

朱夏

良心のくもりを払うお念仏

満州

人は善北朝鮮は別として

恭昌

ポツポツの良心どこへ捨てたのか

淳司

大惨事尻目二次会三次会

賢子

事故起きてから良心が目覚ます

富美子

良心はあっても救助行かなんだ

きよし

良心に問えとひとこと投げられる

ダン吉

良心のささやきを聞く夢の中

みつ子

良心に忠実おもしろない男

楓 楽

良心をうまく騙して生きている

たもつ

良心に縛られて生き泥臭い

公誠

良心をモットーにして店潰れ

瑠美子

この不況良心さえも置き忘れ

ひさ乃

良心を眠らせやんちゃしたくなる

いわゑ

大金を拾い良心ゆれている

昭子

良心をゆさぶってくる札の束

恭昌

血を売っても良心だけは売らぬ

たもつ

良心で食えるかいなとバカにされ

愛論

良心にペールをかけて逢いに行く

みつ子

ひとてまをかけたケーキ屋よくはやり

篤子

分別ゴミちゃんとやっている心

恵子

そんな出たら目良心が泣きますよ

春蘭

良心の呵責にたえて空を見る

れんげ

決断へ良心少し邪魔になる

千里

老兵の良心疼く記念館

正坊

良心できつと心に居るはどけ

朝子

耐えきれずお地藏さんに自首をする

(志) 千代

良心を信じてますと釘をさす

(久) 千代

あたりまえを良心的と褒められる

真理子

響くまで良心の戸をノックする

昭

どん底で良心捨てず生きてます

舞夢

良心に任すだなんて困ります

恵子

傷だらけの心抱いて生きている

泰子

良心が擦り切れそうな街に住み

軸

第十回全日本川柳誌上大会

(太字は本社同人)

平成柳多留賞

栃木 大崎 克明

八つめの色を探しにシヤボン王

川柳大賞

岡山 木下 草風

年金という一本の薬がある

NHK会長賞

青森 宮沢 邦子

働いた手に年金がふわり乗る

日本青少年育成協会会長賞

熊本 大田黒尚之

ルネサンス瞳は凜と天を衝く

全日本川柳協会会長賞

兵庫 奥田みつ子

愛は愛あなたのペットにはなれぬ

全日本川柳誌上大会賞

兵庫 山口 光久

まだ生きる力欲しくて辞書を引く

感嘆符だけでローマを見てまわる

茨城 福士 哲夫

幸せなペット家族と童話書く

東京 近江あきら

救援の毛布にペットもぐり込む

兵庫 勝本せいこ

トースター苦境をボンと離脱する

青森 田鎖 晴天

川柳 作品募集要項

～実りゆたかに 出会い ふれあい～

一、応募受付期間 平成十七年四月一日(金)～六月三十日(木) (当日消印有効)

二、応募規定

(1) 作品 一人各題二句詠 (未発表作品に限る)

(2) 応募料 一人につき一、〇〇〇円 (但し、海外投稿者及び小・中・高校生は無料とします)。

(3) 応募方法 福井県実行委員会作成の「作品募集要項」をご覧ください、所定の応募用紙を使用してご応募ください。

(4) 応募先 〒919-0592 福井県坂井郡坂井町下新庄一― 第20回国民文化祭坂井町実行委員会事務局へ郵送

三、宿題・選者 (事前投句) 高校生・一般の部

握手〓墨崎 洋介 (福井) メガネ〓小松原爽介 (兵庫) 着る〓永石 珠子 (長崎) 温泉〓大木俊秀 (神奈川)

(事前投句) 小・中学生の部

握手〓熊谷 岳朗 (岩手) メガネ〓川路 泰山 (静岡) 恐竜〓井原みつ子 (愛媛)

たくまし〓齋藤 大雄 (北海道) 恐竜〓菅原孝之助 (新潟) 電気〓梶川雄次郎 (大阪)

第二次選者

今川乱魚 (千葉) 大野風柳 (新潟) 河内天笑 (大阪) 西来みわ (東京) 森中恵美子 (大阪)

四、賞 (予定) 文部科学大臣奨励賞・国民文化祭実行委員会会長賞・福井県知事賞・第20回国民文化祭福井県実行委員会会長賞
福井県教育委員会賞・坂井町長賞・第20回国民文化祭坂井町実行委員会会長賞・坂井町教育委員会賞・(社)全日本川柳協

会会長賞・福井県川柳作家連盟会長賞

五、発表会場 川柳大会 (当日投句受付、入選発表、選評、表彰式)

平成十七年十月二十九日(土) 10時30分～15時40分 (予定) 坂井中学校体育館

合同大会 (上位賞表彰、記念講演会)

平成十七年十月三十日(日) 10時～12時 敦賀市民文化センター

入選作品は、「作品集」として発刊し、応募された方 (小・中・高校生は入賞者) に無料配布します。

六、問い合わせ先と募集要項の依頼先

〒919-0592 福井県坂井郡坂井町下新庄一― 第20回国民文化祭坂井町実行委員会事務局宛

TEL 〇七七六―六七七五〇七 FAX 〇七七六―六六一四八三七

七、主催者 文化庁・福井県・福井県教育委員会・坂井町・坂井町教育委員会・(社)全日本川柳協会・福井県川柳作家連盟

第20回国民文化祭福井県実行委員会・第20回国民文化祭坂井町実行委員会

老也海壇

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

うぶみ川柳会

小谷美ツ千報

うっかりで済まぬ豆腐に鬆が立つた
幸せをシニア夢見る理想郷
寒さには勝てぬと咳が駄々捏ねる
湯豆腐で冷めた夫婦を温める
換気扇咳の音をも外に出す
早起きの豆腐屋がいた隣組
住み慣れて豆腐ちくわも美味になり
止めとけと開口一番父の咳
きっぱりと断る凄い咳ばらい
中年になって時々鳥になる
寒の水いっぱい飲んでる豆腐
歳月や豆腐もいつか手のひらに
わたくしを濾過する雪のフィルター
わたしより歳上だけど手がかる
湯豆腐を食べて畑の凍土とく

翠洋会 (前月分) 谷口

子を産みて妻母になり母になり
少子化に可愛いロボットが生まれ

芳江 黙光 かつみ かくにお 天雀 天人 雄人 あづま 美ツ千 螢 ひろこ 完司 宣子 重忠 義報 蕉子 さと美

会長にまつり上げられうむ言えず
産むたびに嫁がだんだん強くなる
写真見てウムと考えるこんだ医者
スクラムを組むと大きな声をうむ
父さんの背中は無を言わせない
春の音雪解けの道ランドセル
少子化日本溢れるニートフリーター
株知らぬ私でさえもホリエモン
皇室も嬢天下になる予感
花粉症マスク美人が干渉する
ライブドア花より先にサクラサク
饒鋒の金燦々と地球博
道頓堀にミナミ見下ろすえっさん
一生を楷書で通し出世せず
土壇場で軽いジョークが出るゆとり
心配を貰いまだまだ惚けられず
待ち針の痛さが解る母の愛
仲直りできたきっかけ鉛ひとつ
枯れた木の中に残っていた生木
悲しいが笑っていいよあばら骨
約束は守ろうタンポポが咲いた
うす味の恋が長生きする秘訣
ペランダに春だ春だとチューリップ

ローズ川柳会 山崎 君子報
何処にでもある景色だが古里は
本棚に語彙の貧しさ笑う声
棚ボタのように歌舞伎の券貰う
棚の上で昨日の私眠らせる

春 希久子 捷也 日の出 志華子 舞夢 恭昌 会美 尚士 富子 桃花 叡一 良一 千梢 石舟 昭 満作 照子 正坊 蛙 義 理恵 みつき 藍 哲子

ネクタイが正座している入社式
生きる意味棚上げにしてまず食べる
星屋見つめしつかり歩く僕の足
食器棚亡夫の湯呑みが腰据える
哀しい時いつも見つめる星がある
度忘れの品が棚から笑ってる
沈丁花亡父とはなしがよく弾む
かくれんぼの好きな眼鏡は棚にいた
同期会棚田の見える温い宿

川柳藤井寺

高田美代子報

夜遊びをやつと卒業もう米寿
ハイハイを卒業しました次アンヨ
少年期卒業できぬままに古希
どちら様卒業式のお母さん
蛍の光卒業式の絵がもどる
これからは卒業のないわが余生
何になろうかな人間卒業後
卒業はいつしたのかと考える
コピーしてコピーして卒業出来た
校門の外で待ってた不況風
卒業式済んで自転車光らせる
人間を卒業仙人でくらす
耳赤く染めてうなずく話
似合うかなまだ着れるかな赤い服
元々は赤の他人が共白髪
赤赤と燃えた残り火抱いて冬
温もりは母の笑顔とお赤飯
行間を埋める優しい赤いペン

トミエ 貴代子 まさお 美籠 いわゑ 武庫坊 年代 義子 君子 志洋 ヨシ枝 淳司 光男 悦子 井竿 一筒 静子 瑠美子 進 みつこ 美子 史郎 清子 いさお 惠勇 喜代子 龍一

赤紙で地獄のぞいてきた命

いつの日か夕日の赤と沈まなか

信じ合う二人に赤い血が流れ

回れ右したら一人も居なかった

回れ右してうしろの敵を確かめる

父のひくレール後ろに夢がない

後ろ盾あって大きな口を利く

後ろからそっと目隠してウフフ

パソコンの後ろが過熱するメール

若い若い殻が後ろについている

枯れかけた花のうしろにある炎

後ろからいつも見ている父と母

川柳塔みぞくち

小西 雄々報

赤ばかり仏もすきな彼岸花

三拍子そろって花見文句ない

花の野で平和見つめるアドバールン

夢かなう合格祈願さくら咲く

ナイーブな心に花はよく似合う

種袋きれいな花にまどわされ

そっと夢抱いて春陽を待つ花芽

桃の花三寒四温たえて咲く

四季の花持ち味あって癒される

花びらを一つ浮かせて一人飲む

いさぎよく散れと言われた桜花

川柳塔おっぱこ吟社

木村あきら報

正論が義理という字に動かされ

律義さを忘れぬ母の返し針

重人

美代子

鐘造

桂子

葉

絹歌

かつみ

六点

耕策

栄一

扶美代

政男

智恵子

信雄

鈴枝

公美枝

和代

久子

豊枝

弘子

静江

正光

雄々

迷信と思うが結局神頼み

細くとも頼り切ってる腕がある

正直に生きた証の白い髪

石頭お面スレてる酒の席

ユラユラと漕ぎ手待つてる亡父の舟

空しきは愚痴を言うほどなおつもの

長生きは出来たが絶えぬ苦勞性

賞味期限切れた女はやかましい

古時計刻む一秒長そうだ

三猿で暮らせば家は平和です

ままならず心に秘める片思い

再就職の差し出す新帽子

また笑うグランドゴルフのシニア族

東大阪市川柳同好会

森下

愛論報

人は人自分は自分楽天家

楽天家の妻で明日の米が無い

忠告が耳抜けてゆく楽天家

国会にロボットたんと座つてる

ロボットが心を持つと怖からう

その内にロボット支配する地球

ロボットにされた男の影がない

冷水を一口飲んで覚悟する

継母の冷たい仕打ちに耐える冬

写経の手冷たい過去をあたためる

脳天にきゅんと走つたかき氷

歩くしか仕方なかった父の地図

東京へ行くのに地図を買いました

中近東の地図に詳しくなる時世

(故)吟笑

よしみ

いさむ

かおり

初恵

八重子

文仙

あきら

放任

治延

輝夫

寿々女

貞月

弥生

美弥子

信治

敏子

秀夫

太一

愛論

和子

克己

哲矢

雅文

とみを

太郎

三重子

佳句地十選 (5月号から)

近藤 佳子

枯れた絵を元氣に見せる鏡もつ

意地の悪い人はだいたい長生きだ

九条の改悪世界へ恥晒す

犬の耳ボクを愛してくれている

塩胡椒振りしたい男増えてきた

横を向く蟹も前進出来ない

定年後鶴居のように見える妻

さくらさくら優しくなれる花の下

親はなれ子離れ無教えてる

豆まけは鬼もいっしょに拾つてる

災害の凄さを語る山の肌

何となく肌合いそうもない美人

まかせとき胸を叩いたあねこ肌

二の腕の白さと和服の酌にむせ

竹原川柳会

時広 一路報

椿取少年のボクが立っていた

寒椿ポトリ温みの土に生き

坪庭の椿亡夫の顔になる

わらべ唄一輪二輪と椿咲く

ホロホロリ亡母に詫びてる雪椿

亡母の忌や想い出巡る雪椿

一輪の椿が語る青春譜

握手しだけ好きになれませんが

如來さま悔いの根つこが取れませんが

雄々

完司

東吉

蘭幸

楓菜

恭昌

石舟

治代

雅女

アヤ子

美子

良子

あや子

一志

蘭幸

寿枝

栄恵

規代

敬子

汎美

笑夫

節子

笑子

房子

登校前叱った悔いが喉にある
振り向けば悔いがだんだん深くなる
悔いさをバネに勝ちとる技もある
悔いのない人生くれたのは妻だ
悔いの坂いくつも越えて向かう駅
百までは悔いすることないやり直す
仔犬とブランコ春がもう来たよ
のんびりと春を見つめる散歩する
花粉症マスクの顔が春の顔
佳句に憧れ作者に逢って見たくなる
憧れのかぐや姫からチョココレット
憧れにジャンプジャンプの若い春
憧れの生き方地蔵尊に学ぶ
卓球もゴルフもアイちゃんしか見えぬ
花に憧れ釈迦に憧れ花祭り
憧れの花のとなり咲いてみる
憧れはあこがれかすみ草悔いず

高槻川柳サークル卯の花 瀧本きよし報

輝恵 正宏 半覚 厚子 節生 比呂子 千枝 史子 慶子 幸子 淑子 静風 不朽 千代美 一路 泰雄 美義 稲子 秀夫 重人 とし子 あやめ 祐作 武史 比ろ志

奥歯だけ俺の歯痒さ知っている
塩加減控え目にするこれも愛
血腥い事件ひとふり塩加減
指で丸してから母の味が出る
レシビより母が注ぎ足す塩加減
かあちゃんの自慢はおにぎり塩加減
年だからと妻が譲らぬ塩加減
片意地を張ってしんどい影法師
長生きもしんどおまつせお釈迦さん
しんどいが明日は我が身とボランティア
手を貸せとしんどい話持つてくる
キヤリアが違ふと老いのやせ我慢
予言者のようばあちゃんの人見る目
駄々っ子を納得させるキヤリアの差
歯痒いをだまっておれぬお母ちゃん
禁酒したら妻が心配してくれた
夢すべて叶えばこの世つまらない
赤ちゃんを抱いて菩薩の顔になり
たわいない会話でぬくめ合う夫婦
点滴に命の雫ぶら下がる

川柳塔唐津

仁部

四郎報

昭 庸 倩美 美籠 治三郎 萬的 活恵 石舟 佳一 求芽 典子 照子 宵草 宏章 尚士 高栄 晴翠 勝視 正剣 蜂朗 水笑 虹汀

模倣店に出ると生徒が生きかえり
ラーメンで最後を締める梯子酒
故郷は二度と戻れぬダムの底
わかあゆ川柳会 松本はるみ報
この足で歩きつづけた喜寿の刻
足からの発信今日も元気です
にこにこアダムとイブの散歩道
ストレスを捨ててに私の好きな丘
群集になると注意が届かない
うっかりと注意も出来ぬ恐ろしさ
立ち話足の疲れはなさそうだ
九十年よくぞ支えた足の裏
落ちてなお野心渦巻く寒椿
言うよりも先ず働けと教えられ
甘えるときみせて冷たくときはなす
母さんのパワーに負けてしょぼくれる
嬰兒は甘え泣きして乳房呼ぶ
だんだんと消えるパワーに背が丸い
素っ面をマスクで隠し急な用
残り香が甘えた時の母の膝
血糖値気にしながらのぜんざい屋
来客にあわててマスク掛けて出る
空いた膝猫が甘える春の宵
甘えるのうまい女の片えくば
年金が老人パワーに力添え
甘えるな甘えなさいと母の膝

長柳会

村上

直樹報

四郎 輝夫 高明 聖子 恵美子 好栄 伸子 はるみ かつ子 博利 清泉 直樹 佐久治 もこ ひろし 武男 よしお 芳野 マサ 明信 明史 明子 けい子 正一 敬二

一つかみの塩をまぶして立ち直る
見栄まぶし無理もしてます老いの日々
乱高下するのは株価だけでない
杉花粉さくらの花をねたんでる
主役ではないがキムチのトウガラシ
輪廻転生あれよあれよと花吹雪
花が散る程度風あれよ打ち明ける
閑中の閑茶筌にあぶく薄みどり
佇めば遠い昨日になって
汽車の窓愛の字書いて彼は発ち
満開の花の下には魔女がいる

尼崎いくしま川柳会 春城武庫坊報

ばら開く一途な愛を溢れさせ
坪庭の景色でいいと病める老母
びわ湖畔桜の頃にまた来よう
結論は狙ったの外にある
マスク忘れた時を狙って花粉降る
ロボットが人間不用にする不安
中吉と出たおみくじへ運だめし
来るはずのない便りに三度
沈丁花好んだ祖母にお供えする
戴いたくき煮をそれぞれ家の味
清流で心を洗う手を洗う
人生の重荷を落とす息を吐く
神さまを見つめる花が天を向く
炊き上げた釘煮の匂いココア飲む
冬の雨香典袋買いに出る
土筆出る地震マップの赤い部分

たず子 良恵 房子 松煙 哲男 美籠 求芽 比ろ志 富喜子 春蘭 いわゑ

山茶花の身も世もあらず崩れたり
むらくも川柳会 毛利

猫柳川辺にひっそり誰を待つ
新緑をまるかじりして深呼吸
陽春に萌える新緑手ぐり寄せ
新緑の山にこだまの樂しそ
新緑の萌える若さに男見る
新緑の美に誘われた旅心
新緑の頃に貴女とゴールデン
新緑に光る大きな幟旗
我が家には太陽二つ共存し
画用紙に真つ赤な太陽あふれさず
八十路坂何を急ぐか落ち着かず
漬物石母の歴史の愛がある
師の感謝生きる姿に学ぶこと
全員の顔が揃うた定例会
我が目には見えねど上る血圧計
にこにこで暮して血圧ほめられる
病院の検査どきどき待っている

芳子 幸報 ます美 幸 定子 明朗 惠美子 信夫 養良 美保 秀子 喜美 ふさえ 昭子 安男 美恵子 英男 博一 春蘭 千梢 芳香 章久 冬葉

川柳塔なら 坊巖 柳弘報

人とはよい距離で生きている
ここだけの話それから点火する
それからは知らぬ間に油断すな
人間をさらえば生きていられない
価値観の違う人には苦勞する
人間ほどアホで間抜けて賢くて
人間をやめたい人と肩を組む

青いバラきつと神秘的な花言葉
それからが思い出せない二日酔い
それからのことは語らぬ落椿
それからの辛さを母は語らない
それからの行方は絵馬にかいてない
お彼岸に引こ無沙汰詫びる墓の花
人問も引いてる面倒な漢字
人間が好きでやっぱり疲れる
下心あつて面倒よくみてる
定年であつて妻の掌で和む
老いるつて辛い事だ歯が疼く
二月堂の春人間揺り起こす
善悪のはざ人間間臭い風
つまずいた時人間の右ひだり
公園の椅子で人間しています
無人駅それから華になる詩人
人間がブンブン匂うローカル線
面倒な手作業続く三輪うめん
人間の度胸を試している港
それからの毬は花野を弾まない
花言葉いっぱい花屋さんの朝
面倒な話も金が丸くする
人間よりになげんを知る盲導犬

まつお 眞理子 富子 理恵 孝子 弘風 洋子 ダン吉 一風 道子 朝子 美千子 信子 弥生 秋雄 笛生 茂雄 國治 隆盛 卓 惠美子 螢報 永子 喜与志 はお 八重

うららかにお茶はんやりと飲んでおり
 麗らかで猫からもう大あくび
 麗らかな春は足腰調子よい
 そろそろと恋の噂もうららかに
 敬老会うらら麗らの顔になり
 さくら咲きうらら旅に出たくなり
 うららかを泳いで今日の影法師
 麗らかな虹明日は亡父に逢いにゆく
 ふる里が丸ごと弾むまつり笛
 ばらばらの家族まとめる掘り炬燵
 相撲界個性豊かに塩を撒く
 リハビリの足も躍るよ祭り笛
 練習の笛の音意によく聞こえ
 縁側でうらうら啜る茶の旨さ
 銀行の椅子に正しく掛けて待つ
 魂を遊ばせた主に椅子は鳴く
 うららかで今日の幸せ二重丸
 麗らかな陽が車椅子押しが
 野も山も麗らかじつとしておれぬ
 定退の寝坊を救し春うらら
 うららかに老いる写経と川柳と
 麗らかな一日だったありがたう
 麗らかな風満願が近くなる
 麗らかでひれ伏すことを忘れそう
 終焉よかくありたいと麗らかに
 大きな声でうららかなになることは

かおる 実満 久枝 汲香 節子 房子 富久江 彩子 くに子 幸枝 弘子 みさ子 武子 茶子 はるお 孔美子 菊乃 公子 睦子 諷人 和子 かつ乃 盛桜 きみ子 宣子 螢

クリアしてラストダンスという老後
 一つづつクリア重ねて長い道
 義理のため渡る危ない橋もある
 あの橋があつて町名変らない
 何事も石橋叩いて無事に済み
 父と子の心を結ぶ橋がある
 目に見えぬ橋を夫婦で渡つて
 天国の橋架かつたかお母さん
 負け犬の姿で渡る村の橋
 若い僧無の形して美しい
 新年度若い生命が萌えさがる
 外出に二の足踏んだ若つくり
 若いうちが華だよ祖国を後にする
 青年の主張を聞いて耳洗う
 若者の挑戦まつすく見つめたい
 若さだけで跳びこえて来た川だろ
 品のある愛嬌に湧く知性
 誰にでもニコニコ愛嬌要注意
 誤字脱字も愛嬌になるラブレター
 生き甲斐は愛嬌だった老ビエロ
 愛嬌もほどほどにして逃げ帰る
 音痴でも身振り手振りのご愛嬌
 愛嬌が良過ぎて頼りなく見える

和友 求芽 巨詩 信哉 久留美 庸佑 満子 益子 萬的 典子 高栄 克治 吉之助 啓子 輝美 葉子 欣之 きよし 福子 百合子 英子 宏子 則彦

川柳ささやま 遠山 可住報
 日曜のない職場です乳搾る
 一粒の種は小鳥の贈物
 ちくはぐな種も思い出鉦をつく
 省りみて凡夫凡婦にあつた知恵

美紗子 美智子 多美子 開子 かほる つや子 八重子 富子 富美 哲男 可住

仁緑

京都塔の会 都倉 求芽報

岸和田川柳会 原 さよ子報

木簡の書風でわかる人間味

木簡が遠い昔を語り継ぎ

木簡に古代の人の字の温み

木管に残るやさしい恋の文字

木簡に古きロマンの匂い嗅ぐ

木簡の文字は筆筆だと思ふ

木簡の奉の一字に思ふ汗

木簡の下手な文字見て和まされ

学説が木簡出土に揺らいでる

木簡にうつつを抜かし離婚する

極楽へ逝ける名案模索中

美味しいね接待されて時価の寿司

名案と誉めてはおれぬ詐欺手口

木簡に僕の給与が丸裸

ほたる川柳同好会

水野

黒兎報

9の数字が並ぶ重たい背番号

紙吹雪今年も見たい虎ファン

子どもより親の笑顔の入学日

のんびりと泳いでみたい養殖魚

知りつくし笑顔で許す父恋し

終幕は紙のおむつにしたくない

新人類パネルを睨み思考する

ゆるやかなテンポで動く春の午後

諸語はみんな包んでいる笑顔

連休ののんびり癖が遅刻させ

大器かも知れぬのんびり屋の息子

一両を駅の桜と待っている

のんびりと風にまかせて雲にのる

珠子

ふみよ

房枝

幸子

岩夫

陸馬

蛙城

甚一

東吉

清

ゆい

和美

洋

呂万

万博に並びに行くという苦行
愚老賢者八十路の坂に横並び

尼崎尾浜川柳会

山田 耕治報

思いっきり泣けとも言つて津軽三味

連休も休まず動く古時計

人の行く裏もやっぱり混んでいる

簡単に鳥は巢立つが子はニート

遺言状ふかぶかと押す女印

人生のドラマ始まるくのに駅

いつだってあんたのそばにいる私

案じた子大きく育ち明日巢立つ

うらないあなたが好きでついて行く

巢立つまで親子のきずな九十九折れ

中二階裏切り者が梯子番

また父は好きな豆腐を買いにゆく

眼裏にいつでも会える母がいる

子離れの決意成人式の朝

疑問符をいつも抱いてるスリガラス

巢立ちする四月の空は花曇り

停年後本番ですと胸を張り

若づくりしても丸い背隠せない

落ち椿世の決め事と知りながら

手さぐりの愛がとき時ショートする

かわはら川柳会

上田 俊路報

軽くした会釈のあとで浮かばぬ名

軽い気でした約束が重くなる

人生を軽く叩けば出るほこり

黒兎

勝

晴美

五月

朋月

きよし

里江

勝巳

カズ子

よし子

信子

亀与子

昭三

孝一

比ろ志

耕治

正治

鹿太

ミサ子

江美

求美

求芽

美籠

登生

好道

寿子

朽ちた葉をせっせと集め土肥やす
きらめきを終えた枯葉が地に還る

若葉萌え野菜畑が呼んでいる

老若が枝葉となりて国策え

剪定が終り夕映え残る空

川柳塔きやらぼく

福代 天雀報

発表会マツケンサンバ踊る児等

旅立ちの鶴を舞わせる雲の峰

勝利宣言戦いぬいた老城主

これからに開き直つてゴールまで

わくわくと花芽草の芽出会の目

庭の雪みんな融けて早や春だ

究極はお茶漬になるケルメの日

春来ればこぶしの花が待ち遠し

持たぬ株に日毎ひやひやして暮らす

万象の芽吹きお大山へ掌を合わせ

亡き母と川柳欄を競つてる

一葉は財布にながく住みつかぬ

人間がマネーに支配されていく

捻子を巻く時計この家と同年

夢ひとつつ私ひとりにあるリズム

時々私をいやす童うた

チャレンジのころは前へ進むだけ

肩書きがすつかりとれて軽くなる

雪に耐え椿雷の力瘤

進むほど近づいてくる深い森

さわやかな笑いへ人の輪が出来る

太陽の四季を信じて四季の花

かず恵

泰良

余史子

雅子

俊路

天雀報

寿々子

瑞枝

千代

春枝

恵子

雪江

ふみ

章江

亜弥

やえ

那珂子

ゆき

蘭

すみえ

てい子

玲子

初枝

千春

晶子

なみ

日枝子

富美子

もつ余生タクトは要らぬマイペース
大根の花にさそわれ路地歩く

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

雲低く揖保の川辺に桜散る

羅漢さん椿さくらに頬染めて

桜につつじ菜の花わたし真つ盛り

花びらを踏めば悲鳴聞こえそう

散り急ぐ無情の花に酌み交わす

桜花五百羅漢も見とれてる

トネルの入口にトネル後三つ

童謡のみちうぐいすも唱和する

亡き父母を重ね合わせて羅漢見る

さくらさくらあなた一番美しい

山染める春の女神はカリスマだ

城北川柳会

言岡

辛酸をたらふく嘗めて今の幸

プロポーズはとあからむ四月馬鹿

朝飯の段取りをして妻起す

爽やかな感動皇女のお嫁入り

惨敗に悔むビールの涙割り

場所取りに段取り狂う花嵐

一日中たのしい嘘をまっていた

喜ばせてあれは四月馬鹿だとさ

鏡みて私まだまだ四月馬鹿

孫は子のもので我が子は嫁のもの

悔しさの涙も交じる一気飲み

さからったその一言に残る悔い

紫泉 田鶴

弘直

加津子

能子

欣史子

民

フシエ

マツエ

シマ子

潤子

香住

あずき

修報

志華子

朝子

弘風

倫子

喜美子

静枝

修

達子

とし子

あやめ

史風

はじめ

七人の敵にも負けぬ妻に負け
段取りが上手で動かないお尻
段取りがうまい男で隙がない

段取りの悪い男にある温み

たらふくの自慢に耳が狂い出す

甘い水たらふく飲んだ自尊心

回る寿司隣の皿を超えている

ひもじさにたらふく食べたパンの耳

父母の愛たらふく受けた一人っ子

ベッカムもヨン様ももう旬がすぎ

罪の数生きているうちに消してゆく

運のある証拠今まで生きている

賛成の渦に呑まれた少数派

老眼鏡すらしひと言口はさむ

重ね着を桜だよりに剥がされる

もう五分布団の中で春を抱く

竹島は大人の国の領土なり

何ごとも想定内という自信

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

誕生のしるしは桐の箱の中

齢一つ數も頂く誕生日

誕生日こなくてよいの私には

結婚も誕生もない独身よ

タイのアラ年金枠で祝つて出る

裏話ほとぼり覚めた頃に出る

裏からも透かしています諭吉さん

裏表知ってるだけに手が出せぬ

春蘭 ひさ乃

集一

利昭

典子

千里

千歩

正

ルイ子

昭子

求芽

重人

順三

萬的

和夫

美智子

桂作

たもつ

光男

りつえ

静子

真一

惠勇

昭平

耕策

みつこ

庸佑

裏表知る微笑みにあるゆとり
採み消しの裏でくすぶる不発弾
葬式の花輪数える悪い癖

僕の葬式ひばりの歌をかけてくれ

百歳の祭り気分のお葬式

音楽葬ベートーヴェンが好きでした

葬式がすんで欲の目光り出す

悪友へ涙の甲辞読まされる

思い出も未来の夢も入れてやる

風葬や花のうてなの行方など

霊柩車ほんまに息はしていないか

ピアノで弾く夢一杯の孫娘

招かれて下手なピアノを聞かされる

落ち込んだわたしのために弾くピアノ

鍵盤を強くたたいて泣き終わる

鍵盤へ憂さを晴らしたフォルテシモ

ピアノまで持ってきたのにもう別れ

暗黙のラインを守る嫁姑

目標のラインへあえぐ棒グラフ

古希だつて腰のラインに見とれます

川柳塔みちのく

小寺 花峯報

タイ記録一步の重さ噛みしめる

古傷へ気安く触れてくる他人

ぴかぴかの扉は拒否の形する

赤い糸纏れもつれて夫婦仲

星の子にっつないで欲しい糸電話

美しい糸を産み出す繭の意地

母の星案するようにいついてくる

吐来 一知

猓杏

章司

フジ

悦子

ヨシ枝

かつみ

アヤ子

美代子

六 points

たけし

志洋

扶美代

遠野

いさお

重人

一壺

泰子

敏

洋子

きよし

ヒサ子

愁女

ふさゑ

雅城

花匠

孫が寝て私もやつと昼寝する 見 清

倉吉川柳会 竹信 照彦

だんごよりまず一杯といきたいね (西)喜美子

世のしくみ握手する側される側 勝 誉

飛龍園でんやわんやの吟行会 (前)喜美子

そここに明治ののいい飛龍園 萩 江

花見酒あれば桜はなくていい 泰 輔

おっぱいのような形の城山だ 石花菜

海賊がまもなく城にはいあがる 賀寿恵

株券を武器に城盗るホリエモン 鬼 一

他人ばかりの城で何やら胸騒ぎ きみ子

脱ぎ捨てて天下御免の城がある 節 子

亡父を偲んで亡母を偲んで建つ古城 美ツ千

城跡に土筆坊が顔を出す 蜚 修

テーブルが一つあるだけ僕の城 康 子

携帯に負けた手帳の私語を聞く 十三男

わが友は手帳補聴器辞書トリオ 陸 子

春が来て手帳とペンがよく遊ぶ スケジュール手帳を埋めるほどもなく 龍 枝

弱音など吐いてなるかと古稀の坂 風 露

背を曲げた人を吐き出す終列車 和 枝

ため息を吐きつつ書いた決算書 重 忠

もう一寸待ってと桜咲く準備 照 彦

川柳塔まつえ吟社 三島 崧丘報

運命の出会い大事に温める 知恵子

一億の中のあなたに会っている 茂 美

花に会う今日の自由は俺のもの 義 良

会えばまた同じ話が口に出る 政 子

会いたいと思う心の血が騒ぐ 長 吉

どう向きを変えても嫌な女に会う 喜美子

跳べる日もあろう明日の風を読む 多賀子

期待だけ大きくなって噂飛び 多恵子

期待して胸の鼓動が早くなる 多 喜

期待うす遠くで政治からまわり 幸 子

故里に期待されてる蜚貝 すみこ

下積みは石は期待を裏切らぬ 浜 丘

上向いて歩けばいつしか空に溶け 邦 代

歩くのもゆつくりになる花のみち 薀 蘭

春一番歩きつかれた足の裏 たけし

曲がり角母が歩いた影もあり 玲 子

猫のように歩く病院の廊下 畔

歩くたび足は音符になっていく 房 子

記念樹もすくすく春の陽におどる 雪 代

すくすくと伸びよと竹も立ててやる 静 恵

すくすくと育ち巣立ちの時反抗期 きみえ

すくすくと育つて帰れ鮭の稚魚 注 湖

弱音など吐いてなるかと古稀の坂 芳 山

背を曲げた人の中に情があり ちえこ

愛情を注ぐと答ちゃんとする 昌 枝

情けない話は嫌い赤い靴 治 代

都市砂漠情け無用の風が吹く 昭 二

節くれたこの手が知っている情け 桂 子

聞かされて情にはもろい老眼鏡 叮 紅

サークル標榜 吉田あずき報

閻魔さんにごっそり撫でてもらう傷 楓 楽

向う脛さずは一手に引き受ける 房 子

そのままにしてはおけないかすり傷 扶美代

それぞれのリズムで今を生きている 美 籠

傷あとをやさしく撫でる春の風 みつ子

アクセルを幾ら踏んでも出ぬ馬力 光 久

シンデレラ少し靴ずれしています 義 子

入学式はやライバルを親見つけ あずき

秒針にさからえないと悟るなり いわゑ

失つて初めて分かる価値がある 正 坊

魔女裁判むかし教会いまプレス 棲 世

脳みそが空まわりする春の宵 節 子

かさぶたが癒えてもきずは治らない たもつ

いい事もあった指輪のひとり言 千 代

二等兵傷あと自慢する平和 遠 野

ノーメイクはあちゃん役がよく似合う 希久子

川柳塔おとり 鈴木 一弘報

近所だがまだ馬の背を越えてない 真 一

ヒゲ面も緑と楽しい風おくる 清 子

たんぼばにどこから来たと話しかけ
大砂丘自然の中で深呼吸
しあわせなふれあい明日の夢を見た
夢少し混ぜた話が楽しいな
楽しみに乱舞している名こり雪
黄色なら足をとどめて思案する
ほんやりと霞む黄砂も春の彩
哀しみはみんな埋めたくなる砂丘
潮騒はきつと砂丘の子守唄
はるばると二ーハオ黄砂やつてくる
由多香

三幸川柳教室 古久保和子報

予定では悠々自適はずだった
予定表義理も入って賑やかに
春眠に消えてしまった予定表
予定外臨時出費に面食らう
予定外の出費へ財布うろたえる
人生の午後の予定は風まかせ
予定にはないハードルが前にある
合理化で座る予定の椅子がない
同じバジマおんなじ夢を見る予定
兄弟がせめて財産残すまい
領いて社長は聴いてくれる人
どん底へ落ちて分かったお陰様
虚しさを分かつてほしい昼の月
叶うなら君の鼓動の分かる位置
モザイクが消えたら魔女もただの人
風穴を開けると分かった風の道
妻のことやと分かった定年後

道子 知恵 小生 幸次郎 ヒロ子 一弘 登美 艶子 風花 由多香
桂香 一步 起世子 義男 みね 徑子 次根 准一 章子 信子 孝義 幸 当代 碧 町子 千秀 智三

親心分かつて戻るプーメラン
分かる振りせねば時は越えられず
日本に住んで日本が分からない
領いてしかし山葵は利かせとく
充電をすれば五感がまだ弾む
やや醒めて弾んだ足が重くなる
寒さなど忘れて弾む立ち話
調子よく弾んだ毬が帰らない
思い切り弾んで君にとどきたい
妃殿下の欠伸はいつも不発弾
一区切りついた所でもいい欠伸
呑みこんだ欠伸險に住みついた
生欠伸つづく人生ロスタイム

川柳大阪 高木 信醉報

夢無限春の芽ばえにある生氣
福祉だと税率アップまた浮上
命あるかぎり静かに支えあい
団体割引切符の手間賃引いてある
任せとき胸を叩いたのは女
見えぬとも笑顔が明日を連れてくる
立春を告げるがごとく草芽たち
義理チヨコをそやなあの人外しとこ
人波を逆らい歩く朝帰り
人生を逆さに辿る遍路みち
逆らった男が社長になるらしい
ロボットの浮上社員を困らせる
世の中の流れに逆らいドジを踏む
嫁に来て家事は年中無休です

八重子 公子 和子 かずみ 美枝子 清史 武 登美代 保州 幹子 イセ 昇 朱夏 朝子 ダン吉 民 章久 美籠 隆司 タカ子 孝一 いつわ 芳香 利昭 五月 いろお

休むのが罪の意識の日本人
浮上した憲法論議にある不安
嫁はんのグチにそやんと空返事
飲みまっかそやなお先に胃腸薬
逆らつてばかりはいない青い竹
私もいつか爆発休火山
こんな世にだれが浮くかと河童たち
前向きに生きよう休肝日しよう
下戸なげく酒で人格狂うかな
風雪に逆らう木立凜と立つ
鬼は外ババはベランダ冬蜜
一点を見つめる災厄に出ぬ言葉
財布さえ嫁と孫とを使い分け
新成人財源ですぞ大切に
かたときも休まないのね君の口
煽りたて正確ぬきの報道陣

川柳塔打吹 大森 孝惠報

猿山のボスがウインクしてくれた
花見酒桜の花も酔い心地
満開の桜を抱いて酒を酌む
花まつり屋台のタコはモロッコ産
杖にすがつても命のかぎり咲く桜
競売の家のさくらも満開だ
春おぼろ首塚の目も開く夜
ふところで犬が首出し道案内
鶴の首四方八方視野のうち
納得は行かぬが首は縦に振る
年金を見くらべている首と首

修 東吉 善純 彦太 比呂志 青道 一步 美花 喜楽 柳弘 司 川童 まつお 信醉 美ツ千 美美子 清 照彦 重忠 石花菜 克枝 貴恵 玲坊 龍枝 善江

死ぬときに手足も首もあるように
よく喋る首から上の超美人

春うらら鎌首あげた蒔かぬ種
一人寝が枕を抱いて寝言いう

満ち足りた顔で抱える米袋
花びらは後生大事にめしべ抱く

腕一杯オモチャを抱いて孫が来る
無くなつたものはないかと我が身抱く

飲むたびに別れ惜しんで肩を抱く
抱きしめてやりたい親のない羊

不眠症枕抱く癖直らない
ペイオフで札束抱いて寝てみたい

ツイカーで二次会さきまる飲み仲間
お互いが修羅場くぐつて来た仲間

我が家にも福の仲間がやつて来た
この地球国境はらい皆仲間

定員が過ぎて仲間が降ろされた
ネクタイのいらぬ仲間がよく笑う

抱きしめて頬ずりをして嫌われた

富柳会

池

森子報

母似です恋しくなると見る鏡
雪中の赤一輪が人を呼ぶ

今日の風呂母のおなかにいた感じ
直下型文明なんて脆いもの

その時は仮面を捨てて風に舞う
その時を予感別れのセレナーデ

桃の花そろそろお世話してあげる
錯覚の風が私に炎をつける

完司

瑩子

たけ代

京子

和枝

公恵

三津子

義人

節元

紀美恵

博丈

幸子

美知江

和子

久芽代

芳光

孝恵

やわらかいタツチで本音吐かされる
傷癒えるまで隠し絵にうづくまる

仕合せを語る物腰やわらかい
桃咲いて古き男雛の若々し

繰り返す返事の中で箸を割る
次の手はパントマイムで攻められる

その時に選んだ道と四つに組む
世話好きな姑には負けておくバズル

大空のかなたに捨てた欲あまた
家中のリズムが狂う妻の風邪

やわらかい日差しへ顔を上げて
許された背にやわらかい風が吹く

王国の凋落寒い風が吹く
遣伝子が切れてロボット買いに行く

春の雪消えてはならぬものひとつ
産声は鶴が舞い発つその時に

世話好きの彼が鬼籍でまた世話を
貧乏神を叱りとばしている元氣

デジタル化頭も財布も追いつけず
嘘と知る昨日の耳を捨てました

いのちくるくる青空のめまい
その時は衣一枚脱ぐ天女

高知川柳社

川竹

松風報

ポスト今日嬉しう便りの手紙抱く
雨の日もひたすら人を待つポスト

入選も没も知らずにポスト呑み
手土産を持ってポストへ天下る

ポスト小泉攻めあぐねてる中二階

紅紫朗

初太郎

順子

伸雄

鬼焼

宏至

あかり

アキ

深雪

和代

信子

奏子

政義

哲史

奈保美

夕子

冬虹

片便りポストの知った事でなし
親と子の価値観の差を考える

よう捨てず隅に溜まった不用品
正論が隅で泣いてる多数決

隅っこで平和に生きる幸がある
青年の画布をはみ出す青い空

空を飛ぶ鳥になりたい恋心
折々に衣変えてく四季の空

青空が恨めしくなる花粉症
いい湯だな月も映える露天風呂

少年の夢に無限の空がある
退院をしたと散歩の道すがら

いずも川柳会

佐藤

治代報

さらさらの血液で書くお詫び状
わだかまり解けてさらさら胸の内

青い海心の若さ呼び戻す
死にそうで気合いを入れて生きている

気合い入れ赤くなるうとするトマト
肩ぼんと叩いて気合い入れてやる

なぜそんなこわい顔した仁王様
青くさい議論成長株になり

なぜか今でも抜けない棘が一つある
ポキポキと気合いを入れていい目覚め

うさぎとなぜか心が舞い上がる
指間からなぜか虚しい鳥が飛ぶ

雲間からからころ亡母の日和下駄
樹を抱けばむかし昔の水の音

雪とけて青い絵の具を買いに行く

快風

幸

京子

みどり

まさ子

典雄

和江

則子

てるみ

栄珍

佳風

竹萌

圭詩朗

浜丘

好子

治代

美江子

青い空今日も回そう糸車

まだ未熟どこを切つても青からう

なぜだろう君に涙の跡がある

本番へ気合いばかりが空回り

散る花になぜか言えない本当のこと

さらさらと写真のうしろ風が吹く

どたん場で気合いを入れる笛を吹く

砂時計さらさら疑念残さない

咲いてなぜ逢えぬ哀しい月見草

さらさらと流れる水に憧れる

ドレミファがいのちの音とたしかめる

吾が家にはなぜか毎日銭がない

風の音苛立つ心がき立てる

さらさらと遺言状が書けますか

脳天にお灸を据えてさらさら

翠洋会

谷口

たんぽぽと軽いうわさが風にのる

春風に花粉いたずらして困る

暮れなずむ風に吹かれて通り抜け

向い風ひとりきままな旅の空

波風を立たせたくない嫁姑

方円に随う水になり切れぬ

花の宴果てて幹事の屋台酒

うっかりとのつた話がくされ縁

老いて知る母が縁起をかつぐ理由

あの涙演技と見えぬひとしずく

孫ほめる母の演技と思えない

老練な演技主役を引き立てる

満江

玲子

多喜

昌枝

芙佐子

すみこ

多輝子

多賀子

房子

きみえ

蘭水

茂美

まこと

文子

章峰

義報

捷也

春

観子

満作

千梢

理恵

富子

舞夢

照子

みつ子

絹子

良一

反省と詫びてる猿の名演技

襟足が見事な演技する女形

阿呆なこと言いはんなどつねられる

おおきにと大阪弁のいいひびき

好きな子にまたいぢびりがてんこする

ナイフより人傷つけるのは言葉

外国語ばかり聞こえる通り抜け

カラ残業公費天国五兆円

軸足を覚えてやり直してみよう

びつくり水注して女を黙らせる

お歳です悪い所はありません

子がくれた祝い袋が照れている

ものさしの違う兄弟仲が良い

川柳さんだ

北野哲男報

喜びを分かち平和のありがたさ

動いたなお腹をノック喜んだ

赤を着て歳に喜びます感謝

偶発の喜び悩み不眠症

癖になる味です私おんなです

真つすくに家に帰らぬ癖がある

サクラサキ爺の年金当てにされ

もうとまだ使い分けしてまだ未完

じつと見る川面に遊ぶ花筏

燃え尽きたように太陽海へ落ち

西の空読んで漁師は明日を決め

日本語のツナミが知れた世界中

ピカピカの夢がふくらむランドセル

志華子

桃花

久峰

石舟

恭昌

正坊

会美

千歩

義昭

日の出

蛙

さと美

朝子

順子

開子

一之

歳子

忠

朋月

好文

好江

房江

雅司

正和

利昭

藤朗

千代

廃校の階段校歌覚えてる

寝た切りでないが一日座りきり

岩美川柳会

石谷美恵子報

怒鳴り声の父にも優しくさが覗く

内心は見たい他人の貸し金庫

髭面も内心ビビル注射針

強そうで内心涙もろい人

心電図乱れ内心隠せない

内心は人いちはいに欲しい金

内心は痛みかゆしの嫁姑

内心は隠す化粧を厚く塗る

内心はうふふ線香あげている

語りたくない内心を聞きたがる

内心に触れて雷落とされる

愛情を混ぜるとピンクに染まる恋

愛と憎混ぜて夫婦の和を保つ

生きるとは悲し愛憎混ぜながら

嘘ひとつ混ぜてまあるい風になる

妻と夫混ぜたら文句ないんだが

バスツアー美人ガイドのうまい嘘

物知りか俄かガイドに早変わり

ガイドなどいらぬさくらは咲いて散る

年配のガイドはやはり味がある

バス旅行習った歌が今もできる

特攻の基地でガイドに泣かされる

方言のガイドは村のポラントイア

責任の胸に名札が生きている

章子

哲男

忠良

重忠

公乃

雅女

一京

はるお

公子

蟹郎

たぬ

茶子

菖子

アキ

圭一郎

螢

きみ子

一瑠

静生

孝男

睦子

節子

節子

和子

かつみ

裕枝

幸枝

裁かれています多色を混ぜ過ぎて

美恵子

川柳クラブわたの花 井尻

民報

ヨソ様のビデオ見ながら午後のお茶
人生の真ん中あたり疾うに過ぎ
友達をふやし余生の財産に
携帯を持って出掛ける野良仕事
冬大根君もう抱けぬ春そこに
にこやかに無料でいいよという話
水面化フジライブドアド真ん中
シベリアの海が恋しい蟹の泡
よろめいて楽しい宴果てにけり
菜の花へ紋白蝶の浮気癖
母さんが嬉し涙を流してる
泡ぶくぶく孫は御機嫌皿洗い
約束の午後へいそいそイヤリング
下積みめ位置で浮上を狙ってる
半透明翼の深みを読んでる
山盛りの夕餉も昔ひとり膳
川の字の真ん中に居る安堵

宏至
ミツ子
君江
宏
きらり

何食わぬ顔が出来ないあかんたれ
自慢ばなし疑問を抱くが褒めておく
蟻の群れ真ん中にある私たち
止めどころレッドカードの出る前に
水面化フジライブドアド真ん中
にこやかに無料でいいよという話
シベリアの海が恋しい蟹の泡
よろめいて楽しい宴果てにけり
菜の花へ紋白蝶の浮気癖
母さんが嬉し涙を流してる
泡ぶくぶく孫は御機嫌皿洗い
約束の午後へいそいそイヤリング
下積みめ位置で浮上を狙ってる
半透明翼の深みを読んでる
山盛りの夕餉も昔ひとり膳
川の字の真ん中に居る安堵

欣子
幸枝
晴美
俊子
浩三
赤妙子
ますみ
敏男
いっふみ
義明
知佐子
美代子

厚遇で赤字を増やす大阪市
鳩の群れ気遣いながら行くタクシー
春彼岸事故の現場に花の束
花粉症縁が切れずに困ってる
春風に老いもうずいてウオーキング
春一番恋も一服花粉症
片日あけよい事だけを見つめよう
新しい服で送ったベットの死
呼び捨てにされて嬉しいクラス会
足萎えて人の情けが身にしみる
花の香に酔いては道に迷い込む
騒がしい世にも変らぬ桜が咲く
弘さん鳥さん来たよと孫が言う
新幹線発車静かに遠ざかる
老春謳歌すべては夢の中のこと
判子押しほとけ心が仇になる

厚遇で赤字を増やす大阪市
鳩の群れ気遣いながら行くタクシー
春彼岸事故の現場に花の束
花粉症縁が切れずに困ってる
春風に老いもうずいてウオーキング
春一番恋も一服花粉症
片日あけよい事だけを見つめよう
新しい服で送ったベットの死
呼び捨てにされて嬉しいクラス会
足萎えて人の情けが身にしみる
花の香に酔いては道に迷い込む
騒がしい世にも変らぬ桜が咲く
弘さん鳥さん来たよと孫が言う
新幹線発車静かに遠ざかる
老春謳歌すべては夢の中のこと
判子押しほとけ心が仇になる

もつれ糸ややこしなつて知らん顔
母の母そのまた母の雛飾る

三郎
よね蔵

クリニツク翁媪の拠り所
目隠しの手をそのままにやわらかな君
災難は明日は我が身も今日の幸
新しい帽子の色の春らしく
災害は人の一生狂わせる
夜もすがら出来ぬ川柳酒に逃げ
可哀そうニートを囲む見えぬ壁
友情が糧になつてこのやる気
厚遇で赤字を増やす大阪市
鳩の群れ気遣いながら行くタクシー
春彼岸事故の現場に花の束
花粉症縁が切れずに困ってる
春風に老いもうずいてウオーキング
春一番恋も一服花粉症
片日あけよい事だけを見つめよう
新しい服で送ったベットの死
呼び捨てにされて嬉しいクラス会
足萎えて人の情けが身にしみる
花の香に酔いては道に迷い込む
騒がしい世にも変らぬ桜が咲く
弘さん鳥さん来たよと孫が言う
新幹線発車静かに遠ざかる
老春謳歌すべては夢の中のこと
判子押しほとけ心が仇になる

晚翔
忠義
三枝
文好
みさと
恵美子
一炊
はつよ
一歩
ゆき子
れい子
さち子
団地
かすみ
星花
ルイ子
一幸
高栄
任有
とし子
綾子
とよ子
さとし
昭一朗

子の顔にどこか似ているお雛さま
もてたいのやせたいのよと四苦八苦
猛烈な野次にはじつと死んだ振り
皴面を引つ張って刺る不精髭
夢ばかり見て現実叩かれる
叩かれて済むくらいなら突つ張ろう
ボケぬよう自分の頭よく叩く
もの忘れ家さがしばかりして暮れる
皴のある方がわたしの表です
正直は子供の時叩き込む
どん底も天辺も見た札の皴
皴かくす高いクリーム塗り重ね
物憂い日やたら派手着てシネマ館
昨日見た女優の皴が今日は無い
整形の門を叩いて若返る
手を叩く誰でも出来る健康法
娘の掃帚幸せそうな笑い皴
勲章の皴なんだから隠さない
向き合わせ箱に仕舞つた内裏雛
女系三代女難貴様つけて見え
さすがプロ叩いただけで知る故障
手作りの雛を飾つて一人酒
叩いたりぬくめてみたりジャムの蓋
もきたての野菜かぶつてしんとする
叩いたらボロがつきつ顔を出し
もういいかい矢の催促の新芽たち
カメラアイ顔のアップは止めてんか
もう嫌よやめてちょうだい死んだぶり

深雪
玄也
朋月
鐘造
文
日の出
かりん
篤子
扶美代
好
公誠
りつえ
潤子
恵勇
伸子
泰子
千代
楓
五月
俣子
舞夢
なきさ
像山
梓
和夫
八千代
時雄

もつれ糸ややこしなつて知らん顔
母の母そのまた母の雛飾る

春蘭
冬虹

柳界展望

一輪車 八木 千代
補聴器がすっかり聞いていた本音 山本 玉恵
〈総合順位〉4位―西出楓
楽 6位―河内天笑

☆野村太茂津卒寿記念川柳大会は、4月10日和歌山J A会館で99名の参加を得て開催された。当日の本社関係者秀句は次のとおり。

正眼に構え卒寿は揺るぎない 木本 朱夏
神様にもらう一日分の役 太田扶美代

わたくしの癖です名刺がわりです 川上 大輪
種を播く天運地運信じき 播本 充子

☆川柳大原五〇〇号・合同句集発行記念川柳大会は4月24日、大原高校で215名の参加を得て開催された。当日の本社関係者の秀句及び総合順位は次のとおり。これからは難儀するだろ

☆新家完司氏(理事・鳥取県)は、川柳展望社の第4回展望賞準賞を受賞。
☆豊中もくせい川柳会は、平成16年度の年間賞を次のとおり決定した。
〈得点賞〉 ○内は順位
①穴吹尚士②江見見清③上村 隆④田中正坊⑤玉置 重人

〈特別賞〉野島満寿巳
▽御芳志御礼△
☆木本朱夏さん(常任理事・和歌山市)から、「転生」出版記念として金一封拝受。
▽同人動向△

●松川芳子さん(同人・京都市)は、平成16年11月4日逝去。79歳。(追悼記事は105頁に掲載)
●西谷大吾氏(同人・青森県)は、3月22日逝去。74歳(追悼記事は106頁)
●中田あい子さん(同人・大阪市)は、4月18日肝臓病のため逝去。東大阪玉泉院で葬儀が執り行われた。

▼計 報▲

新同人紹介

小川賀世子
おみつ子・充子・あやめ推薦

根岸方子
ねぎし まさこ
―(故)薫風・みつ子・充子推薦

星野育子
ほしの いくこ
―みつ子・蘭幸・充子推薦

85歳(追悼記事は107頁)
●福原幸男氏(同人、福原悦子さん夫君) 4月30日脳梗塞のため逝去。87歳。
▽訂正と削除お詫び△
5月号 97頁中段5行目、美籠↓倫子 116頁下段17行目、病む友へ…を本人申し出により削除
常任理事会 5月10日(火)出席者18名 ①薫風名誉主幹を偲ぶ会・追悼句会打合せ ②11回まつりの件 ③愛染帖選者・茴香の花欄検討・二賞選者 ④特別常任理事会の件 ⑤大会参加確認 ⑥同人承認3名 ⑦その他 特別常任理事会 58頁参照

句会名	日時と題	会場と投句先
ほたる川柳同好会	14日(火)午後1時から 俗・粘る・ふわふわ	豊中市立堂池公民館 阪急・モノレール 堂池駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
高槻川柳サークル 卵の花	16日(木)正午から 隠す・聴診器・やたら ルーズ・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 (投句先変更) 〒569-1118 高槻市奥天神町1-26-17 瀧本きよし
岸和田川柳会	18日(土)午後1時半から 三日月・無駄・迷惑・若しや	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅徒歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-307 長谷川呂万
川柳藤井寺	19日(日)午後1時から 恋・いまいち	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市藤井寺公団1-105 高田美代子
岬川柳会	19日(日)午後1時半から じっくり・口当り・お人好し	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川柳ねやがわ	19日(日)午後1時半締切り 予約・風呂・しぶしぶ 自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい川柳会	20日(月)午後1時から 手帳・愛想・若い・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
南大阪川柳会	21日(火)午後6時から 芯・小説・ねぎらう・こせこせ	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳クラブ わたの花	24日(金)午前9時半から 杭・素朴・遠い・ひそひそ	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市川柳同好会	25日(土)午後6時から 現金・決める・マイク・霧	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの市川柳	26日(日)午後1時から 柿・尽くす・ボート・「論文」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳ふうもん社	26日(日)午後1時から ちっぽけ・エラー・閃く	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京都塔の会	27日(月)午後1時から 朝・クール・洗濯	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳塔みぞくち	27日(月)午後8時から 船・色・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

6 月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　　ら	2日(木)午後1時から 粘る・毒・試作	奈良市立中央公民館4F(近鉄奈良④出口徒歩5分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
尼崎 いくしま	3日(金)午後1時から 揺れる・指・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	4日(土)午後1時から 図星・走る・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉吉 川柳会	4日(土)午後1時から 黄色・やれやれ・崩す	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
城北 川柳会	4日(土)午後1時締切り 省く・相植・あれこれ・自由吟	旭区 老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口の左隣り 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川柳塔 唐　　津	6日(月)午後1時半から 水着・溺れる・水平線	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
堺川柳会	9日(木)午後1時から 派手(共選)・情け な・す・び(折り句)	堺市民会館 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳塔 打　　吹	11日(土)午後1時から 奉仕・皮・叫ぶ	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博丈
川柳塔 ま　　つ　　え	11日(土)午後1時から 夢中・積木・贅・ストレス	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島崙丘
川柳塔 みちのく	11日(土)午後4時から 嘘・緑・やんわり	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-0161 青森県南津軽郡平賀町杉館字宮元53-1 小寺花峯
八尾市民 川柳会	12日(日)午後1時から ポリシー・村・握る・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室(近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川柳塔 わかやま	12日(日)午後1時から 宴・熱烈・癒す・(肉料理)	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	13日(月)午後1時から 戸惑い・塩・セット・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南西出口徒歩3分 プレラにのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西口いわゑ
尼崎 尾浜 川柳会	14日(火)午後1時から 山脈・人並み・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太

編集後記

☆薫風名譽主幹の葬儀には、たくさんのお方がお見送りいただき、厚くお礼申し上げます。

☆先生の思い出は数え切れないほどあるが、今はただただお礼を言うのみである。酸素ポンペを携えながら、男性の平均寿命である78・07歳ちょうどまで生きて下さり、川柳のために尽された功績は筆舌に表わせるものではない。7月7日の偲ぶ会、路郎忌・薫風名譽主幹追悼川柳大会（表紙裏参照）で、改めて先生のご冥福をお祈りしたい。皆様のご参加をお願いします。

☆「思い出の歌（曲）」には、17名の投稿をいただき有り難うございました。お陰で内容のある特集が編めました。

☆既にご承知とは思いますが、4月から個人情報保護法が全面実施された。当社は5千人分を越す個人情報を持つ団体ではないので、対象外ではあるがご時勢のこと、先般配布の同人名簿の取扱いについては、各自で十分に注意して下さい。

☆合併特例法が適用された99年4月以来、平成の大会併が始まり、今年3月末までに22の新たな自治体が誕生した。今年度中に65の自治体が合併する予定で、これまで32322あった市町村は、2343に減る見通しである。同人・誌友で、住居表示に変更のある方は、本社事務所宛に届け出をお願いします。

☆気温24度で水着、25度でアイスクリーム、27度で西瓜、30度でかき氷が売れるという。冷えたビールなら気温何度でも買うよ！（ふ）

五〇〇号大会を終えて

ひとこと

大原川柳社では一〇〇号毎に記念大会を開催しています。八年に一度の大会で会員一同、戸惑うことばかりです。毎年、大会を開催しては柳友たちには準備や応対が物足りなく目だるいことばかりだろうと思います。

今回、五〇〇号大会も事前投句二一〇人、当日出席も三十人あり裏方も予想外の嬉しい悲鳴があが

りました。ただ、事前投句者に大勢の欠席者があり、何回開催しても満点の大会には出来ないと実感。

また懇親会のない大会は珍しいくらい、各地の大会では懇親会が派手になりつつありますが、昔はそんなことはなかったと思います。真に川柳をされる方たちには、懇親会など望んで居られないと思います。大会当日はまともに勤められない人たちが居たとか…。一考させられる懇親会である。

（小林 妻子）

○川柳と共に生きてこられた名譽主幹の薫風先生がとうとう世を去られた。

川柳を愛し家族を愛し旅を愛された先生は近年、酸素ポンペを携えて外出をされてきたが、気力に満ちておられ不死身とさえ感じさせるほどであった。

○先生の偉大さについては次号追悼特集にて、たくさん先輩諸兄姉から語られることと思う。

私共にとつては、常に身近な存在であり、気さくに接していただいております。思い出は数限りない。

○私の川柳は毎日新聞のカルチャーで薫風先生の薫陶を受けたことからはじまる。やさしく厳しい師であった。

川柳はもとより、後姿からも多くのことを学ばせていただいている。恩義を重んじられ、礼節を尽くされる師であった。心配りも大変に細やかである。

○私は何の恩義に報いることもできず不肖の弟子であったことを悔いるばかり。ぼつかりと穴のあいてしまった淋しさを埋める術もなかったただただ御冥福をお祈りするばかりである。（希）

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（8月号）」

地名

市 県

姓・雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。





作品募集

8月号発表 (6月15日締切)

川柳塔 (8句)	河内天笑 選
水煙抄 (8句)	奥田みつ子 選
愛染帖 (3句)	波多野五楽庵 選
茴香の花 (3句)	政岡日枝子 選
「水着」	森村美花 選
「溺れる」	城多喜 選
「水平線」	角野仁清 選

初歩教室 「線」 (3句) 三宅保州担当

9月号 課題吟 「汗」「涼」「アウトドア」
初歩教室 「台風」

本社6月句会

とき 6月7日(火) 午後5時半開場・6時半締切り
—開催時間にご注意下さい。
ところ アウイーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441

おはなし
兼題 「疊む」
「相手」
「ひかる」
「女」
「便り」

西出楓 楽 選
加島由一 選
宮川寿美 選
奥田みつ子 選
河内天笑 選

席題 1題 当日発表 (各題2句以内)
会費 1000円 投句料 500円

本社7月句会 表紙裏参照

路郎忌・薫風名誉主幹追悼川柳大会をもって、本社7月句会とします

第24年度 夜市川柳募集

第1回「トップ」高瀬霜石 選
ハガキに3句 6月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページに限り、本誌最終ページに投句用紙を使用してください。
 - (2)愛染帖・茴香の花・一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限りません。ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。
 - (3)各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 八百円 (送料84円)

半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)

二〇〇五年(平成十七年)六月一日発行

編集兼 発行人 河内 權治

印刷所 美研アート

〒545-0005 大阪市阿倍野区三町二丁目1-101-16
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)66291691-4番
振替0098015133368番

第29回 全日本川柳2005年広島大会

日時 六月十二日(日) 午前十時開場

会場 広島郵便貯金ホール(大ホール)

〒七三〇〇〇〇一 広島市中区白島北町一九一

TEL 〇八二(二三三)六三六六七

宿題 第一部 締切りました

第二部 (当日投句・十一時二十分締切)

「世界」田中八洲志 選

「事件」大場 可公 選

「貝」高梨 宗路 選

各題二句 当日配布の句箋に記入

第二次選者

磯野いさむ・泉 比呂史・藤沢 岳豊

成田 孤丹・佐藤 良子

会費 四、〇〇〇円(昼食・記念品含む)

表彰 文部科学大臣奨励賞

参議院議長賞

川柳大賞

大会賞

ジュニア部門は賞状とメダルを予定

問い合わせ先

〒七三九〇〇二四 東広島市西条町御園宇六四七―七一

白井孝司方 TEL・FAX 〇八二(四二三)六六六六

*

(社)全日本川柳協会大会委員長 磯野いさむ

全日本川柳広島大会実行委員長 定本 広文

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー



コキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023
TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021
(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>